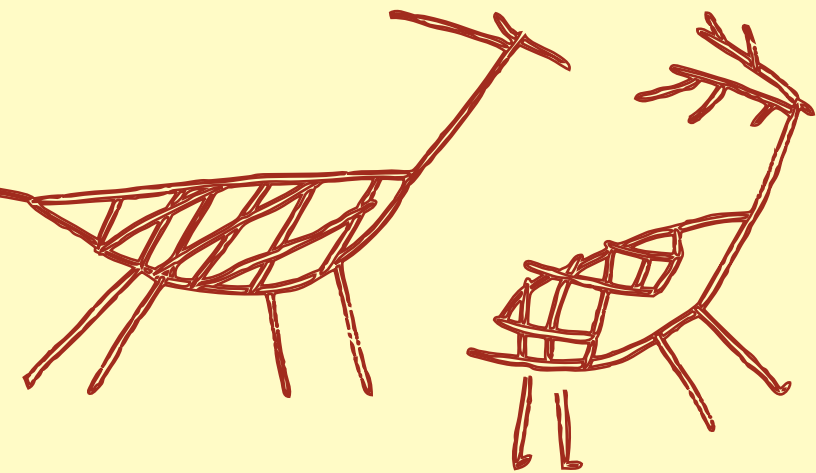
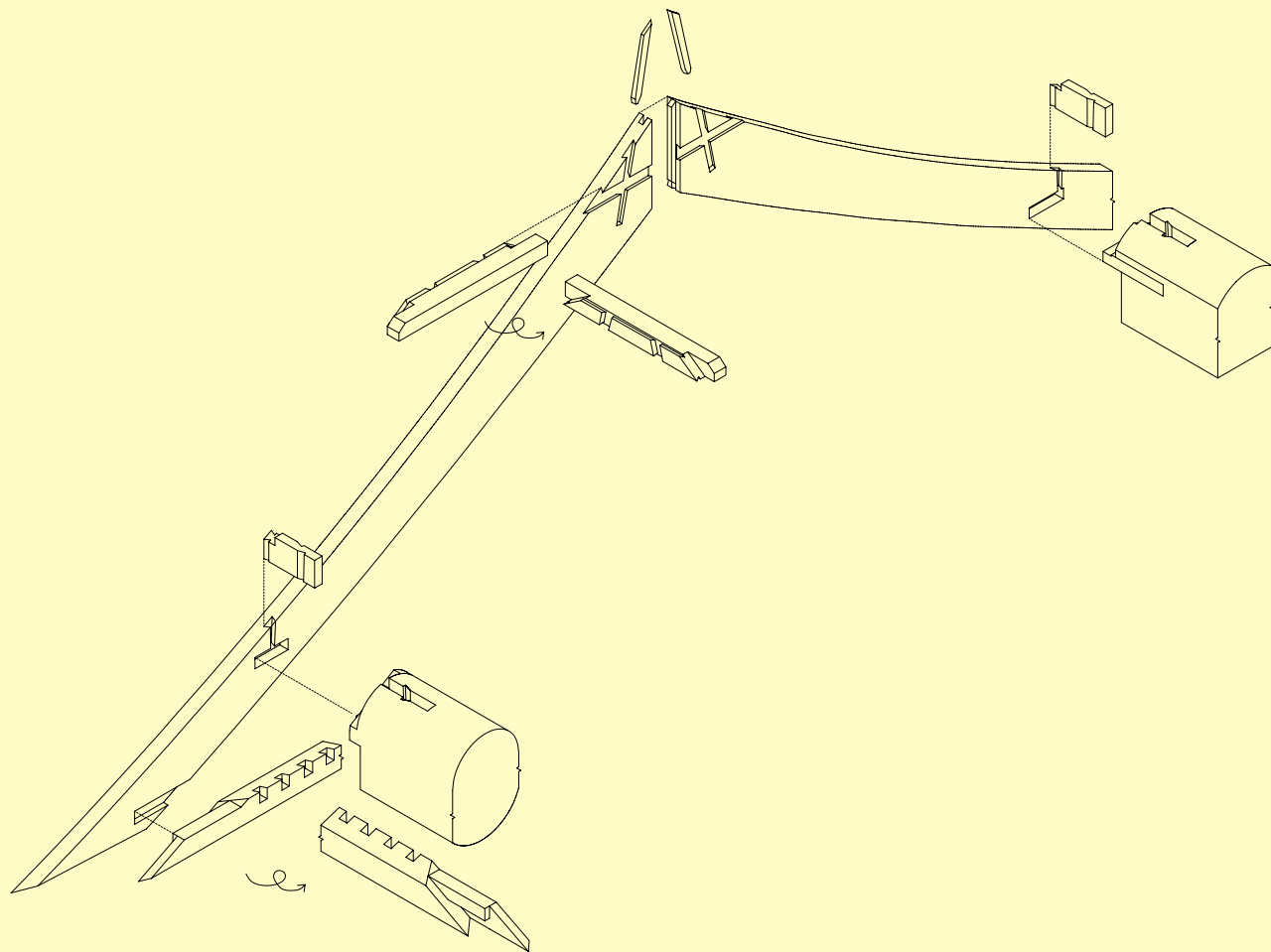




財団法人
和歌山県文化財センター年報

埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理の記録

2006





1. 水軒堤防の石堤 南西から（和歌山県教育委員会より提供）



2. 特別史跡岩橋千塚古墳群前山 A13 号墳の玄室 羨道から（和歌山県教育委員会より提供）



3. 「鹿」の絵画土器と磨製石剣 西飯降Ⅱ遺跡



4. 古墳時代後期の下駄 西飯降Ⅱ遺跡



5. 弥生時代後期の方形周溝墓（西から） 旧吉備中学校校庭遺跡



6. 平安時代の犁 野田地区遺跡



7. 修理が竣工した総持寺本堂



8. 組立て中の福勝寺本堂

目 次

巻頭カラー写真図版

1. 水軒堤防の石堤
2. 特別史跡岩橋千塚古墳群前山 A13 墳の玄室 羨道から（和歌山県教育委員会より提供）
3. 「鹿」の絵画土器と磨製石剣 西飯降Ⅱ遺跡
4. 古墳時代後期の下駄 西飯降Ⅱ遺跡
5. 弥生時代後期の方形周溝墓（西から） 旧吉備中学校校庭遺跡
6. 平安時代の犁 野田地区遺跡
7. 修理が竣工した総持寺本堂
8. 組立て中の福勝寺本堂

平成 18 年度 （財）和歌山県文化財センター受託事業

埋蔵文化財の発掘調査

県指定史跡水軒堤防の発掘調査	3
和歌山城跡の発掘調査	7
特別史跡岩橋千塚古墳群前山 A13 号墳の発掘調査	10
粉河寺遺跡の発掘調査	14
西飯降Ⅱ遺跡、丁の町・妙寺遺跡の発掘調査	16
名古曾墳墓の発掘調査	22
野田地区遺跡の発掘調査	26
旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査	29
藤並地区遺跡の発掘調査	31

文化財建造物の保存修理

重要文化財加太春日神社本殿保存修理の設計監理	33
重要文化財旧中筋家住宅保存修理の設計監理、修理修復	34
重要文化財福勝寺本堂ほか 2 棟の保存修理の設計監理	36
重要文化財護国院多宝塔、鐘楼、楼門保存修理の設計監理	38
重要文化財那智山青岸渡寺本堂の保存修理設計監理	39
県指定文化財総持寺本堂保存修理の設計監理指導	40

関連研究

[資料紹介] 西飯降Ⅱ遺跡出土の絵画土器	41
[資料紹介] 野田地区遺跡出土の犁	44
水軒堤防の矢穴	48
木材あれこれ：福勝寺の修復現場から	51
護国院多宝塔ほか2棟の塗装調査	53

普及活動

2006年度の普及活動を振り返って	55
-------------------------	----

財団法人和歌山県文化財センター平成18年度概要	59
-------------------------------	----

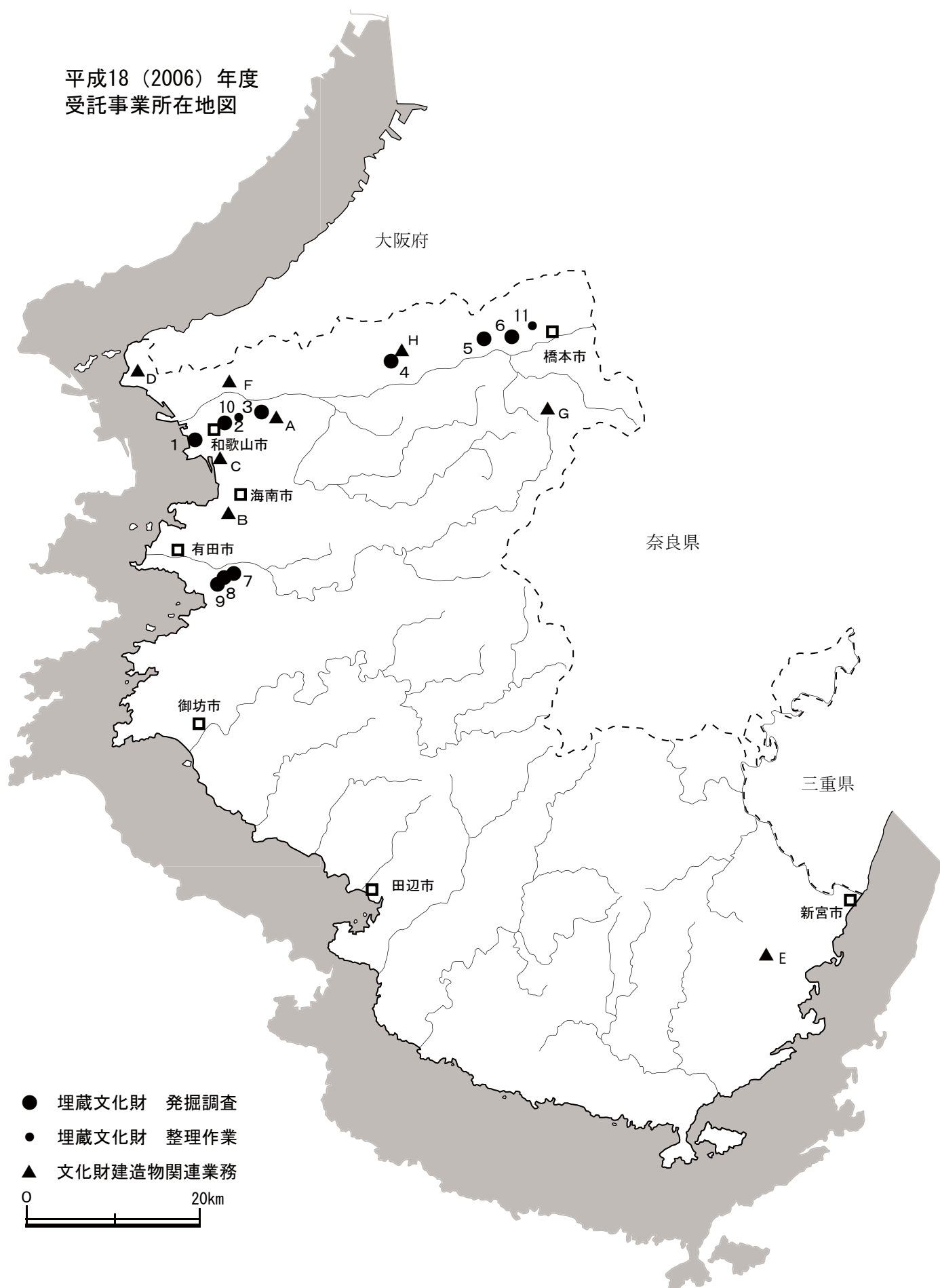
本書では、和歌山県教育委員会が発行する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』を縮小、一部加筆し、国土地理院発行の縮尺1：25000地図から引用している。

表紙： 旧中筋家住宅表門破風取り合い
西飯降Ⅱ遺跡出土の弥生土器に線刻された鹿

平成 18（2006）年度 財団法人和歌山県文化財センター受託事業一覧

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理事業					
	事業の名称	所在地	契約期間	面積	委託機関
1	平成 18 年度県指定史跡水軒堤防発掘調査事業	和歌山市	18.02.20 ～ 19.03.30	480 ㎡	和歌山県
2	和歌山地方・家庭裁判所増築工事に伴う和歌山城跡発掘調査事業	和歌山市	18.09.08 ～ 19.03.30	691 ㎡	国土交通省
3	特別史跡岩橋千塚古墳群保存修利に伴う発掘調査事業	和歌山市	18.06.01 ～ 19.03.28	古墳 1 基他	和歌山県
4	長屋川砂防環境整備工事に伴う粉河寺遺跡発掘調査事業	紀の川市	18.09.06 ～ 19.03.29	255 ㎡	和歌山県
5	一般国道 24 号京奈和自動車道（紀北東道路）建設に伴う遺跡発掘調査事業	伊都郡 かつらぎ町	18.04.11 ～ 19.03.30	18876 ㎡	国土交通省
6	県指定文化財ランクアップ推進事業に伴う名古曾墳墓発掘調査事業	橋本市	18.07.31 ～ 19.03.03	400 ㎡	和歌山県
7	平成 18 年度高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う野田地区遺跡発掘調査事業	有田郡 有田川町	18.04.05 ～ 19.03.30	807 ㎡	西日本高速道路 株式会社
8	吉備町公共下水道事業における処理施設建設に伴う旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査業務事業	有田郡 有田川町	18.04.01 ～ 19.09.29	2989 ㎡	有田川町
9	吉備金屋線道路改良調査（藤並地区遺跡発掘調査）事業	有田郡 有田川町	18.08.17 ～ 19.03.31	1807 ㎡	和歌山県
10	太田・黒田遺跡（県第 1 次）出土遺物整理事業	和歌山市	18.04.11 ～ 19.03.20	—	和歌山県労働局
11	京奈和自動車道（橋本道路）関連遺跡第 2 次出土遺物整理事業	橋本市	18.04.11 ～ 19.03.28	—	国土交通省
文化財建造物の設計監理					
	事業の名称	所在地	契約期間	棟数	委託機関
A	重要文化財 旧中筋家住宅の保存修理設計監理	和歌山市	18.04.01 ～ 19.03.31	6 棟	和歌山市
	重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか 5 棟の保存に係わる修理修復		18.04.01 ～ 19.03.31	6 棟	和歌山市
	旧中筋家住宅未指定建造物の調査		19.01.12 ～ 19.02.21	4 棟	和歌山市
B	重要文化財 福勝寺本堂ほか 2 棟の保存修理設計監理	海南市	18.04.01 ～ 19.03.31	3 棟	宗教法人 福勝寺
C	重要文化財 護国院多宝塔他の保存修理設計監理	和歌山市	18.11.01 ～ 19.03.31	3 棟	宗教法人 護国院
D	重要文化財 加太春日神社本殿の保存修理設計監理	和歌山市	18.11.01 ～ 19.03.31	1 棟	宗教法人 加太春日神社
E	重要文化財 那智山青岸渡寺本堂の保存修理設計監理	那智勝浦町	18.04.01 ～ 18.12.31	1 棟	宗教法人 那智山青岸渡寺
F	県指定文化財 県指定文化財総持寺本堂の保存修理設計監理指導	和歌山市	18.04.01 ～ 19.03.31	1 棟	宗教法人 総持寺
G	県指定文化財 金剛峯寺大主殿保存修理設計監理	高野町	18.06.02 ～ 19.03.31	1 棟	宗教法人 金剛峯寺
H	県指定文化財 十禅律院本堂ほか 2 棟の保存修理設計監理	紀の川市	18.04.01 ～ 19.03.31	3 棟	宗教法人 十禅院

平成18（2006）年度
受託事業所在地図



■ 県指定史跡水軒堤防の発掘調査

遺跡の時代：江戸時代

所在地：和歌山市西浜

調査の原因：範囲・内容の確認

調査期間：2007.2 - 2007.3

調査コード：2006 - 01

はじめに

県指定史跡水軒堤防は、和歌山市西浜に所在する江戸時代に築かれた防潮・防波堤防で、平成 17 年度に実施した道路建設に伴う発掘調査の結果、高い技術で築造された石積み堤防であることが明らかになった。これを受けて、今年度和歌山県教育委員会によって水軒堤防の範囲と内容を把握するための調査が計画された。そのうち堤防の石堤南端部を確認するための発掘調査を、県教育委員会の委託をうけて当センターが実施した。

遺跡の概要

水軒堤防は、紀ノ川河口左岸から雑賀崎に向かって内湾して伸びる砂堆上に築かれており、堤防の南端は紀州徳川家の御用地で国指定名勝養翠園まで続いている。東には北から南方向に一直線に開削され

た水軒川が流れている。

田中敬忠『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二十二輯（1950 年）によれば、水軒堤防は初代紀州藩主である徳川頼宣の時代の寛永年間（1624～1644 年）に朝比奈段右衛門（隠居名水軒）が約 13 年かけて築造したとある。規模は高さ 3～6 間（5.4～10.8 m）、全長 900 間（約 1.6 km）で、表築石は和歌山城改修の和泉砂岩、裏築石は雑賀崎石を使用していると記載されている。

堤防の西側に広がっていた砂浜は昭和 30 年代以降埋め立てられ、昔の景観を偲ぶことができないが、堤防の石積みは昭和の初め頃まで露出していたことが「雑賀村誌」に記載された地図や、地元の人達の話などから窺うことができる。昭和 34 年には、江戸時代に築かれた海浜堤防として県指定史跡に指定されている。

平成 17 年度の調査

砂に埋もれてしまったことで、水軒堤防の石積みの存在はしばらく忘れ去られていたが、昨年度、和歌山下津港本港 1 号線交差点部分の拡張工事によって発掘調査が実施された結果、精巧に加工した切石づくりの石堤が姿を現した。石堤は高さ 3 m 以上、上面の東西幅が 3.8 m を測り、西（海）側の石積み勾配は約 40 度で和泉砂岩の切石を布積みしているのに対して、東（陸）側の石積みは約 53 度と急勾配で緑泥片岩（青石）と粗加工した和泉砂岩を交互に積んでいることが明らかになった。また、東側石積みを覆うように土盛がおこなわれていることも確認された。

調査の成果

調査地点は、国指定名勝養翠園の北約 300 m 付近で、昭和 2 年に書かれた『雑賀村誌』や、地元の間



水軒堤防の位置（指 19 縮尺 1/50000）



水軒堤防遠景（南から）

き取り調査で石堤の南端部と想定された箇所である。現状は標高6～7mの砂堤となっており、昭和前半期まで防風林の役目を果たしていた松林は、雑木林に様変わりしている。

調査の結果、現在の砂堤から2～3m下で石堤を確認することができ、南端部もほぼ想定した位置で明らかにすることができた。石堤は、上端部の幅（東西）約3.5mで、高さ4.2mを測り、長さ（南北）約12mを検出した。また、石堤背後の石積みを覆うように土（砂）盛が築かれており、補足調査の結果、幅約7mであることが明らかになった。

石堤 石堤は、平成17年度に検出した堤の南端部に相当することからも構造的にはほぼ同じで、上端部がほぼ平らで断面形状は台形を呈する。石堤の西側面（海側）から南側面に折れる角度は、75～80度とやや鋭角になっている。上端面、西側面および南側面西半分の石積みは、和泉砂岩の切石を用いて構築している。西側面および南側面は「切り込みハギ」技法を用いながら「布積」技法で水平方向に目地が通るように積んでいる。石材は基本的に方形あるいは長方形を呈し、大きさは35～65cmで、表面が平らでなく、中央部が丸く膨らむように加工している。

上端面の石材は40～70cmで、側面よりやや大き



石堤西側面（西から）



石堤南側面（南から）

いものを使っており、堤防自体に安定感を与えている。切石の加工はやや甘く、目地も側面ほど直線的に通っていない。

西側面と南側面の稜線部分の石積みは、目地の隙間がない極めて精巧な「切り込みハギ」技法で、丸みを持つように平滑で堅牢に築いている。

南側面東半分の石積みは、緑泥片岩の割石を横置きして使用しており、西半分の和泉砂岩との境は凸凹状に組み合わせられている。石堤の南東角に相当する部分には雑な「算木積」技法を用いて、和泉砂岩と緑泥片岩を交互に使い、内（西）側方向が低くなるように斜めに置いて築いている。

土盛下になる石堤東側面の石積みは、サブトレンチによって一部が明らかになっている。上端面に近い部分は和泉砂岩で布積され、その下部は緑泥片岩が多用されている。

石積みの勾配は、西側面が約38度、南側面が約50度と南側面の勾配が急で、これは昨年度明らかになっている土盛下となる東側面石積みの勾配と似通っている。

石堤基部 基底部の構造は、南側面の南西付近を石積み下まで掘り下げた結果、基本的に結晶片岩の割石を敷き、その上に石堤を築いていることが明らかになった。

石堤南側には、基底部の高さで石を敷いている。敷石は表面にあまり加工を施さない和泉砂岩を並べた後に、目地に緑泥片岩の割石を立てて詰めている。調査区南側には敷石が確認できないことから、石積みの基底部が波に洗われて崩壊しないように幅約3mの敷石を施して保護していたと考えられ、石積みのコーナー付近で敷石がない部分については、波浪によって流失したものであると理解することができ



土盛南東部コーナーの石積み（東から）

る。また、石積み西側面の基底部は、補足調査でサブトレンチを設定した結果、緑泥片岩の長い割り石を1.5m以上の幅で石堤と平行するように縦置きして敷石としていましたが、調査区の面積が限られ、浸水が激しいため幅や詳しい構造については明らかにできなかった。

土盛 石堤背後の土盛に2箇所のサブトレンチを設けた。掘り下げを最小限に留めているが、平成17年度の調査でも確認しているように黄橙色を呈する土で上面を突き固めている。その直下は細砂となるが、0.5～1.0m下にも叩き締められた面があり、その上面には和泉砂岩の割り石が詰めていた。

土盛の南面は、石堤南側面と揃うように緑泥片岩で石積みが施され、東に約7m伸びた後、カーブを描いて背面（東側面）に続いている。石積みは東に進むにつれ粗雑になることが観察できる。

まとめ

今回の発掘調査で水軒堤防の石堤南端部分を明らかにするとともに、石堤基底部、背後の土盛などの構造を解明することができた。

文献から推察できること 水軒堤防は紀ノ川河口から水軒川河口の養翠園までの延長約2.8kmある砂堆上に築かれているが、そのうち石堤が存在するのは今回の調査区を南端として部分的であったことが安政年間（19世紀中頃）に書かれた絵図「異船記」や昭和2年に書かれた『雑賀村誌』に載せられた地図から窺うことができる。『雑賀村誌』の地図は、今回の調査区を設定する根拠となったもので、発掘調査によって地図の正確性はかなり高いものであることが裏付けられた。地図には石堤北端部を示す書き込みもあり、それより石堤の長さがおおよそ1km余りであったと窺うことができる。

前述の『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告

書』で、水軒堤防の規模は「・・・石堤は南方の裏堤延長百八十間余、中央の表堤は四百八十間余、北方の裏堤は二百四十間余で中央の表堤の上路面幅六間余、裏堤も上路面幅南北堤共一間余で



図1-2 昭和2年『雑賀村誌』所載の地図

堤防の高さ三間乃至六間余にして全延長九百余間である」と記されている。この記述のうち「中央の表堤」が石堤部分に相当すると考えられ、長さも『雑賀村誌』の地図から想定したものに近いと言える。「南方の裏堤」は、今回検出した石堤南端部から養翠園の距離に等しく、この区間に存在したと考えられる。また、「北方の裏堤」についても、石堤の北端部からさらに北へ400～500m伸びていたことが窺える。「表堤の上路面幅六間余」については、石堤と背後の土盛の幅を合わせた数値にほぼ相当していることが分かる。裏堤は調査では確認することができなかったが、上路面幅が一間余と、表堤に比べかなり小規模であったことが窺える。

ところで田中氏が記述した時点で、石垣がかなり埋没していたと記されていることから、記述の内容が現地測量に準拠するものか、古い文献から引用したものか不確かなところがある。実際、堤防の高さは調査で明らかになった数値とは大きく異なっており、記述すべてを鵜呑みすることには躊躇せざるを

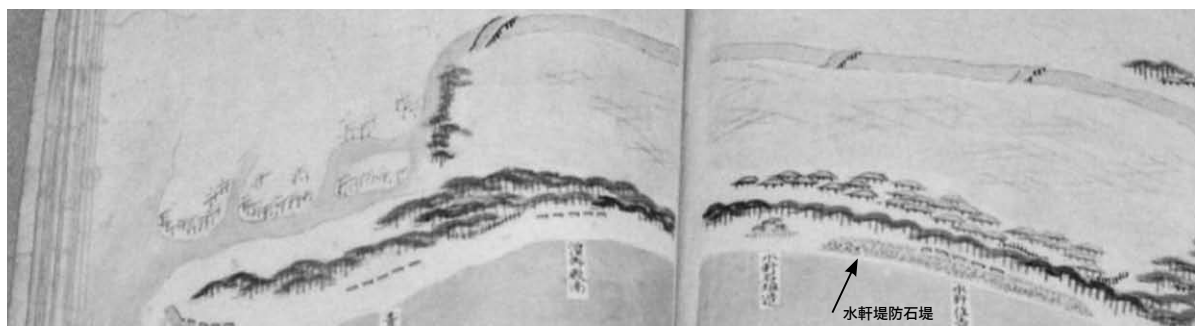
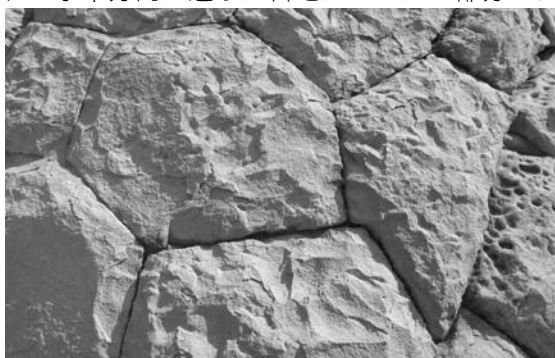


図1-3 絵図『異船図』(和歌山県立図書館所蔵)

得ない。とにかく、水軒堤防が石堤だけでなく、石堤背後の土盛やそれらの南北に繋がる裏堤とともに構成されるものであり、今後、表堤と裏堤の関係や、裏堤の内容についても明らかにしなければならないといえる。

築造された時期 水軒堤防がつくられた時期については、年代を示す遺物の出土がなかったことから明らかでない。ただ、城石垣の技術的な変遷が明らかにされており、「布積」「切り込みハギ」などの技法で構築された水軒堤防の石積みは、時期がおおよそ把握されている和歌山城や石川県金沢城などの石垣との対比から 17 世紀後半から 18 世紀前半頃に築造されたものと指摘されており、少なくとも伝承にあるように 17 世紀前半代までは遡らないといえる。

コーナー部分は精巧な「切り込みハギ」で積まれていることで、周辺部分とは明確な違いを見出すことができる。また、石材の色調も他の場所に比べやや白っぽく見え、改修とみることもできる。城石垣では、コーナー部分は念入りに加工した石を使用して、場合によれば和歌山城の高櫓のように硬質な花崗岩を用いる場がある。北垣総一郎氏は、それらを考慮しながらも、コーナー部分の石積みには新しい要素が入っていることを指摘された。氏は「布積」されて水平方向に通った目地がコーナー部分では乱



コーナー部分の石積み（亀甲積状）



コーナー部分の石積み（鍵形）



矢穴

れて前下がりの状態になっていること、精巧な「切り込みハギ」の部分に「亀甲積」に似た箇所が見出せること、表面が平らな石が目立ち、それらの中に鍵形に組み合わされた箇所が見出せることなどから、19 世紀代の改修によってコーナー付近が積みなおされたものと結論づけた。

一方、石積みの技術や技法から時代を決める方法以外にも、矢穴から時期を把握することが可能になってきている。水軒堤防の石材には、数は少ないもののいくつかの矢穴が残されている。森岡秀人氏は大阪城に石を供給した大規模な石切り場を調査し、その成果などから矢穴形態を大きく A・B・C の 3 タイプに分類しているが、水軒堤防に見られる矢穴には B と C タイプが存在し、おおよそ 18 世紀に帰属するものと評価した。

石堤と土盛 土盛に設けたサブトレンチ内で割り石が検出されている。調査面積がわずかで全体に及ぶものか明らかでないが、少なくとも平成 17 年度の調査では確認されていない。また、石堤が前面に存在することで土盛には構造上裏込め石は必要でないと考えられることから、石堤を築く際、石を加工した時に出た石屑であると理解することができる。そう考えた場合、石堤を積み上げながら同時に土盛を築いたと想定することができるが、断定するには資料が乏しいといえる。

水軒堤防の位置づけ 石垣築造の最先端の技術を採用した水軒堤防は、全国的に見ても類をみないものであり、大地震や津波あるいは台風などの高波に破損することなく現在までその姿を保っている。江戸時代につくられた防潮・防波堤防としては、広川町にある土盛り堤防の国指定史跡広村堤防や、やはり国指定史跡で石積み堤防である秋田県の由利海岸波除石垣が著名なところであるが、水軒堤防もそれに比肩する土木遺産といえる。（川崎雅史）

和歌山城跡の発掘調査

遺跡の時代：江戸時代

所在地：和歌山市二番丁1

調査の原因：和歌山地方・家庭裁判所増築

調査期間：2006.9 - 2006.3

調査コード：06 - 01・379

遺跡の概要

和歌山城は、紀ノ川によって形成された和歌山平野の中ほどにある虎伏山を中心に築かれている。丘陵から平野部の砂丘部分にかけて城域があり、いわゆる平山城と呼ばれるものである。その構造は、標高40～50mの虎伏山に天守閣と本丸を置き、周囲の砂丘部分を成形して二の丸、西の丸、砂の丸、南の丸などを配し、北から東側の砂丘および砂丘後背地に三の丸を置いている。二の丸・三の丸の縄張りや城下町の町割りは東西南北の軸を基本に行われている。各区画は高い石垣や堀を巡らして防御しており、三の丸の外堀に繋がる和歌川や紀ノ川も堀の機能を担っていたと考えられる。また、城の南側には寺町を置き、手薄となるこの方面の防御としている。

和歌山城の築城は、天正13年（1585）に紀州を平定した羽柴（豊臣）秀吉が異父弟秀長に普請を命じ

たのが始まりとされ、翌年、秀長の城代として桑山重晴が入城している。その後、慶長5年（1600）に関ヶ原の戦いで軍功があった浅野幸長が入城し、城郭全体の改修と城下町の整備を行い、その後の和歌山城の原形を作ったと言われている。元和5年（1619）には家康の十男である徳川頼宣が入城し、再び大改修が施された。和歌山城は徳川御三家の城として江戸時代を通じて維持され、何度かの火災によって城内の建物が消失したものの再建されている。なかでも弘化三年（1846）には天守閣が落雷によって焼け落ちたが、御三家の特権で幕府より再建を許可され嘉永三年（1850）に復興している。

調査区の位置

和歌山県教育委員会が発行する『和歌山県埋蔵文化財包蔵所在地図』では、もともとの和歌山城の範囲に、周知の遺跡として史跡和歌山城（左下地図の指1）と和歌山城跡（左下地図の379）がある。史跡和歌山城跡は、天守閣と本丸・二の丸などの城の中枢部分で、和歌山城跡は三の丸を含めおよそ家老屋敷を範囲とする。

今回の調査区が位置する三の丸は、和歌山城の北側から東側にかけて位置し、周囲に堀を巡らしている。江戸時代の絵図などからは堀の内側に沿って土塁を築いていたことが分かっている。調査区は三の丸の南東部で、本丸の東に堀を挟んで位置する。



和歌山城位置図（指定1、379 縮尺1／50000）



調査区位置図

し西側部分をA区、東側部分をB区とした。調査はA区を先行しておこなった。

調査区付近は何度も土を盛って整地していることが明らかになった。もっとも下位の面の高さと江戸時代末頃の面の高さとは約1m近く違っており、大規模に整地がおこなわれていた。和歌山城に關係する面は4面確認しており、城以前の室町時代の面を1面と昭和の空襲被災面を合わせると合計6面を調査したことになる。

調査の成果

第1遺構面 幕末頃の面に相当し、西端で堀の基礎と考えられる遺構を検出した。この場所は絵図から想定した屋敷の境界と合致する。調査区の西側には、ごみ穴と考えられる土坑があるものの、遺構密度が低いことから、裏庭のような空閑地であった可能性がある。

調査区東側は西側に比べ遺構の数も多く、井戸や地下倉庫・埋桶などを検出した。明確な建物遺構を想定することができないが、柱穴が多く存在することから掘立柱の簡素な建物がいくつか存在した可能性

性がある。

井戸には素掘井戸と瓦積み井戸がある。瓦積み井戸は、瓦のカーブを上手く利用して隙間なく積み上げたもので、内径約80cm、深さ3m以上を測る。

地下倉庫は平面プランが正方形に近く、一辺は約2.8m、深さ1mを測る。四隅に柱を置く構造であったと考えられ、柱の痕跡と柱の根元に置いた据石を確認した。

第2遺構面 西端の堀基礎の下で、直径1m前後の穴が並ぶ状況を確認したが、これらは屋敷地の境界に関わる柱穴の可能性が考えられる。調査区西側では素掘井戸やごみ穴と考えられる土坑を検出した。土坑からは、多くの瓦や土器類のほかに動物の骨などが出土している。

調査区東側は第1次遺構面と同様に遺構密度は西側より高い。柱穴が多く礎石列も検出できることから、付近に何棟かの建物が存在したと考えられる。このほか、大小2基の石室状遺構を確認している。

石室状遺構は、古墳の竪穴式石室のように四周に石を積み上げたものであるが、性格・用途は不明である。

北東隅付近では10cm程度の厚さで焼土で整地がおこなわれていた。明暦の大火（1665年）で二の



第1遺構面A区



写真2-3 第2遺構面B区



第1遺構面検出瓦積み井戸



第2遺構面検出石室状遺構

丸をはじめ、周辺地域が大規模に消失したとの記録が残ることから、その時の焼土である可能性もある。

第2 遺構面 東側では、細かく丁寧に整地がおこなわれていることから、第2 遺構面と第3 遺構面の間でもうひとつの面を確認することができた。検出した遺構には不定形の土坑や礎石などがある。

第3 遺構面 西側で幅約3 m、深さ約1.2 mの溝や大型土坑などを検出した。溝は南北方向に一直線に延びるもので、少し埋まった後、周辺の整地をおこなうのと同時に一気に埋め戻されている。この整地土の直下で見つかった備前焼播鉢の形態から、安土桃山時代の遺構である可能性がある。

東側では、多くの柱穴や土坑、素掘井戸を検出した。近世の遺物が出土する遺構が少ないことから江戸時代以前の遺構が多いと考えられる。

第4 遺構面 排土置き場を確保するため、面積を縮小して調査した。検出した遺構には溝や土坑などがある。土坑などから出土する遺物には土師器片が多く、時期を明確に表すものはないが、おおよそ室町時代の遺構であると考えられる。江戸時代に書かれた文献では、和歌山城の東側には、築城以前に釘貫村と言う集落が存在したと書かれており（註1）、そ

の村に関する遺構である可能性もある。

まとめ

江戸時代に描かれた和歌山城下町の絵図は多く残されている。18世紀初め頃に描かれた「和歌山城下大絵図」（和歌山県立図書館蔵）には、間口や奥行きなど屋敷地の規模が克明に記載されているが、それらから現在の裁判所や検察庁がある一画に「大高源右衛門」・「佐野弁左衛門」・「伊藤楠之丞」・「水野次郎右衛門」・「安藤忠兵衛」・「山名八左衛門」・「加納兵左衛門」の7区画された屋敷地が存在したことがわかる。また、今回の調査区の大部分が「山名家」の敷地に該当する。この一画は、その後7区画から6区画に、更に幕末には5区画となっている。安政2年（1855）に描かれたとされる「和歌山城下町図」（個人蔵）では裁判所の敷地が「豊島五郎左衛門」・「伊藤又兵衛」・「向笠三之助」・「岡部小左衛門」の屋敷となっており、今回の調査区付近は「豊島家」の屋敷に変わっている。

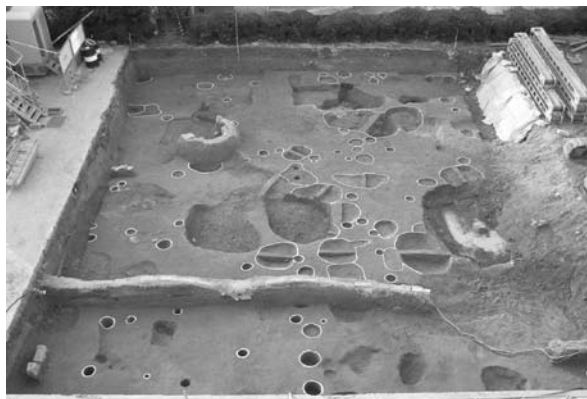
今回の調査では、江戸時代の堀・井戸・地下倉庫・石室状遺構のほか、和歌山城築城以前の柱穴などを確認した。紀州徳川家上級家臣の屋敷地内の内容・変遷が明らかになるとともに、和歌山城築城以前の様相を探る資料を得ることができた。

南北に走る屋敷の境界は、調査によって整地でかさ上げされた後でも踏襲されていることが明らかになり、絵図から想定される位置で堀などの遺構（土堀基礎・礎石列・柱穴列）を検出した。

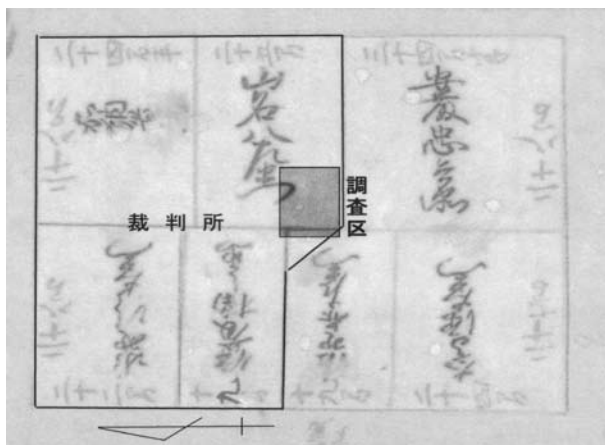
（註1）湯橋寿男氏蔵『長泰年賦 二』、三尾功氏のご教示による（川崎雅史）



第3 遺構面 A 区



第3 遺構面 B 区



『和歌山城下大絵図』部分

特別史跡岩橋千塚古墳群 前山 A13 号墳の発掘調査

遺跡の時代：古墳時代

所在地：和歌山市岩橋

調査の原因：史跡整備 風土記の丘支援事業

調査期間：2007. 6 - 2007.3

調査の経緯

紀伊風土記の丘は昭和 46 年に特別史跡岩橋千塚古墳群を管理・保全するために開園された施設である。史跡の面積は約 61 万平方で、その中には大日山 35 号墳（前方後円墳）をはじめとする約 430 基の古墳が所在している。

当文化財センターでは平成 15 年から整備に伴う支援事業を展開している。

今回、対象となった前山 A13 号墳は、公開古墳であったが、経年変化で古墳の排水施設が機能せず現在では石室が常時滞水状態となっていた。排水機能を回復させ、安全に公開する必要性から再度発掘調査を実施することになった。平成 18 年 7 月 25 日から 18 年 10 月 12 日まで 380 m²（発掘調査面積 13.3 m²）を調査した。

既往の調査

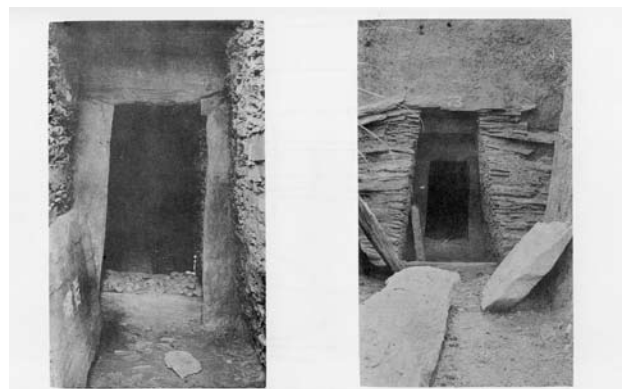
大正 8 年 4 月、内務大臣より発布された「史跡名勝天然記念物保存法」によって和歌山県は、翌 9 年 12 月、和歌山県史跡名勝天然記念物調査規定を定めて、大正 10 年 2 月より県下の史跡名勝天然記念物の調

査を行った。

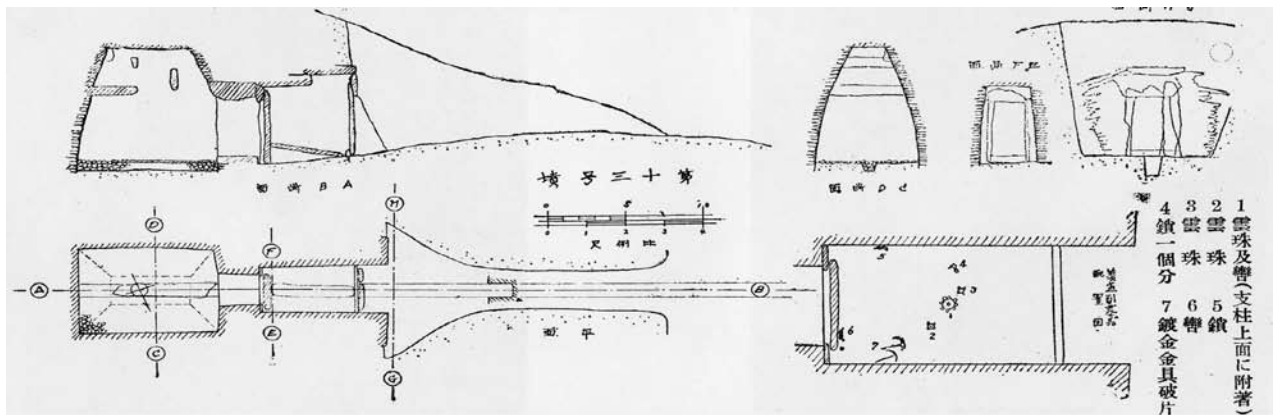
「岩橋千塚第一期調査」では、27 基の古墳が調査され A13 号墳もこの時調査されている。当時の記録によると、墳丘は、高さ約 3.6 m、直径 1.8 m を測る円墳で、^{ふきいし}葺石、埴輪は持たないと記述されている。石室は、西向きに開口し、玄室・玄室前道・羨道からなり、玄室長 2.7 m、幅 2.1 m の長方形で床面中央に幅 0.3 m、深さ 18cm 余の排水溝が設けられていることが記されている。また、沓摺石（玄室前道基石）から外方向へ「幅一尺、深さ三尺の溝を穿ちありし跡」の排水溝も確認されている。

玄室前道の入り口には 2 枚の立柱を 3 枚の板石の扉、羨道部には一枚石の扉（長 5 尺 8 寸厚 3 寸、幅 2 尺 7 寸六分）を設け、その支持のため板石の支柱を添えていることが図面と記述によって知ることができる。遺物は、^{せんだう}羨道から^{うず}雲珠、^{くつわ}轡、^と鎖、鍍金金具破片が出土している。

場所は特定できない（羨道）が須恵器破片、入り口扉石の下端から鉄槍の破片も発見されている。



石室羨門（左）と石室開口部（右）
（和歌山県『和歌山県文化財調査報告書』一より転載）



大正 8 年調査の石室実測図（和歌山県『和歌山県文化財調査報告書』一より転載）

調 査

調査は流入した土砂を撤去し、玄室内の暗渠排水溝の確認を行うとともに、墳丘外へと続く排水溝の調査を実施した。

墳 丘 古墳は、主稜線から北に延びる小尾根に築造された円墳で、規模は直径 19.5 m を測る、現状では約 3 m の高さをもっている。盗掘坑が 3 ヶ所あってこのうち東側のものが奥壁の石棚の上部にまで達しています。開口部前面は等高線が張り出した形状を示してこれは大正 10 年の調査時に掻き出した土砂が二次堆積したものと考えられる。

石 室 西に開口した玄室・玄室前道・羨道・羨道前庭からなる横穴式石室である。玄室長は 2.67 m、幅 2.03 m の長方形のプランを呈している。床面から天井までの高さは 2.8 m を測り、穹窿状を呈するため天井部では長さ 1.5 m、幅 0.66 m となる。石室の全長は玄室前道、羨道を含めると 6.01 m となる。石室の主軸は 65 度西に偏し、玄室の床面は墳丘ほぼ中央の墳頂から約 4.7 m 下で岩盤を水平に掘り込んで構築している。床面のレベルは 61.80 m である。左右の側壁は、床面から 12 度の傾斜で内傾し直線



墳丘の全景（和歌山県教育委員会より提供）

的に持ち送る。奥壁も側壁同様 12 度の傾斜で内傾し直線的に持ち送るが、石棚より上では 20 度前後の傾斜となる。玄門は傾斜が緩やかなカーブを描き 5 度程度の傾斜である。床面の中央には羨道から前庭部へと延びる排水溝が確認できる。

石室を構成する石材はすべて結晶片岩で、基底部には、厚さ 15cm 前後、長さ 30 ～ 50cm の片岩を隙間なく平積みし、2 段目からは基底部と同程度の石材を水平に小口積みし、その間隔を小割り石で埋めている。側壁を構成する石材は、加重のため破碎したものが多く、おそらく小口積かと思われる平積

も存在するようであるが現状では判然としない。奥壁は床面より石棚までは小口積で石棚より上は平積である。玄門は厚さ 38cm の一枚石（楣石）を水平に懸架し、その上部に厚さ 10 ～ 15cm の板石を 6 枚平積みし、水平を保つため板石と板石の間に 2 箇所

にやや小ぶりの片岩を平積みしている。

石 棚 床面から 1.7 m の高さに両側壁および奥壁に食い込む形で懸架している。厚さ 20 ～ 30cm、奥壁から石棚先端部分まで 93cm もある巨石である。



石梁（和歌山県教育委員会より提供）

石 梁 梁は 2 枚、両側壁に食い込む状態で垂直に懸架している。奥側の梁は棚の先端の 30cm 上方にあり、前道側に 60cm 離れて一枚ある。

玄室前道 玄門部は、長さ 2 m 以上、幅 0.7 m、厚さ 27cm の巨大な^{しきみいし}榎石を敷き、その上に両壁を小口積で積んでいる。玄門の幅は下部で 0.65 m、上部で 0.6 m を測るほぼ垂直で、^{しきみいし}榎石から^{まぐさいし}楣石までは 1.27 m の高さを測る。^{まぐさいし}楣石も^{しきみいし}榎石と同程度の巨石を用いている。

前道と羨道の境界の玄門部には榎石の外側に仕切り石を垂直に据え、その左右には化粧石が側壁に食い込んだ状態で立てられている。扉石を支えるための造作と考えられる。玄室とは高低差があって、玄門部が 27cm 高くなっている。



玄室から開口部（和歌山県教育委員会より提供）

羨道 玄室前道より一段低くなっている。羨道部の側壁はやや持ち送り、2枚の天井石が据えられている。羨道部の床面には扉石が横たわっていたため、詳細を明らかにすることができなかったが外方向へと伸びる排水溝を確認している。

排水溝 玄室を二分するように中央に排水溝が穿たれ墳丘外へと延びる。奥壁際では幅20cmで深さ15cmを測り玄門部では幅30cm、深さ18cm測る。玄室内の排水溝に伴う蓋石、側板等は大部分が取り除かれていたが部分的に残存していた。その状況から箱掘りで溝壁に結晶片岩の板石をあて、溝には玉砂利を充填し蓋石を載せていた当初の様子をうかがうことができる。溝はほぼ水平で、梱石を潜り、羨門の位置から墳丘外へと高さを減じる。さらに丘陵谷部に導かれるものと推察される。前庭部では、岩盤を幅0.5mでほぼ垂直に1m以上掘り込み、掘り込み面から約0.4mまでは比較的軟質土で下層は非常に硬質となり、たたき締めていることがわかる。

排水溝は玄室同様、溝壁に結晶片岩の板石をあて、溝には玉砂利を充填し蓋石を載せている。しかし、前庭部の排水溝は側石を「V」字形にしているため底板はないようである。



玄門の床面（和歌山県教育委員会より提供）



羨道と閉塞石（和歌山県教育委員会より提供）

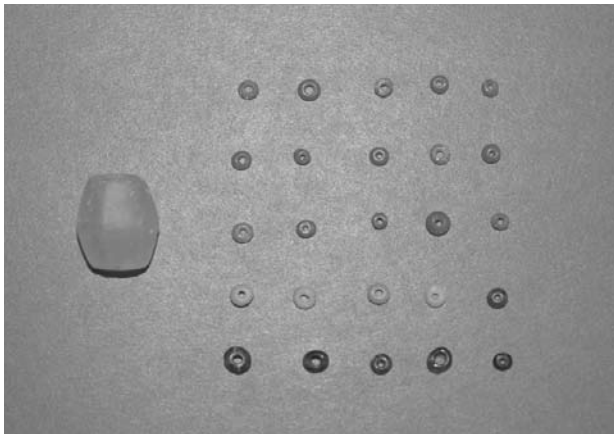


排水溝（和歌山県教育委員会より提供）

遺物 玄室内からは、副葬品は確認できなかった。現地調査終了後、玉砂利を洗浄したところ水晶製の切子玉1点、黄色、藍色のガラス玉20数点を検出した。羨道部、前庭部の堆積土からは須恵器の甕の破片が出土している。(富加見泰彦)



排水溝（和歌山県教育委員会より提供）



出土した玉類（和歌山県教育委員会より提供）

■粉河寺遺跡の発掘調査

遺跡の時代：鎌倉時代～江戸時代

所在地：紀の川市粉河字寺川

調査の原因：長屋川砂防環境整備工事

調査期間：2006.11 - 2007.1

調査コード：06 - 07・22



調査地位置図 (縮尺 1 / 25000)

遺跡の概要

粉河寺は、紀ノ川中流域北岸の上位段丘面が、和泉山脈からの小河川によって侵食されてできた谷の平坦部に位置する。その創建は明確でないが、文献によれば宝亀元年（770年）とされ、西国三十三所観音霊場の第3番札所として知られる寺院である。

粉河寺で過去に行われた調査は少なく、平成13～14年度に県教育委員会によって実施された防災工事に伴う発掘調査など数例を数えるのみである。

今回は、現在の寺域の南端部を東西に流れる長屋川の左岸を対象に発掘調査を実施した。

調査の成果

表土および近世以降に造られた石垣を取り除き、整地土を掘り進めたところ、長屋川左岸の護岸、土留め機能を持つと考えられる4段（以下、下から1-1段、1-2段、2段、3段と呼ぶ）の石積遺構を検出した。調査区西側では、1-1段目、3段目は工事などにより既に削平されていた。

1-1段基底部から3段天端までの高低差は約4mである。各段の石積残存高さは50cm前後の部分がほとんどであるが、1m近い高さが残る部分も存在する。いずれも砂岩を主体（部分的に緑泥片岩の板

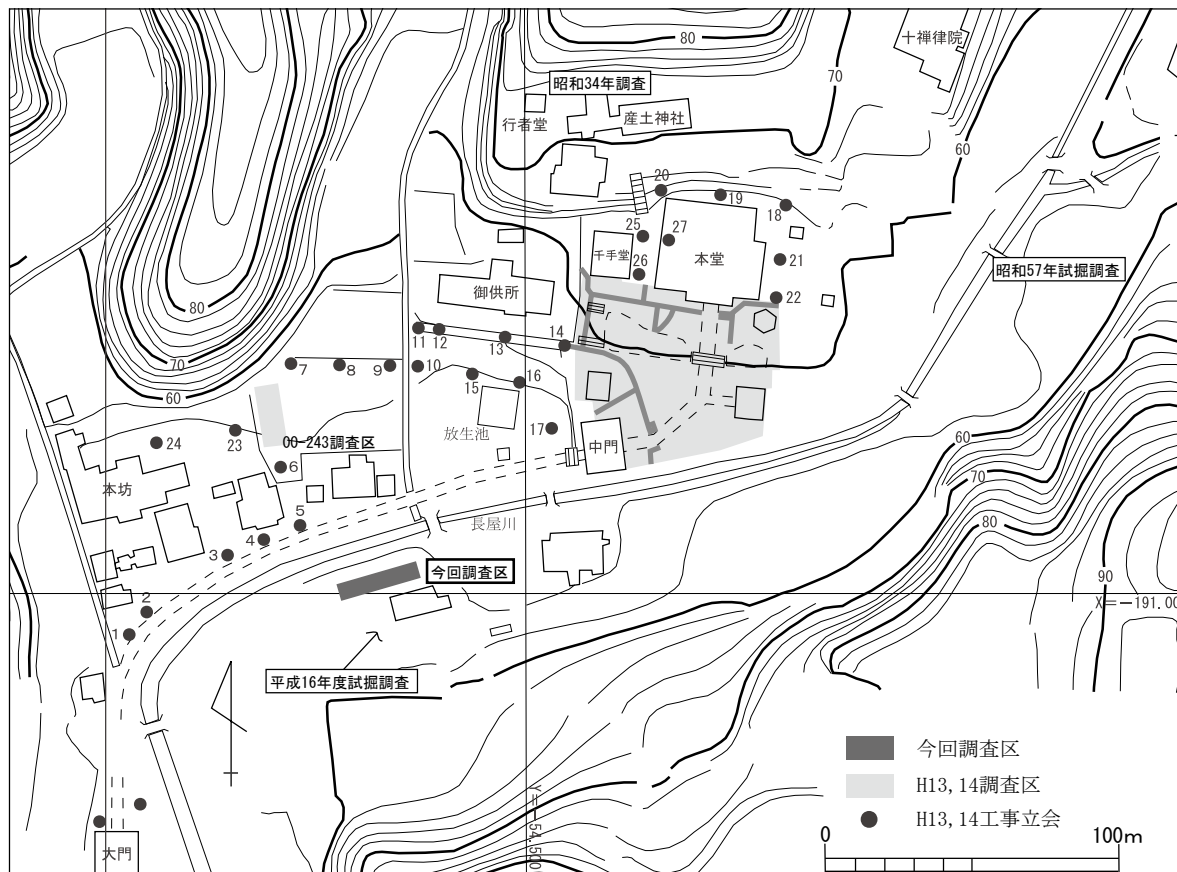


図4-2 調査位置図 (『和歌山県埋蔵文化財調査年報』-平成16年度-和歌山県教育委員会 2006 に一部加筆)

石が用いられる)とした野面積みであり、非常に雑な造りである。特に3段目は、石間に一定厚の土が介在する部分が多く、構造的にも近世の石垣と比較すると大きな隔たりがある。

1-2段と2段、3段の石積は、南北に1mから1.5m前後の間隔を有するが、1-1段と1-2段は50cm弱で、石の奥行き分程度の間隔をもつのみである。

2段目、3段目の石積基底部は、傾斜堆積している無遺物層を平坦に成形して基底石を据えている。基底石として特にサイズの異なる石の選択はなされていない。1-1段目については、基底石設置のための意識的な成形は認められないが、基底石として他に比べサイズの大きい石を用いている。1-2段目については、基底石設置のベース土自体が石積築造時の人為的な埋め土であり、土を入れる段階で設置しやすい形状に成形している。基底石は上部の石と差異がない。

いずれの石積においても、基底部下及び背後にはやや粗い砂礫土が見られる部分はあるが、裏込めの栗石や胴木は認められない。

また、残存状態は良くないものの、西半部で階段と考えられる部位を検出した。北端に緑泥片岩の板石が4枚ならべて据えられ、その南側には、東西幅4m弱の間隔をあけて、階段状に石が設置されている。

1-1段目、3段目は、削平のためその存在は不明であるが、2段面の石積遺構はこの階段部分で途切れる。南北方向の断面を観察すると、無遺物層が階段状に

時期については、出土遺物整理後の判断になるが、現在のところは4段とも、室町時代に収まるものと考えている。

おわりに

今回検出した石積遺構は、長屋川の護岸施設あるいは土留めの機能を有する可能性が考えられるが、近世に造られる石垣と比較すると、その積み方、基底部の構造、裏込めの状況などにおいて大きく異なり、粗い造りとなっている。現地を確認した出土遺物の状況なども考え合わせると、室町時代まで遡る可能性は高い。河川の護岸施設と考えた場合、中世に遡る石積護岸の例は少なく、治水技術史を考える上でも貴重な成果と考えられる。(佐々木宏治)



写真4-2 階段状遺構（北から）



写真4-1 石積み遺構検出状況（北東から）

西飯降Ⅱ遺跡、丁の町・妙寺遺跡 の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～室町時代

所在地：伊都郡かつらぎ町妙寺地内

調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）
の建設

調査期間：2006.4－2007.3

調査コード：06－13・26、06－13・27

調査概要と基本層位

調査地は紀ノ川右岸、低位段丘Ⅱ面とよばれる標高70 m前後の段丘面の山際近くに位置し、現況は水田および柑橘畑であった。対象地は幅約60 m、長さ約340 mの範囲で面積は約18,000 m²である。

調査地を1区（1A1～4区・1B1～4区）と2区（2A1～2区・2B1～4区）に分割する調査区を設定し、調査地を南北に画する境界線を中軸、調査地の東西を画する調査区の境界をセクション11と呼称し、土層堆積を観察した。調査区は残土置場の確保と全景写真撮影用足場を設置するため、前半の調査で1A2～3区・1B1区・1B4区、2区は2A1区・2B2区の調査を行い、後半の調査で1A1区・1A4区・1B2～3区、2A2区・2B1区の調査を行った。なお、遺跡の境界はセク

ション4を境に西側を丁の町・妙寺遺跡、東側を西飯降Ⅱ遺跡としてあつかった。

調査地は北から南へ勾配があり、また東側と西側が高く中央部が谷状に低くなる。そのため東部・中央部・西部では堆積状況は異なる。基本層位は上から第1～第3層が中世以降、第4層が弥生時代中期から古代の包含層である。第4層は細分され第4d層が古墳時代後期、第4h層と第4i層が弥生時代中期の包含層である。東部の西飯降Ⅱ遺跡では第4d層と第4b層の間に流水による砂層が堆積している。

調査の結果、弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代前期、鎌倉時代の遺構群に大別される。弥生時代と古墳時代の遺構は調査地の東部と西部に集中し、谷状に低くなる中央部では弥生時代、古墳時代、平安時代前期、鎌倉時代の水田跡を検出した。

弥生時代中期の遺構

竪穴住居8棟、竪穴状遺構、平地式住居、溝、土坑、土器棺墓5基、方形周溝墓4基、自然流路、柱穴などがある。竪穴住居は西部の丁の町・妙寺遺跡で4棟（51・63・172・173住居）、西飯降Ⅱ遺跡で5棟（5185・5372・5373・5400住居）検出した。そのうち、西飯降Ⅱ遺跡の5400住居は方形を呈し、他は円形住居である。円形住居は直径が6～8 m前後を測る比較的大型の住居であるが、5400住居は一辺が4 mの小型住居である。いずれも中央に円形



調査地の位置（縮尺1／25000）

の炉を付設している。また、竪穴の掘り込みが浅く不定形の住居を3基（24・63・66住居）検出した。床面に焼土や炭化物がみられ、深く掘りくぼめない平地式の住居と想定される。

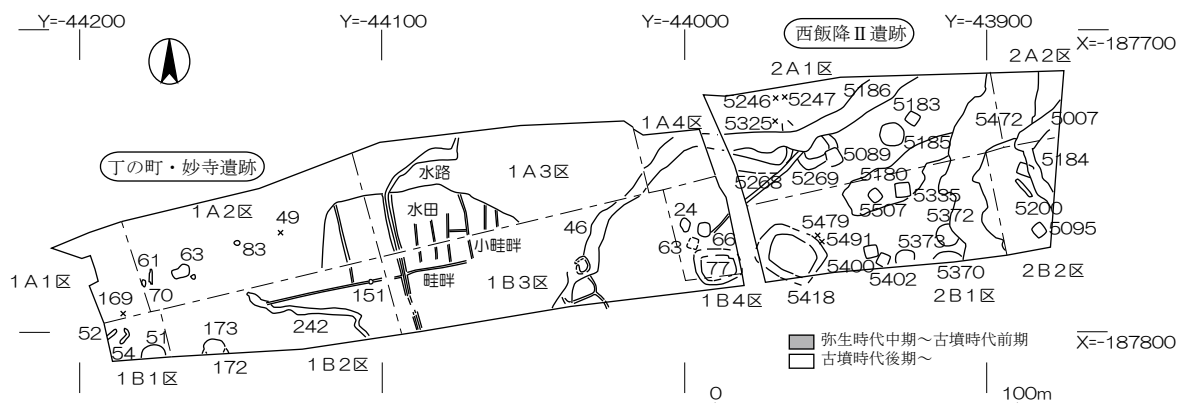
51 住居 1B1区の南端に位置し、建物全体の約3分の2を検出した。床面を3面（床面A・B・C）検出した。直径8.0m・深さ0.3mの規模で、主柱穴は4本が確認できた。主柱穴は、配置関係から6本を復原できる。建替えに伴う主柱穴の配置は、若干ずれるものの基本的に同一位置を保ったままである。床面のほぼ中央には、円形の炉穴が存在する。炉穴は建替えの中で順次造替えが認められる。床面Cに伴う炉穴の規模は、南北1.26m・東西1.32m、深さは床面A・Bに伴う炉穴の造替えのため不明である。床面Cの炉穴の外周には、高さ約15cm・幅25cm前後（基底部幅では、44～58cm）の炉堤が廻らされる。また、その外周には、天端幅約35cmの炉周溝が廻らされている。床面A・Bに伴う炉穴は、南北0.75m・東西0.65m、深さ0.55mで埋土の最下部には厚さ約10～15cmの炭灰が充填されていた。何れの段階においても、炉穴の内側に被熱による赤変痕跡は認められない。被熱による赤変痕跡は、炉堤の外側に廻らされた炉周溝の中からその外側にかけて認められる。遺物は、埋土から弥生時代中期中葉から後半の土器、石鏃・敲石・磨石などが出土している。直接、床面に伴う遺物は出土していない。

172・173 住居 第5層上面で検出した。1B2区の南西に位置し、172住居は173住居と重複しており、173住居が新しい。共に遺構の大半が調査地外に外れるため断定はできないが、平面円形の竪穴住居であろう。172住居は西からの土砂の流出によ

て、東側の掘形が大きく流失しているが、断面土層から検出できた床面規模では径7mである。遺存する竪穴部掘形の深さは20cmで、周壁下には1条の周壁溝が巡る。床面上から掘り込むピットを7基検出した。ピットはいずれも浅く、主柱に相当するものを特定し難い。掘形中央近く（調査地壁側溝と大半を重複するが）に土坑1基を検出した。炉穴の可能性はある。一部に床面の補修痕があるが、全面におよぶ貼り床はない。埋土から弥生土器が少量出土したが、いずれも細片である。173住居は172住居と同様に掘形の東側は流失しており、平面形は判然としないが、床面で検出した周壁溝は隅丸方形に巡るようである。遺存する床面規模では4.4mである。遺存する掘形の深さは10cmである。173住居の床面は172住居の床面よりも高い。床面からは5基のピットを検出した。172住居の床面で検出したピットに173住居に伴うピットが含まれている可能性が高いが、判断し難い。貼り床はない。いわゆる中央土坑や炉穴に相当する土坑は見出できなかった。良好な出土遺物はない。

5185 住居 第5層上面で検出した。2A1区のほぼ中央に位置する。平面円形の竪穴住居で、直径約8m検出面からの深さを測る。床面中央には炉を設けている。柱穴を8基検出した。中央の炉に近接して2基の柱穴を配置し、いわゆる松菊里型住居の特徴を有する。弥生時代中期のものと考えられる。

5373 住居 第5層上面で検出した。2B1区の南端に位置し、掘形の一部は調査地南方に外れる。平面円形竪穴住居で、直径約6.1mを測り、中央には長径90cm、短径50cmの平面楕円形の炉を検出した。炉穴の脇に密集してピットがあり、ピットが



遺構分布図

埋没した上から磨製石剣が出土した。この出土状況は、実用性に乏しい磨製石剣の使用状況を復元する良好な出土例となるであろう。

5370 住居 第5層上面で検出した。2 B 1 区の南端に位置し、掘形の大部分は調査地南方に外れる。平面円形の竪穴住居であろうが規模は不明である。掘形の曲率から復元すれば、直径 10 m 余りの大型住居になる可能性がある。掘形の平面形から、弥生時代の所産であろう。

5400 住居 第5層上面で検出したが、平面方形の住居で、規模は一辺 4.0 m である。床面中央には炉が設けられ、炉の周囲にはこれに伴うとみられる小穴が 5 個配置されている。出土した遺物から弥生時代中期のものである。

5269 方形周溝墓 北半部を古墳時代の自然流路により壊されているが、一辺約 13 m であったと考えられる。また、主体部も後世に削平されており、埋葬施設を検出することはできなかった。周溝底部から弥生時代中期の土器が出土した。

5418 方形周溝墓 規模は 20 m × 17 m ほどで、方形周溝墓としては大型の部類に入るものである。周溝からは弥生時代中期の土器の小破片が多く出土しているが、供献土器は見つかっていない。また、主体部も後世にかなり削平されたようで、埋葬施設についても検出することはできなかった。八太神社の参道を挟んだ東側の 1 B 3・4 区においても方形周溝墓の溝であったと考えられる 77 溝が確認されている。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構

検出した遺構には、竪穴住居 4 棟、平地式住居 3 棟、溝、土坑、土器棺墓、自然流路などがある。主なものを報告する。大半は第5層上面で検出した。遺構数と遺物量は弥生時代の中期に比べ激減する。

5183・5184・5402・5507 住居 弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居を 4 棟検出した。いずれも平面方形を呈し、弥生時代中期の平面円形の住居よりも床面積が小さい。5183 住居は 2 A 1 区中央部で検出され、4.5 × 5.0 m の規模で 4 本柱である。5184 住居は 2 B 2 区で検出され、5007 溝に東辺部を削平されている。3.3 × 3.5 m の規模。5402・5507 住居は 2 B 1 区で検出され、3.3 × 3.2

m と 3.2 × 4.2 m の規模を測る。5507 は中央に直径 0.75、深さ 0.8 m の炉が設置されている。

24・63・66 住居 いずれも平面形が不整形で、掘形の深さは 10 cm 未満と非常に浅く、明確な主柱も特定できない。掘形埋土はいずれも、炭を多量に含み、床面には焼土も認められる。後世の削平、流失の可能性もあるが、簡易な平地式住居の可能性もある。これらの住居からは良好な出土遺物はないが、第 4 d 層下面、第 5 層上面で検出したことから、弥生時代中期から古墳時代前期のうちと捉えておく。

169 土器棺墓 1 A 1 区の南部に位置する。平面円形の掘形で、規模は径 88 cm である。大型の広口壺 1 個を正位に置いている。頸部の一部は壺の内部に落ちこんでいた。口縁部は欠損している。壺内部には、高坏の筒部も落ち込んでおり、高坏を蓋としていた可能性もある。頸部以下の形態的特徴から、弥生時代終末期、庄内式土器並行期の所産であろう。

242 溝 1 B 2 区のほぼ中央微高地縁辺から、1 B 2 区の南東方向の埋没谷に向かってカーブして流下する自然流路である。埋土中から多量の弥生時代中期の土器が出土し、少量の弥生時代終末期の土器も含む。第 4 d 層土の堆積で完全に埋没しバックされていた。

古墳時代中期の遺構

検出した遺構は、樽形ハソウが出土した 49 土坑のみである。出土した樽形ハソウはほぼ完形品で、田辺編年 ON46 型式に相当する。

古墳時代後期の遺構

古墳時代後期の遺構と遺物は、大きく 46 溝より東側、その中心は 2 区に分布している。検出した遺構には、竪穴住居 3 棟、溝、土坑、自然流路、ピットなどがある。第 4 d 層上に堆積した洪水層にバックされていた。

5089 住居 5089 住居は方形の竪穴住居で一辺約 4 m を測る。5089 住居は洪水層の下面で検出された。火災に遭った焼失住居である。掘形の北辺には造り付けカマドが設けられている。住居の中心に向かって等間隔に倒れた炭化部材を検出した。垂木か壁板の可能性もある。床面からは多数の須恵器が

出土した。支柱は4基である。被災時（あるいは住居焼却時）の状況を良好に留めていると考えられる。

5095 住居・5335 住居は2 B 2 区に位置し、一辺約4 mを測る方形竪穴住居である。四辺に壁溝をめぐらせ、造り付けカマドを設けており、カマド内には支脚としていた細長い円礫が立てられていた。住居廃絶時の状況をよく遺している。壁際には貯蔵穴を設けている。柱穴は4基検出した。5335 住居は2 B 1 区に位置するが、同時期のほかの住居と異なり造り付けカマドをもたない。4.3 × 4.5 mの規模で深さ10cmを測る。

46 (5186) 溝 この溝は2 A 1 区の北東方向から1 B 3 区の南方へと蛇行して流れる。川幅は3 m、1 B 3 区の南端では約15 mと広がる。検出面からの深さは約1 mである。溝の埋土は、砂礫層と粘土、砂が互層をなしており、安定して水が流れていた自然流路であろう。2 A 1 区で1箇所、1 B 3 区では2箇所、杭や板材を並べて打ち込み横からも自然木や杭をからませた堰を設けている。その堰に隣接する位置には溝が分岐しており、川の水量や流速を調節しながら、生活用水を取っていたと考えられる。46 溝の埋土各層からは多量の須恵器が出土した。それらの年代観はいずれも古墳時代後期（6世紀後半）のもので占められ、6世紀の内に完全に埋没したようである。また、1 B 3 区では木製の下駄が、1 A 4 区では、大足の部材が出土した。これらは、共に流木にひっかかった状態で出土した。いずれも遺存状態はよい。

平安時代の遺構

1 A 2 区と1 B 2 区の東側、埋没谷で西飯降Ⅱ遺跡へと広がる水田と小畦畔、条里型地割の北辺にあたる東西坪境畦畔と、それに直交する南北方向の畦畔、用水路を検出した。水田と畦畔は粗砂礫を主体とする洪水層に完全にバックされていたため、良好に遺存していた。なお、1 B 2 区の西側の高い部分では古代の遺物包含層が良好に遺存していた。2 A 1 区では、多量の土師器と炭、焼土、鉄滓が出土した土坑を検出している。

坪境畦畔 1 A 3 区と1 B 3 区を南北に通る坪境畦畔と水路である1溝に並行して、幅30 cm前後の畦

畔が南北方向に一直線に通る。それに直交して、東西方向に幅30 cmから約50 cmの畦畔も一直線に遺存していた。1 B 3 区では良好に高さ15 cm程遺存していたが、1 B 2 区ではほとんど削平されており、色調の差から痕跡を認める程度であった。また、畦畔に沿って杭を検出したが、1 B 3 区の杭列に比べ少数で密度も低い。

水田 丁の町・妙寺遺跡の東端から西飯降Ⅱ遺跡へと広がる埋没谷で、妙寺条里の北辺に相当する東西方向の坪境畦畔より北側、山裾まで広がる水田を検出した。水田面には、径10 cm～15 cmで細礫や細砂で埋まった稻株痕跡が群在していた。なお、東西の坪境畦畔より南側は、中世の水田に削平されていた。畦畔も見出せず、正確な水田の範囲は認定し難い。この水田からは9世紀代の須恵器の杯や甕の体部片や土師器など少量ながら遺物が出土した。

鎌倉時代の遺構

検出した遺構には、水田と畦畔、畠、土坑、溝、ピットなどがある。これらの遺構から遺物の出土は少数であった。

水田 1 A 2 区、1 A 3 区、1 B 2 区、1 B 3 区に広がる水田と畦畔を検出した。大部分は1 A 3 区域と1 B 3 区域に含まれる。1 B 2・3 区の中程より北側では、下面に遺存する古代の水田と10 cmから20 cmの洪水層を挟んで作られていた。南側では洪水層の堆積はなく、鎌倉時代に、洪水層を除去して水田を作ったようである。1 A 3 区に含まれる水田面では、人と牛が並んで往来する足跡を検出した。

151 土坑 古代の東西坪境畦畔と重複する。土坑の機能などは不明であるが、断面土層の観察から自然に埋没していた。床面からやや浮いて3点の瓦器碗が出土した。鎌倉時代後半の遺構であろう。

出土遺物

今次の発掘調査では遺物整理箱にして183箱の遺物が出土した。最も出土量が多いものは弥生時代中期の土器であり、壺・甕・高杯などがある。石製品としては石鏃、石包丁、石錐などがある。これらの中には瀬戸内の影響を受けた土器や河内からの搬入品である土器が少なからず認められる。古墳時代後

期のものとしては土師器の高杯・壺・鉢、須恵器の甕・杯などがある。また、木製品の下駄、大足がみられる。古代～中世の遺物は少ないが、黒色土器碗・瓦器碗、土師皿なども確認している。そのうち特筆すべき遺物としては、弥生時代中期の磨製石剣、線刻により鹿の絵が描かれた弥生時代中期の壺、さらに古墳時代中期のほぼ完形の樽形ハソウ、古墳時代後期の下駄である。

磨製石剣 弥生時代中期の 5373 住居の床面に掘られ、埋没したピット上から出土した。長さ 17.5 cm、最大幅 3.0 cm である。遺存状態は非常によく、刃先部分を中心によく磨かれた精良品である。共伴遺物の年代観から、弥生時代中期のものといえる。磨製石剣は近畿地方を中心に多数出土しているが、そのほとんどの例は破片の状態である。和歌山県内でもこれまで数例しか出土していない。材質は粘板岩で、ほとんど風化もない精品で完形品である。磨製石器の用途を議論する上でも良好な資料となろう。

絵画土器 弥生時代中期の 5180 溝から 2 点出土した。「角がない鹿」1 頭を線刻した壺の肩部片が 1 点。もう 1 点は、壺の受け口状口縁縁帯部に「角のある鹿」1 頭と「角のない鹿」1 頭を線刻する。口縁部に線刻された 2 頭の鹿はオスとメスと考えられる。それに従えば、前者の角のない鹿も冬季の角が落ちたオスではなくメスであろうか。2 点の絵画土器は同一固体である可能性もある。既往の調査や研究から、絵画土器は弥生時代の大和特有の祭祀と関連づけられて論じられることが多い。土器に描かれる題材として最も多いのは鹿で半数、次いで建物、鳥、人物となる。今次の調査で出土した絵画土器は描写に優れ、用いられる粘土も和歌山の土器とは異なることから大和の土器と推定される。和歌山県内では和歌山市太田黒田遺跡、田辺市水取山遺跡に次ぐ 3 遺跡 4 例目の出土となる。大和との文化交流を考える上で貴重な資料となった。

下駄 46 (2A1 区での 5186) 溝から出土した。46 溝からの出土土器はいずれも古墳時代後期 (6 世紀後半) のもので占められる。下駄は和歌山県内では初見例となった。

まとめ

丁の町・妙寺遺跡と西飯降Ⅱ遺跡は中世に至るまで、調査地東西北方を走る谷から、絶えず多数の自然流路が流れ、氾濫や土砂の埋積も頻繁であったようである。流失した遺構や洪水砂にバックされた遺構が多数ある。

弥生時代の集落 弥生時代中期から終末期には住居や溝、土坑、墓などの遺構が作られ、集落となるが縁辺に相当すると考えられる。今次の調査域では 1 区の丁の町・妙寺遺跡と 2 区の西飯降Ⅱ遺跡と比較すると、1A3 区から 1B2 区の東半部までの埋没浅谷を挟んで、遺構数・出土遺物の量とも明確に少ない。同時期の遺構を検出したが、別集落と考えられようか。2 区では、ごく狭い範囲に密集して弥生時代中期から後期にかけての住居を検出した。中期の段階で平面方形の 5400 住居と 5507 住居がある。和歌山県では、紀ノ川下流域に位置する吉田遺跡を除くと、弥生時代中期の集落では平面円形の住居が大多数を占めており、今次の遺構のあり方は注目できる。石野博信氏の研究によれば、河内地方や吉野川流域での同時期の集落では、平面方形の竪穴住居が一定量を占めるようである。今次の調査で検出した弥生時代中期の土器棺に河内産の土器が用いられていることと、絵画土器が出土したことを積極的に評価することができれば、地の利を活かし河内や大和の先進的な弥生文化圏との積極的な交流がなされていたことが想定できよう。

検出した弥生時代の遺構と遺物は大部分が弥生時代中期のもので、弥生時代後期以降、古墳時代前期の遺構、遺物は激減する。今次の調査地は両遺跡の縁辺に近いことを考えれば、その評価は慎重になさ



2A1 区 (西飯降Ⅱ遺跡) 弥生時代中期～古墳時代前期の遺構の全景 (西から)

なければならないが、西飯降Ⅱ遺跡の弥生集落の消長と同じ傾向といえようか。

古墳時代後期の集落 丁の町・妙寺遺跡域では集落が営まれていたか不明である。西飯降Ⅱ遺跡では、46(5186)溝よりも東南に当該期の遺構が分布する。同溝は、分岐させた小溝を備えることから、積極



2B 1 区（西飯降Ⅱ遺跡）弥生時代中期～古墳時代前期の遺構全景（東から）

的に生活に利用され、区画溝としても機能していたと考えられる。

平安時代の生産域 条里遺構や鍛冶遺構を検出した。集落に隣接する生産域であったといえる。検出した条里遺構は特筆すべき成果となった。水田は丁の町・妙寺遺跡と西飯降Ⅱ遺跡の両遺跡にまたがって、東西 80 m、南北 50 m の規模である。水田の中央で南北方向に溝が通り、その両肩は畦状に盛り上がる。溝は幅約 0.8 m・深さ 0.3 m で長さ 70 m の規模で検出された。この溝は北側で東に折れ曲がり、山裾から湧水を引き入れ水路とする。この溝と直交して東西方向の畦畔がある。畦畔は幅約 0.9 m、高さ約 0.15 m、長さ 66 m である。また南北方向の小畦畔が約 6 m 間隔に並んで検出された。溝や水田の耕作土からわずかであるが平安時代前期（9 世紀前



古代の条里遺構（西飯降Ⅱ遺跡）（北から）

半）の土器が出土した。東西畦畔の北側では耕作土層の上に洪水層の砂が堆積していたため、古代の水田は攪拌されずに良好に遺存していたが、畦畔の南側は後世に削平され見出せなかった。水田北半では洪水砂が入り込むこととなり、稲株跡と足跡が明確に検出した。また土壌分析の結果でも、稲のプラント・オパールが高密度で検出され、水田が営まれていることを確認している。

南北溝と東西畦畔は条里型地割に相当し、この条里型地割は国土座標から 14 度西偏する。

今回見つかった古代の条里型地割は和歌山県内で最古の検出例である。調査地一帯は以前から地図上において伊都郡かつらぎ町西飯降・妙寺・丁ノ町で条里遺構が復元できることが知られており、妙寺条里区と呼ばれていた。妙寺条里区は平安時代後期・永承四年（1049）の高野山官省符荘の成立以降による開発とする説と、小字名「大道ノ上」「大道ノ下」によって古代の官道、南海道に関係し、古くみる中野榮治氏の説（中野榮治『紀伊国の条里制』1989 年）もある。

現在の水田は調査区北東の畑谷池から水を供給しているが、古代には和泉山地からの伏流水や谷水を取り込んでいたと思われる。文字資料から妙寺条里を探てみると、平城宮内裏跡から「指理郷」（飯降郷）と表記された荷札木簡が出土している。

紀伊国伊都郡指理郷白米五斗 天平六年三月（734）

また、平安時代の『和名類聚抄』には伊都郡に、神戸・賀美（賀茂）・村主・指理・桑原の五つの郷がみえる。指理郷はかつらぎ町中飯降・西飯降・妙寺地区に想定されている。当地域は古代に伊指郷（飯降郷）と称され、平安時代後期（11 世紀中頃）に高野山金剛峯寺の荘園となり後に官省符荘下方と呼ばれた。13 世紀以降に丁ノ町・妙寺が表れ、近世になると丁ノ町村・妙寺村・西飯降村と記されている。この地区で認められる地図上の条里型地割りが今回検出された条里型地割と一致し、そして、平城宮荷札木簡の年号から当地域の開発が奈良時代までさかのぼる可能性もある。（前田義明）

■名古屋墳墓の発掘調査

遺跡の時代：奈良時代

所在地：橋本市高野口町北名古屋字一里山

調査の原因：和歌山県ランクアップ推進事業

調査期間：2007. 2 - 2007. 3

調査コード：06 - 14・03

文化財指定ランクアップ推進事業

奈良三彩壺は昭和 38 年 10 月 13 日、当畑地の地主である梅谷博男氏が果樹の植替え中に偶然石櫃を掘り当て、その中から火葬骨を納めた蔵骨器として発見された。この蔵骨器は、優美な形と鮮明な色彩をもった窯業史上画期的な資料で、昭和 41 年に石櫃とともに重要文化財に指定されている。なお、この時、これに関連する遺構（墳丘や墓墳など）がわかっていない。

この壺は現在京都国立博物館所蔵となり常設展示されている。また、その複製品が橋本市産業文化会館の玄関ホールに展示されている。

今回の調査の目的は、以上のことから学術的・歴史的価値が特定できていない未指定の文化財について調査を行い、指定等の適正な評価をすることである。発掘調査を実施して、その歴史的価値を明らかにし、文化財指定して保存と活用を図ろうとすることを意図とする。

奈良三彩蔵骨器・石櫃

名古屋墳墓の蔵骨器は、三彩釉をかけたいわゆる



写真 6-1 墓発見当時の石櫃（潮崎浩孝氏より提供）

薬壺型の有蓋壺で、石櫃に納められていたこともあって完全な形で出土している。身（壺）の大きさは高さが 22.5 cm、胴の最大径が 27.5 cm を測る。口縁部はほぼ直立し、体部の最大径は中位よりやや上方に位置し、やや扁球形を呈する。底には外開きする高台を付す。蓋は直径 15 cm を測り、直線的に垂下する口縁部をもち、中央には宝珠型のつまみを付す。

陶土は赤みを帯びた粘土を使用し、成形して素焼した後に器面全体に白色の釉薬（酸化鉛）を塗り、その上に褐色（酸化鉄）と緑色（酸化銅）の釉薬を交互に斑点状に施し、再度本焼を行っている。

発見当時、蔵骨器には約八分目の量の火葬骨が納められ、壮年男子一体分と鷺か鶴の臍の部分に当たる骨が混在していたということである。

石櫃は全体に淡い黄褐色を帯びた凝灰岩製で、蓋と身に分かれる。蓋は屋根形に加工され、古墳の家形石棺に形状が似る。蓋は縦 49.5 cm、横 37.5 cm、厚さ 16.5 cm で、身の縦横は蓋とほぼ同じで、高さは 25 cm を測る。蓋と身の接地面は平滑に仕上げられ、中央には直径 30 cm の鍋底状を呈する円孔を穿つ。

位置と環境

名古屋墳墓は和泉山脈から派生して南北に延びる丘陵先端部の緩斜面に位置する。南方には大きく蛇行する紀ノ川が、はるか向うの山並みには高野の山々を望むことができる。また、古代には畿内域に属し、都との交流も盛んであったと考えられる地域である。

名古屋墳墓の南側に広がる河岸段丘上には、縄文時代から中世にかけての多くの遺跡が点在し、伊都地方では最も大きい応其条里が現在の水田区画にその地割を残している。



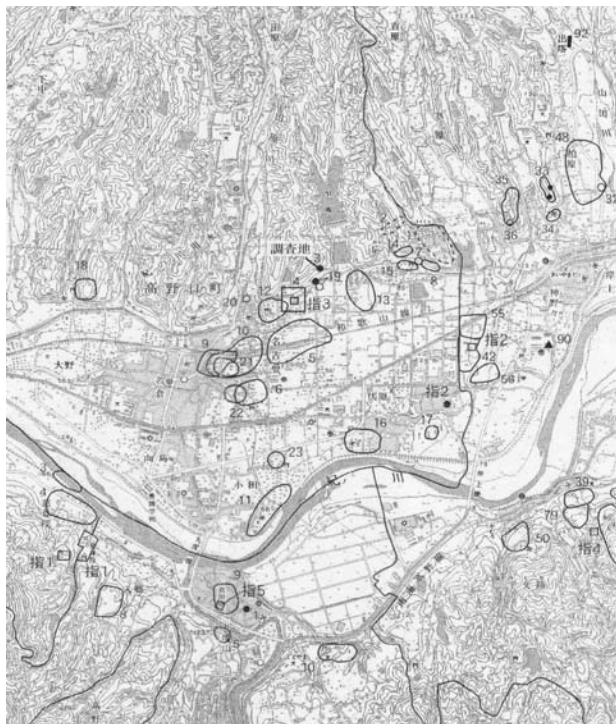
写真 6-2 発見当時の調査（潮崎浩孝氏より提供）

名古屋Ⅲ遺跡（10）では弥生時代の竪穴住居が検出されており、また、その東と南の名古屋Ⅰ遺跡（5）・名古屋Ⅱ遺跡（6）などからも弥生時代の遺物が出土しており、この時期の集落の展開が考えられる地域である。東側の丘陵上には横穴式石室をもつ応其古墳（7）がある。

条里の北西隅を占めるかのように奈良時代の寺院跡である名古屋廃寺跡（4）がある。名古屋廃寺は昭和62・63年に旧高野口町教育委員会によって発掘調査が実施され、瓦積み of 塔基壇跡と金堂基壇跡が確認されている。調査の結果、この廃寺跡は法起寺式の伽藍配置と考えられ、出土瓦などから白鳳時代～奈良時代にかけて存続していたようである。また、名古屋廃寺は氏寺と考えられており、名古屋墳墓との関連が想定されている。

調査

調査地は山裾を東西に通る大和街道から北に少しあがった地点である。この辺りの地形は雛壇状となり、北に上がるほど壇状の面積は小さくなり、現在は調査地を入れて5段が確認されている。なお、調査地は下段から数えて2段目に当たり、石櫃の出土地点の標高は約107mを測る。調査前の現状は笹草が生い茂り、わずかに記念碑の周りと、それに通ずる参道部が除草されていた。今回の調査に当たって



調査地位置図（1／25000）

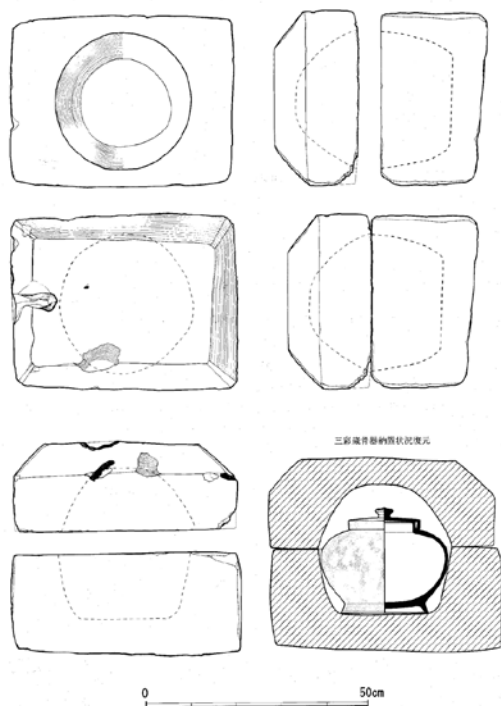
は、まず調査地の平板測量を行うため、調査地一帯の伐採作業を実施し、石碑の土台を解体し、移動を行った。その後、平板による現地地形測量（20cmコンタ）を実施したが、結果的には封土などの痕跡を確認することはできなかった。

発掘調査は記念碑の位置を中心に東西、南北に4m×4m、また、ここから幅2mで東と西に5m、北に3m、南に7mの長さのトレンチを設定し、表土から順次土層ごとに掘削していった。東西、南北のトレンチ部分においては開墾時の掘削が深くまでおおよび、墳墓が構築された当時の地形は確認できなかった。基本層序は東西土層では厚さ約10cmの表土（10YR3/3：暗褐色）→厚さ35～40cmの耕作土（10YR4/2：灰黄褐色シルトに径1～3cm大の礫が2％入る）→地山（10YR6/8：明黄褐色細砂混じりシルトに径1～8cm大の礫が5％入る）であった。南北方向の基本層序も同じ土層であるが、地山上で記念碑の建っていた中心部分の北側辺りから南側にかけて、墓墳構築時の整地土と考えられる厚み12～18cmの層（10YR6/7：明黄褐色シルト）を確認した。

調査地の中央部分4m×4mの区画の記念碑が建っていた地点は、コンクリート基礎の下から砂の充填坑を確認した。砂充填坑は約1m×0.6mの長方形で、深さは50cmであった。当初、この砂充填坑を昭和38年発見時の石櫃を掘り出した坑と考えていたが、後に当時の関係者の助言で、昭和39年の記念碑建立の際の沈下防止ために砂を入れた坑であることが判明した。次に、この砂を除去し、表土と耕作土を掘削し、精査を行ったところ、北側の地



調査前風景



石櫃実測図（岡本敏行「石櫃を持つ火葬墓二題」『大阪文化財研究』第30号より引用）

山上と南側の整地土上から墓壇の掘形を確認した。墓壇の規模は東西約1.80m、南北約2.15mを測り、南北方向に長い長方形を呈する。南北方向の土層を検討したところ、地山上で整地土と考えられる層を確認し、墓壇の北側では殆どこの層は確認できないが、南側においては最も遺りの良好な地点で18cmの厚みであった。従って、墓壇はこの整地土上から構築されている。墓壇構築時(奈良時代)も斜面であったと思われ、北側から掻き出して整地したと考えられる。

墓壇の調査は、十字の土層観察用のベルトを利用し4区画(北東・北西・南東・南西)に分割して進めた。まず、北東の区画のコーナー付近で墓壇掘形と重複する直径36cm、残存の深さ35cmのピット状の遺構を検出した。この遺構は墓壇よりも新しいもので、ここからの出土遺物は無く、墓標に関するものとも考えがたく、性格は判然としない。

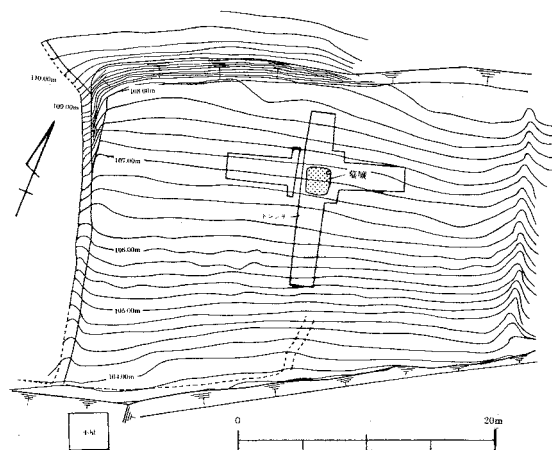
次に、墓壇の土層観察用ベルトの際を断割り、断面観察を行ったところ、昭和38年発見時の掘削坑(攪乱坑)が表土下から検出されたが、北側と西側については耕作土から上方に上がる掘削坑の掘形ラインは確認できなかった。この攪乱坑の規模は東西約1.5m、南北約1.6mを測り、深さは55～60cmで、

深い箇所では墓壇の底まで達する。南北土層においては、底の土層まで記念碑沈下防止用の砂が微量ながら認められ、底まで攪乱坑が達していることを再度確認した。

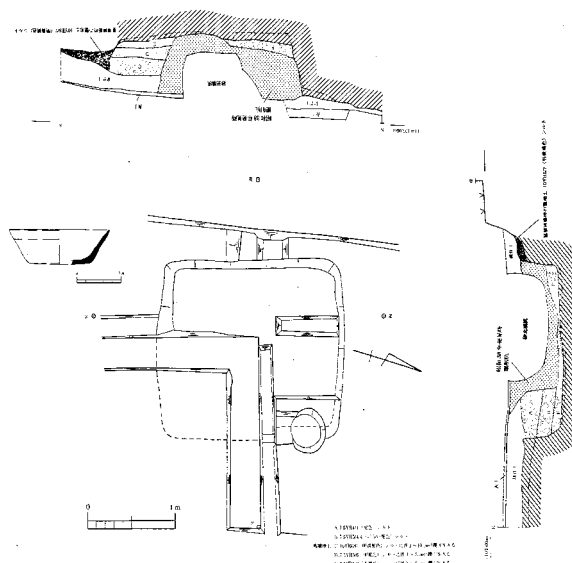
墓壇はほぼ垂直に掘られ、底は平らである。残存の深さは約40cmを測る。埋土は全体的に褐色を呈し、径3～10cm大の礫が1～3%入る。土層の堆積状況はほぼ水平堆積であった。埋土の掘削は慎重に1枚ずつ除去したが、副葬品の発見には至らなかった。墓壇からの出土遺物は、北西の区画の西側壁際の墓壇検出面から約10cm下で須恵器の杯身の破片が1片のみ出土した。これは口縁部から底部にかけてのもので、時期的には8世紀中～末までの時期幅の広いものである。

まとめ

今回の調査においては、墳墓構築時の墓壇の規模



調査地トレンチ設定図



墓壇平面図、土層断面図および出土遺物

を確認できたことがもっとも大きな成果と考えられる。残念ながら、墳墓の封土や墳墓を画する溝などの遺構については確認することができなかった。これについては、後世の削平で消滅したものと考えられる。また、墓誌等の副葬品についても、その発見には至らなかったが、調査区の1/4区画についてはそのままの状態に埋め戻したため、その可能性は無いとも言い難い。

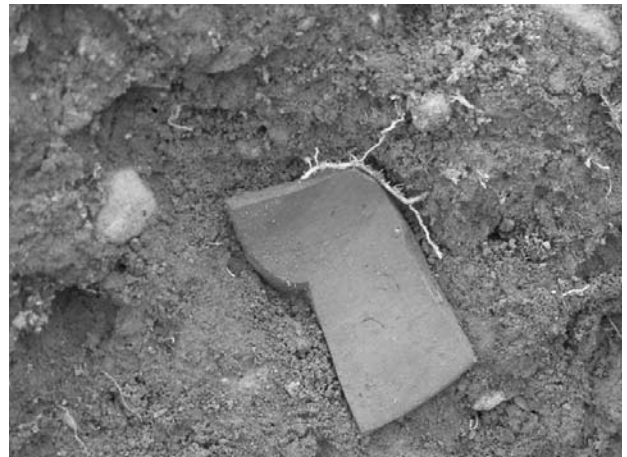
検出した墓墳の埋土は、三彩の壺を蔵骨器として埋納するような精査されたものとは考えがたく、礫を多量に含んだ締まりのないものであった。この墳墓は石櫃内に蔵骨器を埋納するタイプのもので、太安萬侶墓のように木櫃を使用していないため木炭藪などの施設を必要とせず、構築時の掘削土を埋土として戻しただけのものと考えられる。

墓墳の掘形は南北方向に長い長方形を呈するもので、この中で、今回検出した記念碑設置のための砂充填坑の位置や、昭和38年発見時の掘削坑の墓墳内で占める位置は、やや北西寄りであった。故に当初、墓墳構築時の石櫃は、墓墳内の北西寄りの位置に長辺を南北方向にして埋納されていたと言える。

出土遺物は墓墳検出面から約10cm下で、掘形の壁に貼付いた状態で須恵器杯身の破片が1点のみ出土しただけであった。完形品であれば兎も角、なぜ、破片が1片出土するのかが問題とされるところで、埋納時の儀式等により意図的に打ち欠かれたものなのか疑問が残るところである。

次に、時期的な問題として、前述したが、須恵器の時期は8世紀中頃～末に位置付けられ、蔵骨器の奈良三彩壺が古い形態を残して作られた場合には時期的にも矛盾は生じないものと考えられる。また、奈良三彩壺が8世紀の前半におさまるものとすれば、この壺が数十年間伝世して蔵骨器として使用されたものとも考えられる。

最後に、本調査地の南西方向に直線距離にして約250mの地点に白鳳寺院である名古屋廃寺跡がある。従来から、名古屋墳墓の被葬者とこの名古屋廃寺との関係が問われている。調査地も寺域内と考えられることから、より一層の因果関係があるものと思われる。また、この地も畿内の範疇にあることや、仮にこの廃寺が在地豪族の氏寺であれば、中央官人と



須恵器杯出土状況（北東から）



墓墳内土層堆積状況（西から）



墓墳完掘状況（北から）

の繋がりは十分あったであろうし、奈良三彩壺等の優品を入手することは可能であったと考えられる。裏を返せば、律令体制下において、被葬者である支配層が支配下層に対する権力誇示を意識的に行う必要と、中央との繋がりを一般民衆に知らしめたかったのであろうことがありありと読み取れる。

先にも述べたが調査地の上下段にはまだ幾つかの段が存在し、名古屋墳墓の被葬者の墓が存在する可能性も十分あり、被葬者一族の解明に一縷の望みを残していると言える。（佐伯和也）

■野田地区遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～室町時代

所在地：有田川町野田

調査の原因：高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設

調査期間：2006. 5 - 2007.3

調査コード：06 - 21・38

はじめに

野田地区遺跡は、有田川河口より10 kmあまり遡った川南岸の平野部に位置する。周辺は沖積平野と河岸段丘が発達しており、流域ではもっとも広い平地面積がある。野田地区遺跡の周辺には、この平野部を基盤に旧石器時代以降から中・近世にかけての多くの遺跡が営まれており、原始・古代より有田地方の中心的な地域であったといえる。

当遺跡は既往の高速道路の建設に伴い1980年度と1985年度に調査され、低湿地の遺跡という性格上、多くの木製品の出土があり注目された。

調査の成果

発掘調査は3ヵ年にわたるもので、今年度の調査が第2次になる。調査区はⅠ・Ⅱ・Ⅲの3つの区に分かれる。Ⅰ・Ⅱ区は高速道路の橋脚建設に、Ⅲ区は側道建設に係る調査区である。また、Ⅰ区・Ⅱ区は立地により分けたもので、Ⅰ区が沖積地、Ⅱ区が段丘上になる。Ⅲ区は大きく盛土され、その上に重厚な建物基礎が築かれていることが表土掘削途中に明らかになり、掘り下げが困難で危険が生じることから調査対象から除外した。



調査区位置図

Ⅰ区では、段丘と接する付近で古墳時代前期や平安時代から室町時代にかけての溝を7条検出した。これらは標高10 mから12.4 mまでの間を流れては埋まり、流れては埋まりしていたもので、江戸時代以降、この場所は水田となっている。現在の地面の高さが標高約13.8 mであることから、古墳時代から現在までは実に4 m近い堆積があったことになる。低湿地にある溝ということもあて遺物がバックされた状態になっており、残りの良い土器類や木製品が多量に出土した。さながら自然の作用で作られたタイムカプセルと言える。

今回多くの木製品が出土した溝は、1980年度に検出した10条の溝の延長部分に相当し、ほぼ1箇所すべての溝が重なっている。調査方法としては、狭い範囲内で溝が重層し平面での検出が困難であることが予想できたので、想定できる溝の方向に直交するように2本のトレンチを掘削し、それに基にして掘り下げをおこなった。

検出した溝のうちわけは室町時代のものが1条(遺構5)、鎌倉時代のものが2条(遺構6・7)、平安時代のものが2条(遺構8・9)、古墳時代のものが2条(遺構10・11)、土坑1基(遺構12)である。ただ、周りを囲っていた矢板の強度が標高10 mまでしか耐えられず、それより下は掘り下げていない。遺物としては、古墳時代前期以前のものが出土していることから、さらに遡る溝があった可能性がある。

Ⅱ区では弥生時代後期の竪穴住居や鎌倉時代の溝などを検出した。

まとめ

今回の調査を含め、これまでの野田地区遺跡の調査では、旧石器や縄文時代後・晩期の土器、弥生時代中・後期の土器、古墳時代前期から中・近世に至



Ⅰ区遺構8 (南から)



Ⅲ－４区 全景（北から）



Ⅲ－４区 竪穴住居（西から）

る土器類が多量に出土している。これらの多くは、段丘下の溝などに落ち込んだ状態で出土しており、段丘上に集落が存在したことが予想できた。既往の調査では中世の溝や建物は見つかったものの、それ以前の遺構が明確でなかった。今回、弥生時代の竪穴住居が検出されたことで、当時の集落の一端が明らかにすることができた。竪穴住居は後期中頃のものと考えられ、同時期の集落が最近旧吉備中学校校庭遺跡で明らかにされている。高地性集落との関連も含めて、有田川流域における弥生集落の動態を探る上で貴重な資料となるであろう。

古墳時代の建築部材 古墳時代前期の溝である遺構 10 からは、約 50 点の建築部材が出土した。部材として明らかなものとしては柱・梯子・垂木・小舞などがあり、根太らしき加工木も確認できる。

柱材はほぼ全長がわかる完全なものが 2 点（柱 A：長さ 3.5 m、直径 11 cm、柱 B：長さ 2.75 m、直径 14 cm）あり、丸太材の途中から縦方向に 2 分の 1 に半截している。丸太部分は長さが約 1.5～1.8m あり、この部分の下半が掘立として土中へ埋め込まれ、上部の半截部が壁部となる高床の倉庫を復元することができる。2 本の柱は寸法が異なるため、別の建物であったと考えられる。

1980 年度の発掘調査でも、約 50 点の建築部材が出土しており、今回のものを含め梯子が 2 点出土していることから、付近には 2 棟以上の高床倉庫が建っていたと考えられる。また細い丸太の先端を削り込んだ垂木材とみて良い材も、長さの違うものが複数本出土しており、数棟の建物の部材であることを裏付ける。また、壁板と考えられる部材がほとんどないことから、倉が草壁であった可能性もある。

これらの建築材は、あまり損傷を受けずに投棄されていることから、調査区の近くに建っていたものが廃棄されたのであろう。

出土遺物から窺う野田地区遺跡

古墳時代前期 古墳時代の木製品をみると、一般の低湿地の遺跡で多く出土する鍬や鋤などの農具や工具などの遺物が極端に少なく、調度品、紡織具などの一般集落ではあまり出土しない遺物が目立つ。また、土器では祭祀に使われることが多い小型丸底壺の出土が顕著であり、水辺の祭祀を行っていた三重県城之越遺跡の遺物組成と類似している。このほか、同時に出土した建築部材には 2 棟以上の高床式建物のものがある。古い時代の神殿は高床式の建物であったと言われていることから、古墳時代前期に野田地区遺跡でも水辺の祭祀をおこなっていた可能性がある。

遺跡に隣接する藤並神社の祭神は天満の地名があるように菅原道真であるが、古くは武内宿禰が和歌山市山東にある伊太祁曽神社から水主神（すいしのかみ）を勧請したのがはじまりとされる。水主神は水を司る神であることから、野田地区遺跡でおこなっていたと考えられる水辺の祭祀は、藤並神社との関わりを推定することもできる。

和歌山県の古代豪族としては紀氏が有名である。紀氏は古墳時代には軍事に長けた集団で大和政権にも深く入り込んでいたとされる。本拠は紀ノ川の下流域であるが、同族が紀北地方の河川の下流域に拠点を構えていたと考えられる。古代の記録であるが、「紀」を姓にもつ人々がこれらの地域で郡司を務めていることから窺うことができる。紀氏は渡来系氏族であるとの説もあり、実際、紀氏の本拠である紀ノ川下流域では、陶質土器をはじめ朝鮮半島系の遺物が多く出土し、それらは紀氏との関連が指摘され

ている。野田地区遺跡で多くの陶質土器が出土するのも、紀氏との関わりを考えることができる。ところで、伊太祁曽神社の祭神が朝鮮半島の新羅との関わりがある五十猛命であり、藤並神社を勧請したと言われる武内宿禰は紀氏の祖先であるとされていることは、伝承であるにしろ興味深いことと言える。

少し話が飛躍するが、藤並神社の境内には、巨石をもって作られた横穴式石室をもつ天満1号墳が築かれている。この古墳は「泣沢女古墳」とも呼ばれ、発掘調査では12歳前後の女性の人骨が出土している。古墳は6世紀末から7世紀前半代に築かれたものであるが、石室の中からは奈良時代の土器類が多く出土し、発掘調査報告書では、古墳に埋葬された人物を偲んで、その子孫が儀式に使ったものなどの解釈を載せている。また土器とともに役人がつけるベルトの飾金具が出土しているが、これは「烏油の腰帯」と呼ばれているものであり、古代の役人の服装を定めた「衣服令」では、六位以下の下級役人がつけたものであるとされている。地方においてこの位をもつ役人と言え、まさに郡司クラスであり、天満1号墳から出た腰帯も郡司の持ち物であった、換言すれば、郡司である紀氏の持ち物であった可能性も想定できる。そのように考えていくと、天満1号墳に葬られた少女も、紀氏の一族であった可能性があるといえよう。

平安時代 平安時代の溝からは土師器や須恵器、黒色土器などとともに、桧扇、横槌、下駄、曲物、犁などが出土した。また、1980年度の調査では、平安時代前期の溝から人形、斎串、馬形などが出土している。形代を使った禊などの儀式は、都を中心に皇族・貴族階級で行われていたもので、地方で、そのような儀式を行うとなれば、当然、中央と関わ

りのある人物であり、最も考えられるのは郡司階級の人となる。平安時代前期の仁寿四年(854)の文書である『有田郡司解』では、有田地方の郡司として「紀宿禰真貞」「紀朝臣・・・」の名前が出てくる。また、郡司が持っていた田畑や屋敷地には、有田川町の地名が出てきており、「野田大溝」の名も記載されている。案外、今回検出した平安時代の溝が、この「野田大溝」をさし、「紀」を姓にもつ郡司によって禊がおこなわれた可能性がある。

また、今回、遺構9から出土した桧扇も、当時、上流階級の持ち物であることから、やはり郡司が儀式に使ったものであると想定することもできる。

鎌倉時代から室町時代 これまで野田地区遺跡では、1980年度の調査分も含めて、瓦器や土師器などとともに下駄、しゃもじ、曲物、漆椀のほか、笹塔婆や角塔婆(位牌)が出土している。

笹塔婆は薄い板に「南無阿弥陀仏」などの経文を書いたもので、1980年度の調査で、約800枚出土している。柿経とも呼ばれ、鎌倉時代から室町時代には無数の笹塔婆を束ねて神社などに奉納した例が多く、供養などに使ったものが溝や井戸などから発見されることもある。野田地区遺跡でも笹塔婆を水に流し、先祖を供養する儀式をおこなっていた可能性がある。

野田地区遺跡の範囲内には南北朝時代の宝篋印塔があり、調査でも古代末から中世にかけての瓦が出土するなど寺の存在が窺われる。藤並神社の東隣に位置する青蓮寺で見つかった版木から、野田地区遺跡付近に観音寺の名をもつ寺が存在していたことが窺え、笹塔婆を流す儀式には観音寺が関わっていた可能性が考えられる。このように野田地区遺跡では古墳時代前期以降、水に関する儀式をおこなっていた可能性がある。(川崎雅史)



Ⅰ区遺構9出土桧扇



Ⅰ区遺構8土器出土状況

旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代、奈良時代～鎌倉時代

所在地：有田郡有田川町下津野地内

調査の原因：有田川町公共下水処理施設建設

調査期間：2006.5 - 2006.8

調査コード：06 - 21・11

遺跡の概要

旧吉備中学校校庭遺跡は有田川下流域、左岸の低位段丘面に位置する。

既往の調査では、弥生時代後期初頭～後半の集落、古代および中世の集落を検出している。

調査の成果

弥生時代後期の竪穴住居 2 棟、方形周溝墓 2 基、溝 7 条（1 次調査区から連続するものを含む）、中期の竪穴住居 1 棟、奈良時代の溝 2 条、中世の溝、土坑などを検出した。以下では、弥生時代後期の遺構を中心に述べる。

竪穴住居① 後期の竪穴住居である。平面形は径約 6.5m の円形で、現存する壁の高さは 10cm 前後である。一部後世の溝により壊されているが、主柱は 7 本と考えられる。

竪穴住居② 後期前半の竪穴住居で、拡張に伴う建て替えがなされている。平面形は、建て替え前が径約 5m、建て替え後が径約 6m の円形である。壁は削平のため残っていなかった。壁溝は深く、場所によっては 25cm を測る。主柱は溝により壊されはっきりしない部分が多いが、拡張後については 4 本確認できており、その配置から推定すると 6 本となる。拡張前の主柱は確認できなかった。

切り合い関係から住居築造以前に後期溝③、⑦が、住居廃絶以後に④が掘削されたことがわかる。

竪穴住居③ 円形竪穴住居である。残存状態は悪いが、部分的に残る壁溝から復元すると径約 8.5m となる。中央に楕円形の土坑とその長軸の両端にピットを配する松菊里型住居の特徴を有するが、主柱は壁溝内側に円形に並んでいる。中央土坑からは、多数のサヌカイト製チップや石錐が出土し、石器製作



遺跡の位置図 (縮尺 1 / 25000)



調査区位置図 (縮尺 1 / 25000)

がおこなわれていたと考えられる。

また、床面の南、南東部分には焼土面が認められた。1～2cm 程度の厚さの粘土を貼っており、かなり高温の熱を受けた痕跡が見受けられる。主柱穴の可能性が高いピットからの出土遺物や、中央土坑の形態から中期まで遡ると考えられる。

方形周溝墓① 拡張区で検出した後期の方形周溝墓である。記録保存の発掘調査対象地外であるため、主に平面形態の確認をおこない、遺構は部分的な掘削にとどめている。規模は、周溝内側で東西 8.9m、南北 7.8m を測る。南西隅、南東隅の周溝は検出時点で途切れており、陸橋となっていたか、そうでなくとも他に比べ極端に浅くなっていたと思われる。

墳丘は残存していなかった。主体部については、近世の溝が南北に走るため中央付近の状況は不明だが、南西部、南東部でそれぞれ長楕円形の土坑を検出した。南西部の土坑について一部掘削したところ、幅約 1m、長さ約 1.8m、残存深さ約 15cm（平面寸法は攪乱部復元推定値）、底面は平坦で、人為的埋土であった。遺物は小片のため時期を確定できないが、弥生土器片が少量出土しており、主体部の可能性は否定できない。南東部の土坑は非常に浅くはっきり



方形周溝墓①（西から）

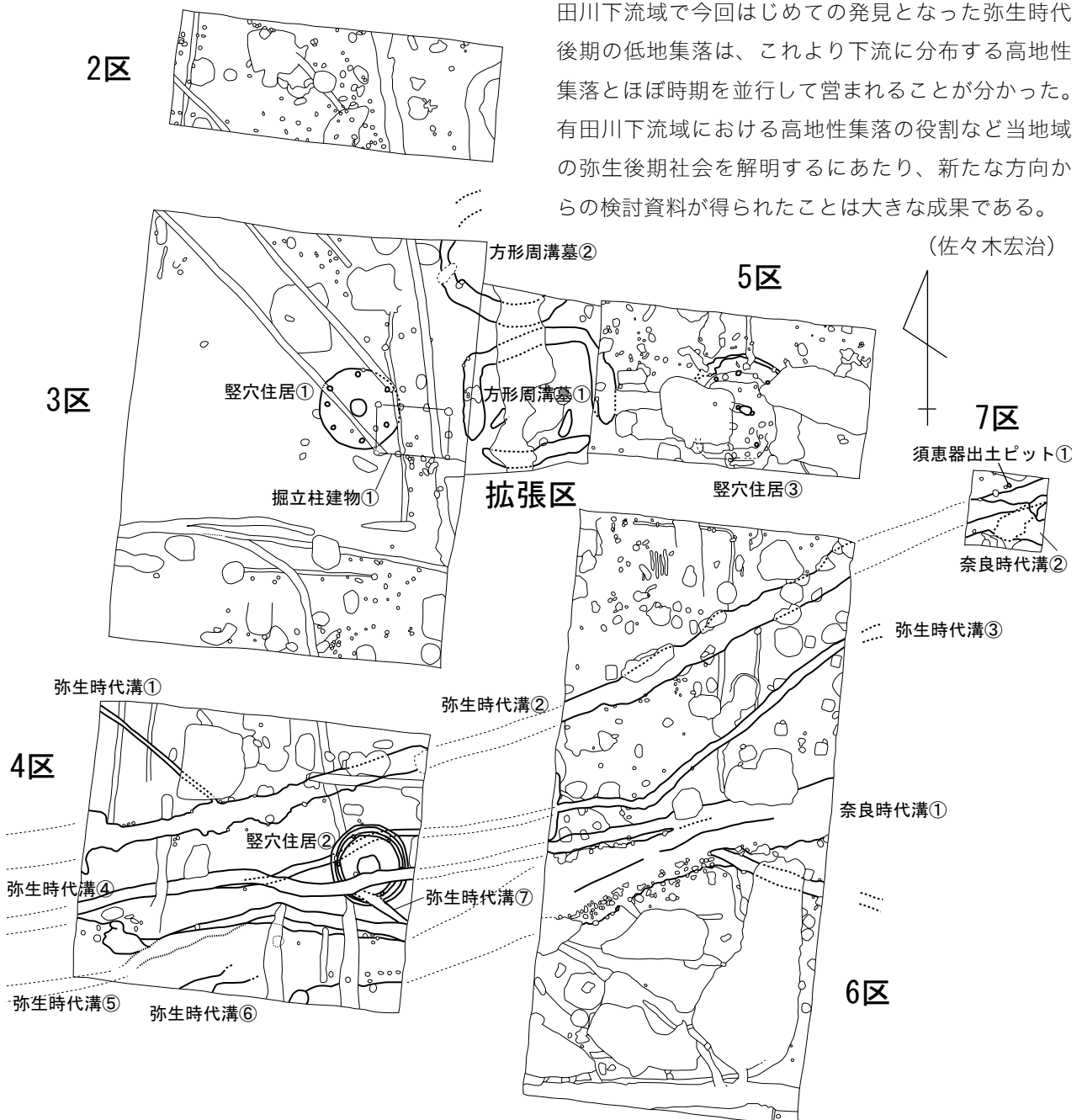
しなかった。遺物は、東辺溝で少量の後期土器が出土している。残存状態は悪く、溝底から浮いた位置での出土である。この北側で後期の方形周溝墓②を検出している。

弥生時代後期溝①～⑦ 4区、6区、7区で検出した東北東に延びる溝で1次調査区南で検出した溝と連続するものを含む。溝の断面形は多様であるが、逆台形が多い。残存深さは最大90cmである。

おわりに

今回の調査では、大きく分けて弥生時代、古代、中世の生活の痕跡を確認することができた。特に有田川下流域で今回はじめての発見となった弥生時代後期の低地集落は、これより下流に分布する高地性集落とほぼ時期を並行して営まれることが分かった。有田川下流域における高地性集落の役割など当地域の弥生後期社会を解明するにあたり、新たな方向からの検討資料が得られたことは大きな成果である。

（佐々木宏治）



2次調査遺構平面図（縮尺1／500）

■ 藤並地区遺跡の発掘調査

遺跡の時代：鎌倉～江戸時代

所在地：有田郡有田町天満 117 他

調査期間：2006.12 - 2007.3

調査の原因：県道吉備金屋線道路改良事業

調査コード：06 - 21・32

遺跡の概要

藤並地区遺跡（32）は、有田郡有田町（旧吉備町）天満・土生・明王寺・水尻に所在し、有田川河口部から約 10 km 遡った左岸に位置する。藤並地区遺跡の所在する旧吉備町は、有田川流域では最も安定した沖積平野と河岸段丘が広がる地域である。この平野部と下位段丘を基盤に旧石器時代から中・近世に至る各時代の遺跡が点在し、藤並地区遺跡の周辺部は、原始・古代より有田地方の中心的地域であったと言える。



遺跡の位置と周辺（縮尺 1 / 40000）

今回の調査地は、藤並地区遺跡全体の中では北端ないしは北半部に該当し、一般国道 42 号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東側に位置する。このことから奈良時代から中世における遺跡周縁部の土地利用の一端が解明されるところであった。

調査の概要

調査地の現地地形は、盛土による宅地化や果樹園などによりかなり改変されているが、鎌倉時代から室

町時代の旧地形は大きく南西から北東方向に緩やかに傾斜する。今回の調査地の南北両端の距離 250 m では、約 2 m の高低差を認めることができる。

調査地は、大きく北側と南側の 2 箇所に分れ、地目の違いにより北側から順にⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と呼称して調査を行なっている。

検出遺構

各調査区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田を主体として、Ⅰ区では大別して 4 面、Ⅱ区では 2 面、Ⅲ区では 1 面のみが確認できた。検出遺構の主だったものとして、Ⅰ区では鎌倉～室町時代の粘土採掘土坑・谷状落ち・石列状遺構・畦畔状の高まりなどを、Ⅱ区では土坑・畦畔状の高まりなどを、Ⅲ区では土坑・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による液状化の噴砂を確認した。なお、何れの地区においても踏み込み状遺構と考えられる人間・牛の足跡と稲株痕を多数検出した。

石列状遺構は、谷状落ちの堆積層の上部に一定の幅分（約 2 m）に粗砂礫混じりの土砂を盛上げ、その上に大小の割石を乱雑に据え置いた状態にある。検出時には、粗砂礫混じりの土砂の範囲は、土質の



Ⅰ区 石列状遺構（南南東から）

違いから乾燥度合が著しく、明らかに谷状落ちの埋積土とは異なる様相を呈していた。石列状遺構に伴う客土と考えた埋土には、狭い範囲において今回の調査では、最も遺物の密度の高い状況となる。遺物は、鎌倉時代を主体とした土師器土釜、瓦器碗・皿・三足釜、須恵質捏ね鉢など、細片化した状態で多量に出土している。

谷状落ちは、北東端で標高 17.6 m ～南東端で 17.5 m の数値を示す。部分的ではあるが、谷状落ち 20 m 以上、深さ平均 0.75 m となる。谷状落ちは、平面的に検出した範囲において北西－南東方向にサ

ブトレンチと土層断面観察用の畦を残し、堆積状況の観察に努めた。下部では比較的、流速の速い状況の中で細砂・粗砂を含む粘泥が堆積したものと思われる。上部では、流速の遅い澱みの状態の中での埋積が認められる。観察した限りでは、有機質の混入の少ない泥溜りの状況を呈している。谷状落ちは、奈良時代の遺物も混在するが、瓦器・鉢・土師器・土釜など鎌倉時代のもので占められる。限られた掘削範囲であるが、遺物の内容は、下位の層においても同様の傾向が認められる。

噴砂は、Ⅲ区の南半を北北西から南南東方向にかけて走向し、最大で約1mの幅をもつ。調査区内では延長16mにおよび、細砂・粗砂が噴出している。噴砂は、13世紀の小溝群によって削り取られていることから中世以前の地震痕跡と判断できる。噴砂の供給源となる下部の堆積層は、第3層系包含層（旧耕作土）除去面から約50cmの深さで青灰色細砂・粗砂層が確認でき、噴砂の供給源となったものと考えられる。

出土遺物

出土遺物の大半は、遺物包含層（旧耕作土）や谷状落ちから出土した鎌倉時代の土器類で占められるが、室町時代の土器類も少量ある。その他、旧石器時代の頁岩製の縦長状剥片、縄文時代の石鏃・砂岩製窪み石、弥生時代後期の土器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦がある。また、時期不詳の敲き石・石錘・サヌカイト剥片が十数点出土している。

鎌倉・室町時代の遺物には、土師器（皿・土釜）、瓦器（椀・皿・鉢）、瓦質土器（播鉢・三足釜・火鉢）、陶器（備前播鉢・甕・常滑甕）、磁器（中国製白磁碗・青磁碗）、土錘がある。これらの遺物に混じって、砂岩製砥石・鉄滓数点、鉄片1点、鉄砲弾（鉛玉）1点が出土している。

鉄砲弾は、直径11.5mm、重量8.88g（2.368g）を量る。鋳型の合せ目痕が明瞭に観察できる。写真で見える鋳型の合せ目痕は、上下方向に細筋状の2条の突線として遺存している。また、上下方向の突線に対して直行する方向にも突線状の細筋を認めることができる。全体では4区分されたように見受けられる。後日を期して、大きさ・重量などの規格、鋳合せなどについての県内外の事例との比較を行い

たい。現時点での県内での出土事例は、10点内外に留まる。なお、鉄砲弾は、現地から取上げ後に風化が進行し表面上は灰濁色を呈している。

まとめ



Ⅱ区出土 鉄砲弾

調査成果と周辺の現状地形から、調査地付近の古い地形を考える事が可能となった。まず、Ⅰ区で谷状落ちの南北両肩に近い部分を検出したこと、北東端では調査区外の町道部分から北側の丘陵に向かって急に高くなっていること、また現状地形から考えて、調査地の西側に位置する神楽山の南麓および東麓から天満1遺跡（16）の西端を抜けて、野田地区遺跡（38）の段丘崖に向けて開析谷の広がりが認められる。調査地では、谷状落ちの地形状況と出土遺物から鎌倉時代に埋積が進んだ状況を窺う事ができる。

本年度の調査では、既往の調査でも検出されている鎌倉時代を中心とした遺構・遺物が検出され、遺物包含層化した水田耕作土の遺存によって中世期から江戸時代にかけての集落から外れた範囲の状況が判明してきた。集落や屋敷地に関係する遺構は、何れの時代においても今回の調査範囲内では存在しないことも明らかとなり、鎌倉時代以後の水田化の様相を考える上で欠かすことのできない資料を得ることができた。

調査では、中世の開発・水田経営を担った人々の集落に関係する明確な遺構は発見されず、上記した近接地点に再度求める必要もあるかと思われる。

遺物からみると、鉄滓・鉄片・鉄砲弾（鉛玉）などは、限られた点数であり、先の結果から集落域から離れているとはいえ、今後の周辺部の調査において関連する遺構・遺物の検出に注意が払われる必要がある事は言うまでもないところである。（土井孝之）

重要文化財加太春日神社本殿 保存修理の設計監理

所在地：和歌山市加太

建築年代：慶長元年(1596)

修理期間：平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月

加太春日神社は加太の中心部に位置し、天児屋根大神・武甕槌大神・経津主大神・天照大御神・住吉大神・大山咋大神を祀る神社である。当社の創立は明らかでないが、『紀伊続風土記』によれば、当初は天照大神一座を祀っていたが、中世に住吉社を合祀し、その後さらに春日三神を合祀した。それ以来、春日神社と称するようになったという。

社殿は一間社流造、正面千鳥破風及び軒唐破風付、檜皮葺の建物で、慶長元年(1596)に建立されたものである。桃山時代の建物らしく、のびやかな墓股彫刻、均整のとれた全体のプロポーションに特徴が見られる。

建立後、寛永 11 年(1634)、寛文 11 年(1671)、元禄 15 年(1702)、享保 6 年(1721)、明和 9 年(1772)、寛政 11 年(1799)、文化 8 年(1811)、天保 7 年(1836)、天保 15 年(1844)、明治 2 年(1869)、明治 29 年(1896)にそれぞれ修理が行われている。

建物は昭和 6 年 12 月に国宝建造物として文化財指定され、昭和 12 年(1937)には組物から上を取り解す半解体修理が行われた。その後、屋根葺き替えを除けば大きな修理はなく、昭和 50 年(1975)に葺き替

えられたのを最後に、現在に至っていた。近年には台風などで千鳥破風や軒唐破風の軒先付近が破損し上目皮がめくられたほか、全体に平葺は耐用限度に達してしまっており、全面的に葺き替える必要があり今回の事業となった。

今回の修理は、平成 18 年 11 月に国庫補助金交付決定があり、事業に着手した。神社ではこれを受けて、すぐに屋根工事の入札を行った。

工事は屋根ではおもに平葺きの全面と、軒付けの一部を葺き替えるものである。いっぽう軒付けの大半はまだまだ健全であったため、タワシでケレンするのみで再利用した。腐朽した屋根の野地は、腐朽部分の木舞を打ち替えて補修したほか、箱棟、棟飾りも解体し、破損部分を補修した。また千木や堅魚木などに打たれた飾り金具は全ていったん取り外し、金箔を擦し直すこととした。加えて箱棟の銅板包みもやり直している。このほか霧除け庇の土台の一部に、腐朽が見られたため揚げ屋して取り替える工事を行った。

今回の保存修理工事の事業期間は 5 ヶ月と短かったが、滞りなく完了し、素屋根を取り払うと、優美な檜皮屋根の社殿が姿をあらわした。(御船達雄)



桧皮葺きの状況



加太春日神社の位置



竣工の状況

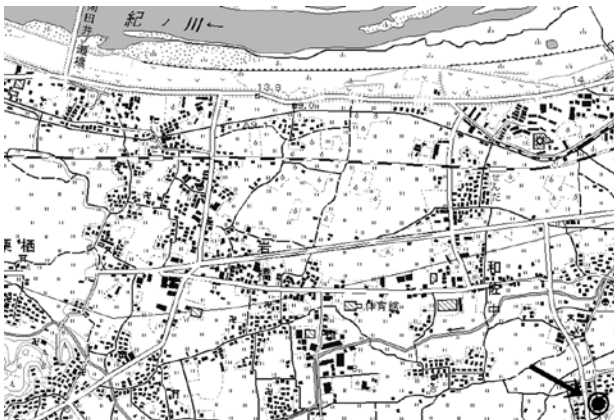
重要文化財旧中筋家住宅保存修理の 設計監理、修理修復

所在地：和歌山市禰宜
建築年代：江戸時代末期
修理期間：平成12年2月～平成22年3月

重要文化財旧中筋家住宅は、和歌山市禰宜にある江戸時代の大庄屋の遺構である。保存修理事業は和歌山市の事業で、センターは設計監理と修理修復業務を受託している。事業開始以来すでに6年余りが経過しており、長屋蔵、北蔵はほぼ修理が完了している状態で、平成18年度はスタートした。前年に引き続き、主屋の屋根葺き工事を行ったほか、主屋各部の造作修理の修理、組み上げを実施した。また表門も本格的な木工事に着手した。破損の大きかった小屋組修理の修理方針を策定し実施したほか、各部造作の修理方針も検討した。内蔵は屋根工事の設計と監理を17年度に引き続いて実施した。

主屋の修理

主屋は前年度に三階屋根のすべてと、土間台所部大屋根の一部を葺き上げたところまで完了していたが、残る全ての部分の屋根葺きを行った。再用予定瓦を調査した結果、棧瓦の役物瓦などで不足があり、これらすべてについて図面を作図し、不足分員数を出し、補足瓦製作と屋根葺き工事を併せて設計書を作成した。工事実施にあたっては、新調補足瓦の生型検査を行っ



旧中筋家住宅の位置

たほか、瓦合わせ、瓦割り、空葺下地等が良好に施工されるよう工事監理を行った。

主屋木工事は峠を越えたところまで前年度までに進めていたが、細部造作などがまだ残されていた。中庭縁側や表座敷の濡れ縁は雨漏れや風雨のために破損がひどく、これらの修理方法について検討し、技能者と打ち合わせしながら、各部材の修理を行っていった。また大屋根懸魚は破損がひどかったため、原寸図を作成し不明箇所は類例等を参考にしながら、実施図面を作成した。

主屋左官工事は各壁面の壁下地作りがほぼ完了した状態であった。外壁は鼠漆喰で塗られていたが、この色合いを出すのが難しく、技能者と打ち合わせしながら、色味の調整を行い施工した。また屋根棟積みには目地漆喰がかつてはあったため、今回の修理にあたってはこれの復旧も行った。鬼瓦の影盛や目地漆喰の割付などは、修理前の実測や痕跡を頼りに施工した。

現状変更が許可されカマドの復原をすることとなっていたが、土間廻りの修理がほぼ完了したので、カマド製作も計画した。もともとの姿がはっきりしないので、重要文化財中家住宅（奈良県）と重要文化財高林家住宅（大阪府）の古いカマドの調査を行い、これを参考に実施計画を立案した。細部の納まりについては技能者と施工中に打ち合わせしながら施工した。

表門の修理

表門は前年度までに土台の補修を完了していた。18年度は主屋木工事が一段落したので、木工事に係る技能者は表門に振り向けて表門木工事を重点的に進めていくこととした。

まずは上部構造の作業を円滑にするためにも、床組



主屋棧瓦葺き作業

廻りの補修を計画し、取り替え材、再用材を決定し、施工監理を行った。床組は大引据え付けまで完了したところで、小屋組の修理に取りかかった。

小屋組は明治時代後期に一度屋根葺き替えがなされていたものの、大幅に雨漏りを来してしまっており、梁や垂木、母屋などが腐ってしまっているところが多数見られた。しかし小屋組を全て解体すると継手はあるが延長30mもの地棟を下ろす必要があり、小屋壁も保存できないことになる。文化財保存上の措置から、小屋組は極力解体せずに修理を進められるよう計画した。垂木は全て外さずに、破損したものだけを解体した。破損した垂木はその状況に応じ、矧木、継木修理を行った。

上記のように小屋組を解体しないこととしたため、腐朽した梁の取り替えが物理的に不可能となった。これにより梁を鉄骨金具で補強して屋根荷重を持たせることを計画し、合掌状の鉄骨金具（ステンレス製）の設計を行った。また軒先の腕木は垂下したり、破損したりしていたので、出桁をはね上げる補強金具も設計し取り付けた。

表門木工事はこのほか、外壁鎧壁まわりの補修組

み上げを行っている。

内蔵の修理

内蔵は前年度までに大屋根の本瓦葺きを完了していたが、下屋庇は未施工であった。今年度は下屋庇の屋根葺き工事を行った。下屋庇は柱3本で支えるのみであるので、出来るだけ屋根を軽くするため、銅板下地を入れ込んだ空葺き工法とした。

木工事は腰壁板張りの修理を行った。調査の結果、現状腰壁は建築当初の明治19年に張られて以来、そのままであることが判明した。東面は廊下の雨仕舞いが悪かったため、ずいぶん腐朽していたが、その他は裾部分を除けばおおむね健全であった。建築当初の板が保存できるよう古材の修理を計画し、東面を除いて解体しないで板の修理を行った。

左官工事は外壁の土壁下地の修理を進めた。部分的に破損しているものの、すべて解体して修理するほどではなかったため、破損箇所に応じて下地を修理し、年度末には漆喰下地の中塗りがほぼ完了することろまで進めることが出来た。（御船達雄）



かまど造りの状況



表門鎧壁の組み上げ



主屋根葺き工事完了状況



内蔵は下屋庇を葺き、壁は中塗りまで完了

重要文化財福勝寺本堂ほか2棟 保存修理の設計監理

所在地：海南市下津町橋本
建築年代：室町時代後期
修理期間：平成17年1月～平成20年3月

福勝寺本堂ほか2棟の保存修理事業は平成17年1月から開始し、平成18年度は本堂・求聞持堂^{ぐもんじどう}の解体部材の修理を中心に施工を進め、本堂の軒廻りまでの組立を完了した。

本堂の基礎工事

木部組み立てに先立ち、礎石据え替えなどの基礎工事を施工した。本堂及び求聞持堂の礎石には、主に青石と呼称される緑泥片岩が用いられている。寺院の石庭などにも重用される美しい石材で、福勝寺の周辺には緑泥片岩の岩盤が至る所に露出していることから、入手のたやすい石材であるが、石質は非常にもろく層状に剥離しやすい傾向がある。実際福勝寺で使用されていた礎石においては、柱の中心付近で折れるように割れていたものが数個あったほか、表面が崩れて柱との取り合いに不都合を生じているものも確認された。

破損した礎石の据え替えと求聞持堂の現状変更に伴い、基礎部分の発掘調査を行ったところ、本堂及び求聞持堂は岩盤を造成した敷地に建てられており、多くの礎石が岩盤上に直接置くように据えられていることが確認できた。このため礎石の破損と比較して軸部の



福勝寺の位置

不同沈下は少なく、本堂の軸部が500年もの間、解体修理をおこなわずに維持されてきた大きな要因と考えられる。

建物の基礎部分は正側面に低い石積みを設け、基壇状に造成されており、背面は岩盤を直接くりぬく形で雨落ち溝が設けられている。基壇部分の岩盤上に設けられた土層は薄く、遺物もほとんどなかったため、現建物以前の状況を確認することはできなかった。しかし現在求聞持堂と取り合う本堂東面にも石積みが廻り、本堂が当初独立した建物として建てられていたこと、本堂軒支柱は求聞持堂建立前には挿入されていたが、当初までは遡らないことなど木部の調査で推定していたことが裏付けられた。

礎石の据え替えにあたっては、在来の工法に準じたが、求聞持堂は半解体修理であり、一部軸部をジャッキアップしながらの施工であったため、モルタルで根巻きを施し補強した。

木部の修理

本堂には、主に松材と楠材が使用されており、特に



岩盤上に据えられた軒支柱礎石



求聞持堂礎石の据替



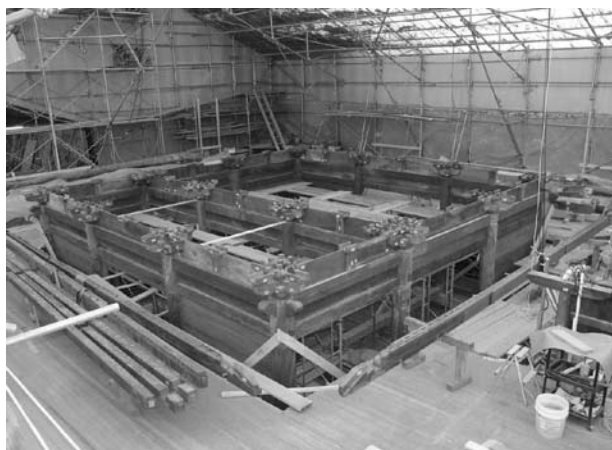
本堂の貫の修理状況

松材の虫害が著しかった。これらの部材の多くは小径の原木から製材されており、化粧面にも辺材部分が含まれているため随分と破損が進んでいる印象を受けたが、解体して十分に調査を行ったところ、芯材部分は木目が詰まり、多くの当初材は十分に堅牢さを保っていると判断した。

また、本堂の丸桁、頭貫、飛貫、足固貫には、3間一丁材が使用されており、大きな特徴となっている。本堂の柱間には薄い板壁と建具しか設けられていないため、構造的には脆弱な建物であると考えられたが、要所に通し材が多用されることで、籠状の構造体として柔軟な耐力を有していたと考えられる。

今回の施工にあたっては、この特徴を保持するため、桁や貫類の修理も安易に継木などを施すのではなく、可能な限り一本の通し材としての性格を残せるよう留意して作業を進めた。特に外陣内部の頭貫、飛貫には、室町期の参詣者による墨書が多数施されており、資料的価値も損なわないよう慎重に補修した。

本堂はおよそ百年前後ごとに修理が繰り返されてい



軸組の組み上げ

るが、求聞持堂が増築するようなかたちで建てられた慶安・寛文期と、天保期の改修の規模は大きい。特に天保期には、南北に架け渡された大梁が2本とも入れ替えられており、同時に軒の部材の多くが取り替えられ、形状や勾配も変えられている。しかし桔木をはじめ、多くの当初小屋材が、調整を施しながら元の位置で再利用されている。

現在慶安・寛文期の姿に復原するかたちで工事を進めているため、軒の勾配も復旧という名のもとで再び改変を受けることとなる。今回の修理においても、寛文期とは納まりや形状の異なる天保期に補足された部材を、原則として修理前と同じ位置で再用した。部材の垂れなど変形も大きく、ひとつひとつの部材を調整しながら組み上げていくことには多大な労力がかかる。しかし今、現場で大工職人達が天保期の大工の名前が誇らしげに記された古材と真摯に対峙する姿勢にこそ、この建物のさらなる歴史が刻まれていくのである。

(多井忠嗣)



本堂頭貫の組立状況



本堂化粧垂木の組立状況

重要文化財護国院多宝塔、鐘楼、楼門 保存修理の設計監理

所在地：和歌山市紀三井寺

建築年代：室町時代

修理期間：平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月

護国院は通称を紀三井寺といい、宝亀元年（770）に、渡来僧の為光上人によって開基された古刹である。十一面観世音菩薩像を本尊とし、西国三十三所観音霊場の第二番目札所となって隆盛をきわめた。本堂が県指定文化財、多宝塔、鐘楼、楼門が国の重要文化財に指定されている。近年、国指定物件の 3 棟の塗装が傷んできたことから、保存修理事業に着手することとなった。

多宝塔

多宝塔は三間多宝塔、本瓦葺で、室町時代の文安 6 年（1449）に建立されたものである。昭和 26 年（1951）に台風の倒木で大破した災害復旧で、解体修理がなされた。それ以来、大きな修理はなかったが、木部塗装が全体にはげてきている状態で、また下層屋根の上層屋根雨落ち部分から雨漏りをきたしていた。今回の修理では下層屋根の本瓦葺きをいったん解体し、腐朽した野地板や軒先の茅負、裏甲などを取り替える工事を行った。年度末までに野地の補修をおおかた終えた状態まで進めた。

木部に塗られた塗装はすべてはがした。来年度から、



護国院の位置

これに伝統的な塗装仕様で塗る予定である。この他には棧唐戸の締め直しを行うほか、欠失している飾金具を新調する工事を行う予定である。

鐘楼

鐘楼は桁行三間、梁間二間、袴腰付鐘楼、入母屋造、本瓦葺の形式で、天正 16 年（1588）に建立された軽快なデザインの鐘楼である。多宝塔と同じく、屋根が部分的に雨漏りを来しているほか、塗装が全体にはげてきている。今年度は工事は未着手であるが、来年度に屋根工事、塗装工事を実施する予定である。

楼門

三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺の形式で、永正 6 年（1509）に再建、永禄 2 年（1559）に修理されたと伝わっている。他の 2 棟と比べると屋根は健全で、塗装工事のみ行う予定である。今年度は古塗装を落とす作業を行った。来年度で実際の塗装に取りかかる。多宝塔、鐘楼、楼門ともに前回の昭和修理で塗装仕様変更されており、どのような仕様で実施するか、現在調査を行って検討している。（御船達雄）



多宝塔は古塗装ケレンが完了



多宝塔下層屋根の裏甲等の修理

重要文化財那智山青岸渡寺本堂 保存修理の設計監理

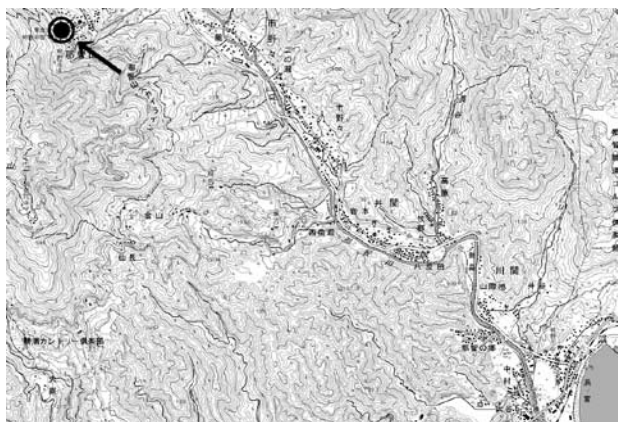
所在地：那智勝浦町那智山

建築年代：天正 18 年(1590)

修理期間：平成 18 年 3 月～平成 18 年 12 月

那智勝浦町にある那智山青岸渡寺本堂の保存修理工事は、平成 18 年 3 月からこけら板の葺えに着手し、8 月末に軒足場の建設を行い、現場での工事を開始した。今回の葺き替え工事では、素屋根を設けなかったため一日に施工できる分を解体し、葺き上げていった。そのため 9 月上旬から中旬にかけての長雨で工事は出遅れたが、天候が安定してから職人を増員して当初の予定どおり 11 月末に葺き替え工事は終了し、12 月には軒足場を解体して事業を完了した。

向拝部分は、勾配が緩いためこけら板の蒸れ腐れが



那智山青岸渡寺の位置



向拝の野垂木修理

ひどく、野地もかなり痛んでおり、野垂木を取り替える必要ならなかった。その際、軒先部分でもある程度勾配がとれるように野垂木を調整した。そのほかの箇所では野地の痛みはほとんどなく、野地小舞は、大正 14 年修理の時のものが、現在も残っている。前回昭和 60 年の修理では、破損の大きい小舞の間に、新しい小舞を入れて補修していたが、今回も大正の小舞がヤせて竹釘が利かない部分などには、前回と同様に小舞と小舞の間に新しい小舞を補って野地を修理した。前はサワラのこけら板を使用した、今回は杉のこけら板を使用した。杉のこけら板は側を詰めて葺くと、しばらくすると継ぎ目が盛り上がるので、板を 2 ミリ程度あけて並べて葺いた。箱棟には傷みはみられなかったため、箱棟を据えたままで品軒・駒額を補修した。

国庫補助事業としての葺き替えは正面と側面の前より部分のみで、12 月末に事業は完了した。残った背面と側面の葺き替えは、那智山青岸渡寺の自主事業として行うこととし、平成 19 年 3 月から工事に着手しており、6 月中には完成する予定である。(寺本就一)



こけら板の葺き上げ状況



正面及び側面の一部竣工

県指定文化財総持寺本堂保存修理の 設計監理指導

所在地：和歌山市梶取

建築年代：安政元年(1854)

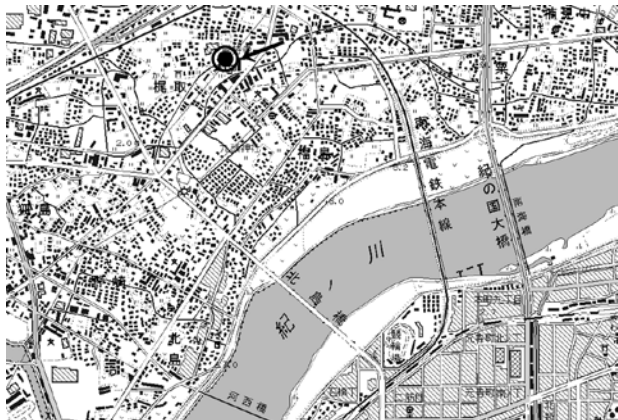
修理期間：平成 15 年 12 月～平成 19 年 4 月

総持寺は和歌山市梶取にある西山浄土宗の寺院で、古くから「檀林」と称して、泉南地方から和歌山県下の同宗派を統括する中心的寺院である。「分らないことがあったら梶取の和尚に聞け」という口碑があるくらい、和歌山城下では名高い大寺である。

本堂は安政元年(1854)の再建で、その規模は屋根面積が 1,574 m²と県下では最大規模を誇る。今回は屋根瓦の葺き替えを主とした工事が行われた。

寺院は 15 世紀の中頃、宝徳 2 年(1450)の創立という。初期の寺院の変遷は明らかでないが、寺史によれば、近世になって寛文 7 年(1668)に本堂再興、享保 12 年(1728)本堂屋根葺き替えのことが見えている。この本堂はやがて老朽化したらしく、本堂再建が企てられ、文政 3 年(1820)に起工式の当たる「新始式」が行われたが、工事中の法会の必要から、まず釈迦堂の新築が進められた。

本堂の再建は、30 年後に漸く実施に移され、嘉永 3 年(1850)4 月に旧堂が解体され、翌 4 年 4 月に基礎の地形固め、安政元年(1854)11 月に立柱式が行われた。しかし工事は必ずしも順調には進捗し



総持寺の位置

なかったらしく、屋根瓦は安政 6 年(1859)の 4 月頃に製作し、同年の 9 月に葺き立てられた。瓦の約 20%は旧本堂のものが再利用されていた。

万延元年(1860)8 月には、法然上人の 650 回忌法要が営まれているが、工事はまだ続き、内陣の天井が張り立てられたのは文久 2 年(1862)であった。それでも本堂は完成には至らず、正面の棧唐戸、東面の縁や高欄が整備され、漸く完成に近づいたのは明治 16 年(1883)から 19 年にかけてのことであった。ところが翌明治 20 年には、小屋組の部材のうち、直径 50 cm 余りの大きな地棟の 1 本を取り替える工事が行われている。これは建設を開始してから 30 年余を経過し、白蟻の被害を被ったことによるものと推定された。

明治 21 年には漸く外陣の天井を張り立て、翌 22 年(1889)には欄間彫刻をはめ込んで、「本堂満作の大法会」が執り行われた。再建発願から 70 年、工事開始からでも実に 38 年を要しての建設であった。

今回の工事は平成 15 年 12 月に着手、16 年 4 月から仮設素屋根の建設、16 年 10 月から瓦の解体に着手、17 年 3 月には小屋組と軒廻りの一部、縁廻りなど必要部分の解体を完了した。続いて木部の補修組立にかかり、軒と小屋組は 17 年 11 月完成し、この間に補足瓦の製作を行い、瓦葺きは 17 年 12 月から始め、18 年 8 月に葺き終えた。その他、耐震補強のための鉄骨材の取り付けや縁廻りの補修組立、建具・壁・金具・畳の補修、木部の洗い等を行い、平成 19 年 3 月に予定の工事は完了した。あとは周辺を片づけ清掃して 4 月末に引き渡しを行うだけである。(鳴海祥博)



屋根葺きの様子

[資料紹介]

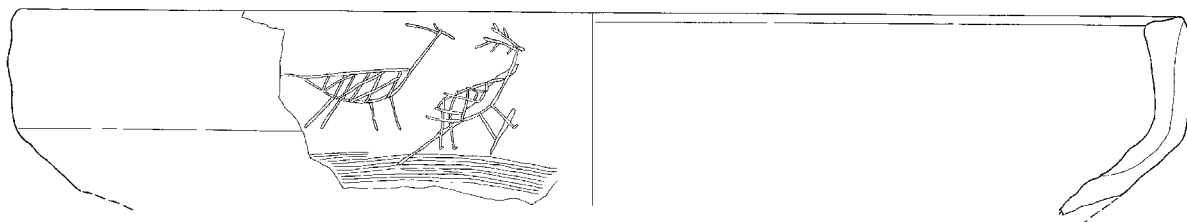
西飯降Ⅱ遺跡出土の絵画土器

はじめに

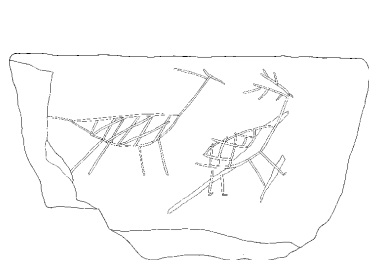
平成 18 年度に実施した京奈和自動車道（紀北東道路）関連遺跡の調査において、鹿の描かれた絵画土器 2 点が出土したのでここで紹介する。調査成果の概要に関しては本年報で報告されているため、絵画土器と土器の出土した溝（5180 溝）を主とした記

述にとどめる。

5180 溝は、2 A 1 区の南東から 2 B 1 区にかけての落ち込みで、弥生中期の堆積層と考えられる第 4 d 層の下面で検出された。出土遺物は全体的に紀伊Ⅲ - 2 様式の弥生土器を主体とするが、凹線文を施す鉢・壺などに若干新しい様相が認められる。また、紀伊形甕・広口壺など紀伊Ⅲ - 1 様式に対応する土器群も多く含んでいる。搬入品としては河内・播磨・大和南西部の土器や紀の川下流域の土器なども含んでいる。



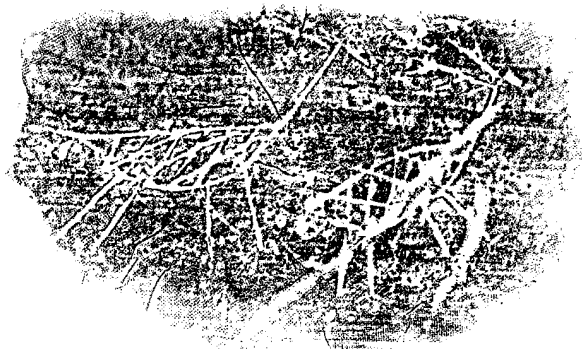
絵画土器 1 S = 1/2



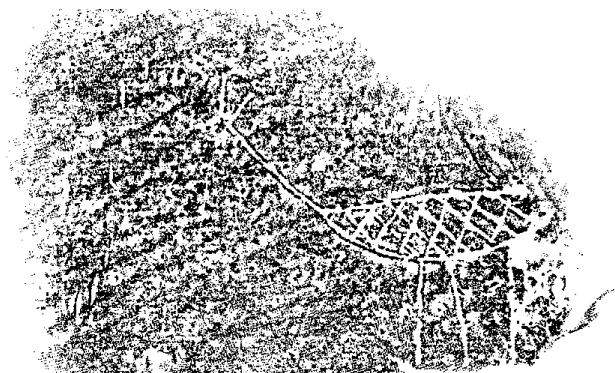
絵画土器 1 S = 1/2



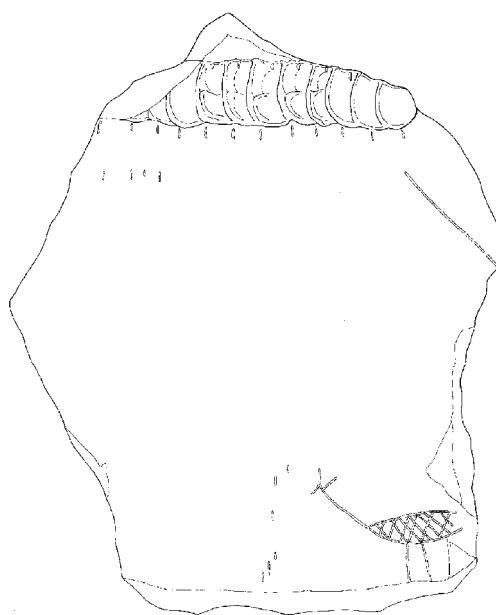
絵画土器 2 S = 1/4



絵画土器 1 S=1/1



絵画土器 2 S = 1/1



絵画土器 2 S = 1/2

絵画土器は他の大量の弥生土器と共に出土している。また、5180 溝の調査では上層・下層・最下層に区分し遺物を取り上げているが、口縁部破片（絵画土器 1）は下層、肩部破片（絵画土器 2）は最下層から出土した。

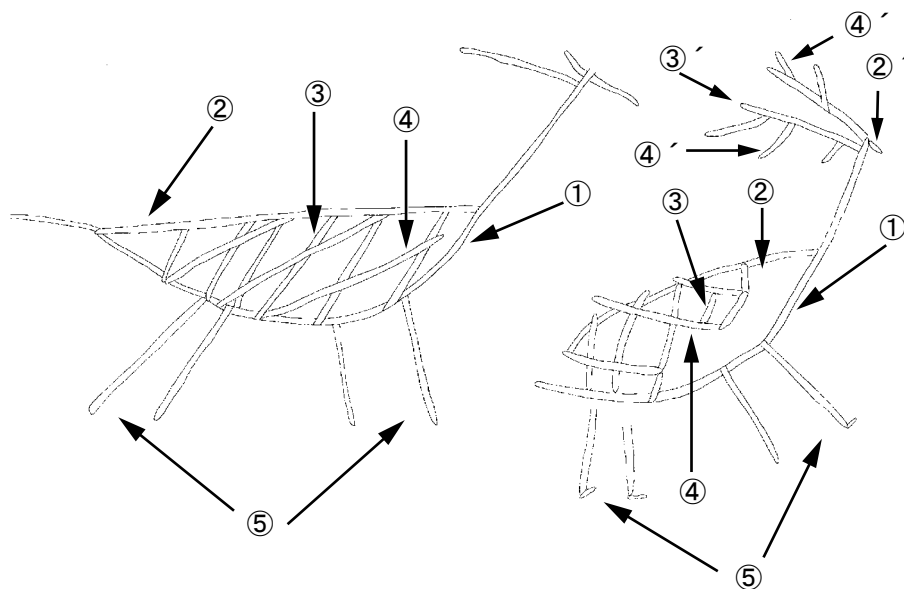
絵画土器の観察

絵画土器は口縁部破片と肩部破片の 2 点が確認されており、これらは胎土や焼成がやや異なり同一個体との断定はできない。絵画土器 1 の器形は段状口縁壺で法量は口径 31.0 c m、絵画土器 2 は胴径 48.0 c m に復元できる壺である。

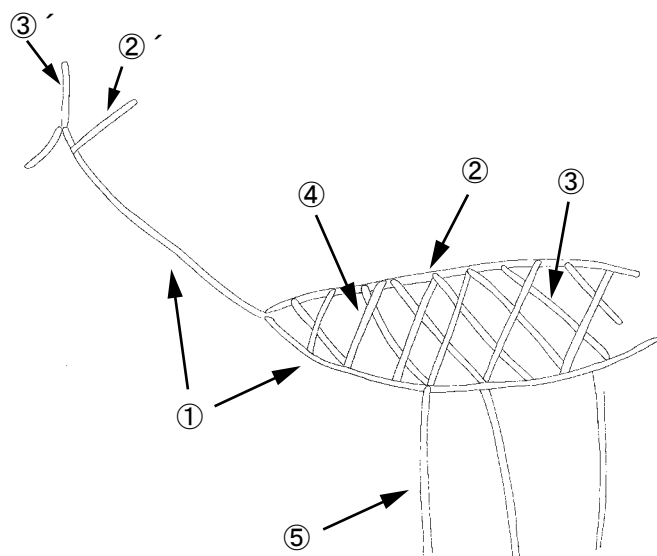
絵画土器 1 の口縁部は強い横ナデによって調整さ

れるため横位の凹凸をなし、上端に面をもたせている。外面は屈曲部以下を横位ハケによって調整した後、鹿の絵を線刻している。内面は屈曲部以下を不定方向のナデで調整している。絵画土器 2 の外面は頸部に縦位ハケを施した後、粘土帯を貼り付け指頭圧によって突帯をつくり出している。さらに肩部外面に縦位ハケを施し、斜め方向のミガキによる調整をおこなった後、鹿の絵を線刻している。内面は縦位ハケを施した後、斜め方向へのハケによって調整している。また、肩部にはハケ調整をおこなった際についたとみられる刺突文が残っている。

鹿の絵画土器の類例から、絵画土器 1 の鹿は角のある方がオス、角のない方がメスと考えられる。そ



絵画土器 1 描写順序



絵画土器 2 描写順序

れに従えば、絵画土器 2 の鹿も冬季の角が落ちたオスではなく、メスであろうか。

絵画土器 1 は右向きの鹿 2 頭が描かれ、角のある鹿を仮に「鹿 A」、角のない鹿を「鹿 B」とする。鹿 A は体部輪郭の下半を頸部から尻部に向かって半円弧状に描き、尻部へはね上げている。次に体部輪郭の上半を頸の付け根から尻部に向かって描く。次に斜格子文を描いた後、脚部を描いている。斜格子文は右上から左下へ斜めに平行線を引いた後、左上から右下へ斜めに平行線を引き完成させている。鹿 B はまず首部から尻部にかけて鹿 A と同じ順序で描く。そして、斜格子文を描いた後、脚部を描いている。斜格子文は右上から左下へ斜めに平行線を引いた後、少しずらした位置からやや鋭角に斜めの平行線を書いて完成させている。

絵画土器 2 は角のない左向きの鹿 1 頭が描かれ、これを仮に「鹿 C」とする。描写順序はまず体部輪郭の下半を頸部から半円弧状に描き、尻部へはね上げている。次に体部輪郭の上半を頸部の付け根から尻部に向かって描く。次に斜格子文を描いた後、脚部を描いている。斜格子文は左上から右下へ斜めに平行線を引いた後、右上から左下へ斜めに平行線を引き、斜格子文を完成させている。

頸部を一本線で表現する例や半円弧状の体部に斜格子を描く表現は奈良県唐古・鍵遺跡や大阪府瓜生堂遺跡・東奈良遺跡・兵庫県玉津田中遺跡でみられ、大和あるいは河内・播磨の例と共通する要素を有している。

まとめ

弥生時代の絵画土器は、全国で 600 点以上出土しているが、唐古・鍵遺跡で 350 点以上、清水風遺跡では 60 点以上出土しており、全国での出土の過半数をしめる。このことから、絵画土器は、弥生時代の大和特有の祭祀と関連づけて論じられることが多い。和歌山県内では昭和 13 年に田辺市水取山遺跡で 1 点（弥生後期・水鳥の頸部）、昭和 25 年に和歌山市太田・黒田遺跡で 1 点（弥生中期後葉？・鹿）の 2 例が採集され、平成 11 年の太田・黒田遺跡の遺物整理作業中には段状口縁壺の破片 4 点（弥生中期・鹿）が確認されている。

西飯降Ⅱ遺跡の絵画土器は共伴した土器群の検討から紀伊Ⅲ-2・3 様式の段階に位置づけられる。そして、唐古・鍵遺跡など大和の絵画土器は大和Ⅲ-3 様式以降徐々に増加し、大和Ⅳ様式に盛行、大和Ⅴ・Ⅵ様式に減少する傾向がみられる。このことから、西飯降Ⅱ遺跡の絵画土器は古い段階に該当するといえよう。

絵画土器は河川や溝などの水に関係する遺構から検出されることが多く、特に鹿の絵は農耕儀礼との関わりが指摘されている。西飯降Ⅱ遺跡の絵画土器も出土状況から、祭祀に用いられた可能性が高いものと考えられる。（手島実美子）

5180 溝出土土器の時期比定に関して、大和は『奈良県の弥生土器集成』、紀伊は『弥生土器の様式と編年』近畿Ⅰを参照した。

参考文献

- 浦 宏「水取山弥生式遺跡発見鳥形紋土器」『紀伊考古』1-2
紀伊考古雑誌発行会 1938
- 羯磨正信「和歌山市太田黒田遺跡出土の一土器片」『熊野路考古』
2 南紀考古学同好会 1962
- 土井孝之「3 紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ
木耳社 1989
- 藤田三郎「弥生土器における土器絵画(1)」『みずほ』9 大和弥生文化の会 1993
- 藤田三郎「弥生土器における土器絵画(2)」『みずほ』10 大和弥生文化の会 1993
- 藤田三郎「弥生土器における土器絵画(3)」『みずほ』12 大和弥生文化の会 1994
- 藤田三郎「弥生土器における土器絵画(4)」『みずほ』14 大和弥生文化の会 1994
- 大阪府立弥生文化博物館『平成 8 年春季特別展 卑弥呼の動物ランドーよみがえった弥生犬』1996
- 大野左千夫・井馬好英「太田黒田遺跡出土の弥生絵画土器」[紀伊考古学研究] 第 4 号 紀伊考古学研究会 2001
- 奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003
- 大阪府立弥生文化博物館『平成 18 年春季特別展 弥生画帖—弥生人が描いた世界—』2006
- 田原本町教育委員会『田原本の遺跡 4 弥生の絵画』2006

野田地区遺跡出土の犁

はじめに

野田地区遺跡の第2次調査で、犁が2点出土した。犁は戦後耕運機が普及するまで使われていた田を耕す農具で、古代よりほとんど形を変えずに伝わっている。発掘調査で出土することも少なく、和歌山県下では初の出土である。ここでは野田地区遺跡出土の犁について紹介するとともに、若干の考察を加えてみたい。

出土遺構

遺跡の概要は年報の報告に譲るが、犁は段丘裾部を流れる平安時代の溝（遺構8）から出土した。溝は段丘より約1.5 m下がった標高約11.5 m付近で検出したもので、規模は幅約6 m、深さ約1 mで、延長約14.5 mを確認している。南側では上部を鎌倉時代の溝である遺構7によって大きく削平されている。遺物は犁のほかに黒色土器や土師器、曲物、横槌、下駄などがある。

遺構8の上面では11～12世紀初頭の瓦器椀が出土しているが、上部の溝からの混入の可能性もある。中・下層では瓦器が出土しないが、黒色土器椀の形態が瓦器椀に近く、このことから遺構8の機能していた時期は11世紀代と考えることができる。

犁2点は溝の底付近で約3メートルの間隔をあけて出土しているが、このほか犁の破片と考えられる部材が1点排土から採集されている。

犁の詳細

犁について説明を加えるが、部分名称については、木下論文（註1）に準拠する。

2本とも幹と枝を利用して犁床と犁柄を一木から作り出した長床犁である。両者ともほぼ同じ規格で作られており、犁1は犁床と犁柄の一部のほかに犁柱が、犁2は犁床と犁柄が残存する。

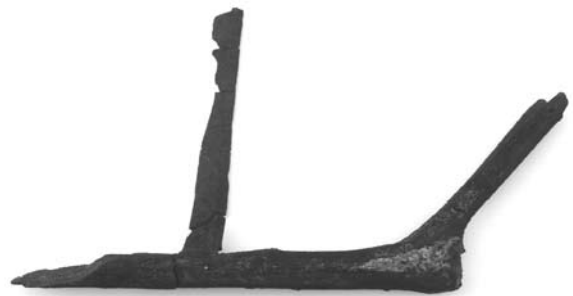
犁1 犁床の長さは63.0 cmで、幅は先端部付近で約8 cm、基部付近で6.0 cmを測る。高さは基部付近が7.0 cm、先端部付近が5.0 cmで、先端

から15 cmのところより上面を削りこんで犁先を装着するようにしている。削り面は（進行方向）右側が高くなることから、掘り起こした土は左側に耕転するようになっている。犁床上面には犁柱の前後に方形を呈するダボ穴がそれぞれ1箇所ずつ彫られている。前側のダボ穴は、先端部に近い位置でもあることから犁へらを差し込んだ穴の可能性もある。その場合犁へらは木製であった可能性も考えられる。後側のダボ穴は短いダボを差し込んで、犁へらに繫いだ紐を結んでへらを固定していたと考えられる。犁床の側面は左側が平らで右側が丸い。

後傾する犁柄は加工が甘く、断面は丸みを帯びる。高さ約27 cmの位置に犁轅を差し込む長方形の柄穴が穿たれているが、その部分から上が破損している。柄穴の位置が低いことから、弓形を呈する犁轅であったと考えることができる。

犁柱はわずかに後傾し、犁床に穿たれた柄穴に挿入される。薄い板状で前方が少し抉られているが、これは犁へらを装着するための加工であると考えらる。また、犁柱に挿入された部分に方形の穴が彫られており、別の部材を再利用した可能性がある。

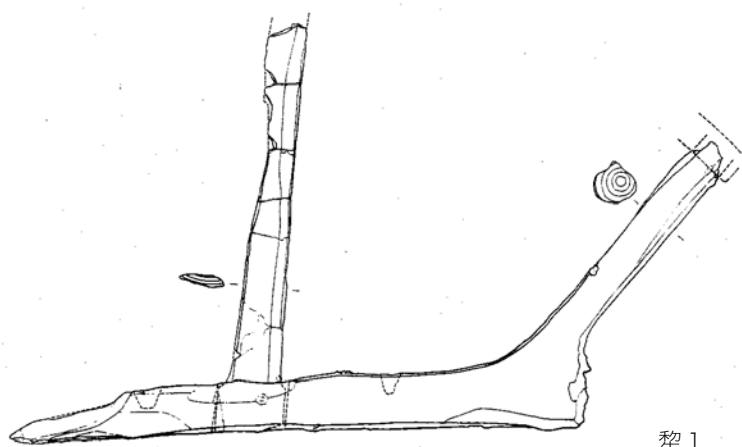
樹種同定の結果、材質は犁床・犁柄がブナ科コナラ属アカガシ亜属、犁柱がブナ科シイ属であること



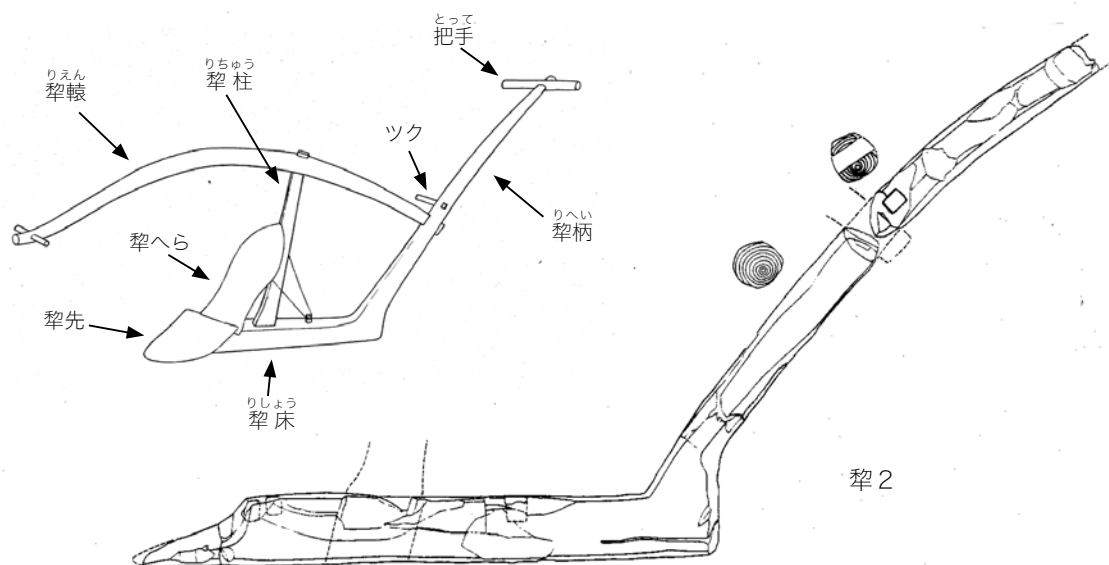
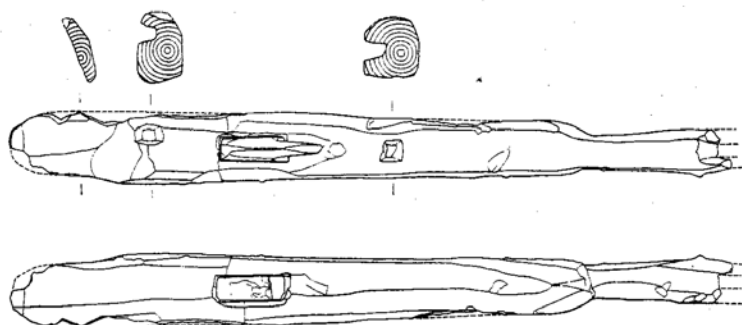
犁1



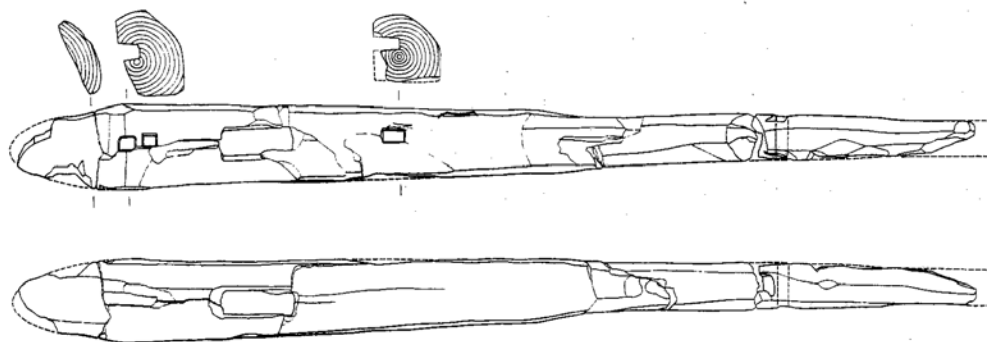
犁2



犁1



犁2



が分かっている(註2)。

犁^{りしゅう}2 犁床の長さは約 63 c mで、幅は先端部付近で 9.0 c m、基部付近で 7.0 c mを測る。高さは基部付近が 7.0 c m、先端部付近が 8.0 c mで、先端から約 12 c mのところより上面を削りこんで犁先を装着するようにしている。犁1同様に削り面は右側が高くなっており、左耕転であることがわかる。犁床^{りしゅう}上面には犁柱の後側に1箇所、前側に2箇所のダボ穴が彫られている。前側の穴は犁へらを装着するためのもので、木製の犁へらが使われていた可能性があり、二つのダボ穴にダボを差し込みその間で犁へらを固定したとの想定もできる。犁床^{りしゅう}の側面は左側が平らで、右側が丸い。

反り気味に後傾する犁柄^{りへい}は加工が甘く、丸みを帯びる。長さは 68 c m残存し、高約 34 c mの位置に犁轆^{りえん}を差し込む長方形の柄穴が穿たれる。柄穴^{ぼぞあな}の位置が低いことから、弓形を呈する犁轆が装着されていたと考えられる。犁轆^{りえん}の穴の直上には直交するように方形の穴が穿かれており、犁を操作する時に使うツクを挿入したと考えられる。

犁柱は犁床の柄穴に組み込むようになっているが、柄穴の傾きから後傾していたと考えられる。

材質は樹種同定の結果、ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節であることが分かっている(註2)。

まとめ

これまで発掘調査で出土した犁は、把握できるので 19 点あり、西日本に集中している(表1)。また、大和・山城・河内など畿内中心部からの出土はなく、

畿内周辺部に出土が目立つ。

ところで、犁の形態は野田地区遺跡でみつかったような「長床犁」と床部分がない「無床犁」におおきく分けることができ、これまで発掘調査で出土した形態が把握できるものはすべて長床犁に分類できる。ちなみに、長床犁は安定性が良いが深く耕せない、無床犁は深く耕せるが安定性に欠けるなど、それぞれ長所・欠点がある。両者の欠点を改良して日本で床部分が短い短床犁が誕生したと言われている。

農業技術史が専門の河野通明氏は長床犁は中国の影響を受けたもの、無床犁は朝鮮半島の影響を受けたものと考え、犁頭の形態では、杓子状を呈したものが中国の影響を受けたもの、床の幅で犁頭となったものが朝鮮半島の影響を受けたものとしている。その解釈から野田地区遺跡で出土した犁は、犁床の形態から見れば中国系、犁先の形態から見れば朝鮮系であり、両者を折衷した形であるとした(註3)。また、河野氏は犁が時代とともに変化しない農具と捉え、全国各地で民具資料として残されている犁の形態が異なるのは、6・7世紀に何処から犁が移入されたかに左右されたとした。ただ、古代・中世の考古資料を時代を追って分類してみると、系譜云々と言うより時代とともに変化していつているようにもみえる。ここで、変遷をおってみよう。

国内の犁は飛鳥時代のものが初現で、当時のものは梶原遺跡の例(図 iii-2)からも窺えるように長床で杓子状の犁頭を持ち、犁へらを犁床と一木で作り出したもので、犁柄を犁床に柄組みしている。同

表 犁の主な出土例

	遺跡名	所在地	特徴	時期
1	下川津遺跡	香川県坂出市	杓子状犁頭 犁床と犁へらを一木 柄組み犁柄	7世紀初頭～後葉
2	下川津遺跡	香川県坂出市	杓子状犁頭 犁へら破片	6世紀後葉～8世紀初頭
3	梶原遺跡	兵庫県丹波市市島町	杓子状犁頭 犁床と犁へらを一木 柄組み犁柄	7世紀中葉
4	梶原遺跡	兵庫県丹波市市島町	杓子状犁頭 犁床と犁へらを一木 柄組み犁柄	7世紀中葉
5	川除・藤ノ木遺跡	兵庫県三田市	杓子状犁頭? 犁床と犁へらを一木?	7世紀中葉
6	屋代遺跡	長野県更埴市	杓子状犁頭 犁床・柄の形代 一木犁柄	7世紀後葉
7	安坂・城の堀遺跡	兵庫県多可町中区	杓子状犁頭 犁床と犁へらを一木? 柄組み犁柄	7～8世紀
8	西河原森ノ内遺跡	滋賀県野洲市西河原	杓子状犁頭 装着犁へら 柄組み犁柄	7世紀後葉の溝
9	川田川原田遺跡	滋賀県守山市	杓子状犁頭 装着犁へら 一木犁柄	8世紀の自然流路
10	郡山城下町遺跡	広島県安芸高田市吉田町	一木犁柄	8世紀の自然流路
11	南広間地遺跡	東京都日野郡	犁轆	8世紀
12	中畑遺跡	滋賀県草津市矢倉	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄	10世紀の井戸
13	野田地区遺跡1	和歌山県有田郡有田川町	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄	11世紀代の自然流路
14	野田地区遺跡2	和歌山県有田郡有田川町	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄	11世紀代の自然流路
15	関津遺跡	滋賀県大津市関津	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄	13世紀の沼
16	関津遺跡	滋賀県大津市関津	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄	13世紀の沼
17	藤田・門ノ坪遺跡	兵庫県加東市	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄	鎌倉時代以降
18	鴨谷遺跡	兵庫県加西市	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄	鎌倉時代
19	辻田西遺跡	福岡県北九州市	床幅犁頭 装着犁へら 一木犁柄(未成品)	鎌倉時代

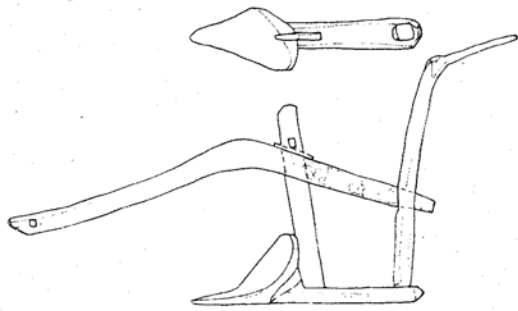


図 iii-2 梶原遺跡出土犁

じ形態のものが下川津遺跡でも出土しており、河野氏はこれを大化の改新政府が地方に広めたタイプとする。7世紀後半頃には犁柄と犁床を一木で作るタイプが現れ、その後、一木犁柄が主流になる。また同じ時期に犁床と犁へらを一木で作るタイプがなくなり、装着犁へらに変化する。平安時代になると杓子状犁頭のタイプはなくなり、床幅犁頭になり、関津遺跡の1例を除いて、野田地区遺跡のような床幅犁頭・装着犁へら・一木犁柄の形態にほぼ統一される。考古資料ではないが、鎌倉時代に書かれたとされる大津市聖衆来迎寺が所蔵する「六道絵」の犁耕図(図4)も同じ形態であることが窺える。

以上、古代から中世前半において、犁は時代とともに形態変化するのではないかと考えてみたが、少ない資料からの推察で、空論になる可能性も否めない。ただ、推察した仮定に立てば、現在数多く存在する犁の形態が中世後半以降に分化したことになるであろう。

7・8世紀の犁が多いのは、政府が推奨したからだすると、平安時代の犁の出土例は前代のものに比べ少なく、犁はその後一気に普及しなかった可能性がある。延長5年(927)に撰進された「延喜式」に天皇の食事を担当する内膳司の農場で牛を用いて馬鍬や犁を引かせていることが記されている。また、10世紀後半頃に書かれた「宇津保物語」には、紀伊国牟婁郡の長者神南備種松の家では田20町歩ほど作り、「牛どもに犁をかけつつ、男ども緒持ちて鋤く」と記されている。このように階層的に限られた場所で犁が使用されたとすれば、野田地区遺跡の近くにそのような場所があったことになり、野田地区遺跡の内容を知る上で、貴重な出土遺物と言える。

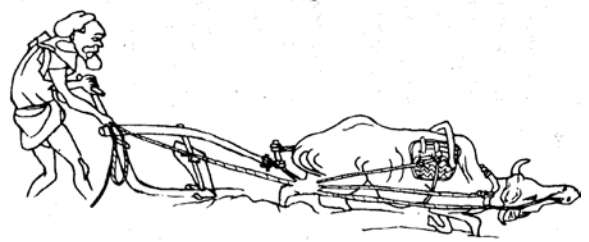


図 iii-3 聖衆来迎寺が所蔵する『六道絵』の犁耕作図

ところで、野田地区遺跡の性格については、年報の調査報告でも紹介したように、古代から中世にかけて水辺の祭祀をおこなっていた場所と推定した。中畑遺跡の例では、井戸の堀形からの出土で、井戸の作り替え時に行われた祭祀にかかわるものと評価されており、野田地区遺跡の犁についても、十分考慮する必要がある。(川崎雅史)

註1) 木下忠『日本農耕技術の起源と伝統』雄山閣出版1985年

註2) 犁の樹種同定は(株)吉田生物研究所がおこなった。

註3) 河野先生に実見してもらいコメントをいただいた。詳細はセンターHPに載せている。

参考文献

- 河野通明「滋賀県川田川原田遺跡出土犁の伝来事情とその後」『商業論叢』第39巻第4号神奈川大学経済学会2004年
- 河野通明「7世紀出土一木犁へら長床犁についての総合的考察」『商業論叢』第40巻第2号神奈川大学経済学会2004年
- 河野通明「民具の犁調査にもとづく大化改新の長床犁導入政策の復元」『ヒストリア』188号大阪歴史学会2004年
- 『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査概要』中主町教育委員会・中主町埋蔵文化財調査会1987年
- 『滋賀埋文ニュース』第102号滋賀県埋蔵文化財センター1988年
- 『梶原遺跡B地区出土の犁』梶原遺跡発掘調査団・兵庫考古学研究会1993年
- 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団1990年
- 『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会1992年
- 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26』日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター1999年
- 『安坂・城の堀遺跡』中町教育委員会1997年
- 『中畑遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会2005年
- 『辻田西遺跡』(財)北九州市教育文化事業団1982年
- 『大津市関津遺跡現地説明会資料』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会2005年

ブの可能性)がほとんどであるが、矢穴3については、深さの値が大きく、Bタイプに属する可能性がある。(佐々木宏治)

和歌山城の矢穴との比較

水軒堤防の矢穴と比較するため、和歌山城の石垣に残る矢穴の計測値を示す。和歌山城の石垣はある程度構築された時期が想定されている。羽柴・桑山期の結晶片岩の石垣にはAタイプの矢穴が確認でき、浅野期・徳川頼宣期の砂岩の石垣にはB（もしくはA）タイプの矢穴が確認できる。水軒堤防に比べて大きい矢穴である。

今回は和歌山城に数多く残っている矢穴のごく一部を計測したにすぎず、今後より多くのデータを収集して検討する必要がある。(仲原知之)

まとめ

水軒堤防 矢穴一覧表

(単位cm)							
	矢穴番号	法量(長辺×短辺×深さ)	矢底法量(長辺×短辺)	矢穴間隔	矢穴残存位置	タイプ	備考
県1次調査(平成17年度) *矢穴番号は『(財)和歌山県文化財センター年報2005年度』(2006)参照							
石積み 上面	1-1	5.5×(1.8)×5.8	3.8×(1.8)	22.0	表面	C	半裁
	1-2	5.5×(2.0)×6.0	4.0×(2.0)		表面	C	半裁
	2-1	6.0×(1.4)×6.2	3.7×(0.5)	10.5	表面	B~C	半裁
	2-2	5.4×(0.4)×4.6	3.4×(0.4)	9.0	表面	C	半裁
	2-3	6.2×(2.0)×7.0	4.0×(0.8)		表面	B~C	半裁
	3-1	5.0×(1.6)×4.2	3.3×(0.8)	5.5	表面	C	半裁
	3-2	5.1×(1.8)×5.2	3.6×(0.9)		表面	C	半裁
	3-3	(5.5)×(1.5)×5.0	3.3×(0.7)	6.5	表面	C	半裁、一部欠損
	4	6.2×(1.8)×6.0	4.3×(1.8)		表面	B~C	半裁
	5	6.0×(3.8)×4.4	4.2×(3.8)		側面	C	半裁
	6-1	5.4×(3.0)×9.0?	3.3×(3.0)	6.0	側面	C	半裁
	6-2	5.0×(2.2)×8.0?	2.8×(2.2)		側面	C	半裁
	7	6.2×(2.0)×4.0	4.2×(1.6)		側面	B~C	半裁
石積み 西面	8-1	6.2×(2.0)×4.4	5.2×(1.0)	8.0	側面	B~C	半裁
	8-2	6.8×(3.0)×5.8	5.4×(1.5)		側面	B~C	半裁、矢穴に瓦片詰められる
	9	7.0×(1.5)×6.0	5.0?×(0.8)		側面	B~C	半裁
	10	7.0×(1.5)×?	?×(1.5)		側面	B~C	半裁、深さ不明
	11	7.0×(0.4)×?	?×(0.4)		側面	B~C	半裁、深さ欠損
	12	7.0×(2.2)×?	?×(2.2)		側面	B~C	半裁、深さ不明
	13	6.0×(2.3)×5.4	5.0×(2.3)		表面	B~C	半裁
県2次調査(平成18年度) *本書掲載分							
天端	1-1	5.0×(2.5)×?	?×?	7.0	側面	C	半裁
	1-2	(4.6)×(1.6)×?	?×?		側面	C	半裁
南石敷	2-1	4.8×(2.0)×5.0	3.0×?	6.5	側面	C	半裁
	2-2	(4.0)×?×4.0	?×?		側面	C	半裁
	3-1	6.8×(3.0)×9.1	5.0×?	7.5	表面	B~C	半裁、Bタイプか
西面	3-2	6.9×(3.0)×8.6	5.0×?		表面	B~C	半裁、Bタイプか
	4-1	6.5×(0.5)×6.3	3.4×(1.0)		表面	B~C	半裁
南面	5-1	6.2×?×6.5	2.0×?	4.4	表面	B~C	半裁
	5-1	6.0×?×(3.2)	-×-		表面	B~C	半裁

和歌山城 矢穴一覧表

矢穴番号	法量（長辺×短辺×深さ）	石垣の時期	石材	矢穴残存位置	タイプ	備考
1	7.5 × (4.0) × 7.0	頼宣期	砂岩	側面（2個残存）	B	追廻門内北側、半裁
2	7.5 × (3.0) × 9.5	頼宣期	砂岩	表面（3個残存）	B	追廻門内東側、半裁
3	9.0 × (2.5) × 6.0	頼宣期	砂岩	表面（2個残存）	A～B	不明門内北側、半裁
4	7.5 × (2.0) × 5.0	頼宣期	砂岩	表面（5個残存）	B	不明門内西側、半裁
5	8.5 × 5.0 × 6.0	頼宣期	砂岩	中央部（1個のみ）	A～B	南の丸空堀（不明門東側）、完存
6	8.0 × (3.5) × 6.5	頼宣期	砂岩	表面（4個残存）	A～B	南の丸南側（童話園南側）、半裁
7	8.0 × (3.5) × 6.5	頼宣期	砂岩	表面（2個残存）	A～B	南の丸西側（水禽園南側）、半裁
8	8.5 × (2.5) × 7.5	浅野期	砂岩	表面（4個残存）	A～B	護国神社北側浅野氏石垣、半裁
9	7.5 × (2.5) × 8.5	頼宣期か吉宗期	砂岩	表面（1個のみ）	B	南の丸高石垣北側上部、半裁
10	11.0 × 6.0 × 5.0	羽柴・桑山期	結晶片岩	中央部（3個残存）	A	本丸南側石垣、完存
参考	8.0 × 6.0 × 9.0		結晶片岩	中央部（3個残存）	A～B	岡公園（御作所跡横）、完存
羽柴・桑山期＝天正 13(1585) 年～慶長 5(1600) 年：結晶片岩・野面積み 浅野期＝慶長 5(1600) 年～元和 5(1619) 年：和泉砂岩（一部結晶片岩）・打ち込みはぎ（刻印あり） 徳川頼宣期＝元和 5(1619) 年～寛文 7(1667) 年：和泉砂岩（一部花崗岩）・切り込みはぎ 徳川吉宗（藩主）期＝宝永 2(1705) 年～享保元(1716) 年：和泉砂岩と花崗岩・切り込みはぎ						

水軒堤防の矢穴は大半がCタイプに分類できる。一部Bタイプに含めて考えることもできるが、和歌山城の矢穴に比べると小さい矢穴である。矢穴の違いが時期差とすれば、水軒堤防の構築時期が紀州徳川初代藩主頼宣期より新しいと考えることができる。ただし、和歌山城の石垣に比べて、水軒堤防は小さい石材で構築されており、矢穴の大小の差が石材の大きさに比例することも想定できる。今後幅広く矢穴の資料を集めてこの問題を検討していきたい。(仲原知之)

【引用・参考文献】

- 1 芦屋市教育委員会 2005『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡』
- 2 仲原知之 2005「和歌山県指定史跡「水軒堤防」の石積み構築技術と石材」『関西近世考古学研究XⅢ』3 藤川祐作 1972『摂津大阪城(6)―芦屋山中の採石場―』<城と陣屋65号>日本古城友の会 4 藤川祐作 1979「採石場としての岩ヶ平」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第4集 兵庫県教育委員会 5 森岡秀人編 1998『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ―芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査』芦屋市教育委員会



矢穴 1 (県 1 次)



矢穴 2 (県 1 次)



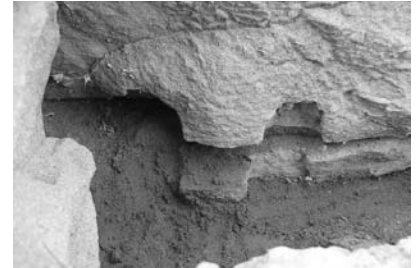
矢穴 3 (県 1 次)



矢穴 4 (県 1 次)



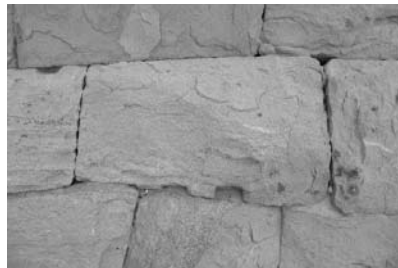
矢穴 5 (県 1 次)



矢穴 6 (県 1 次)



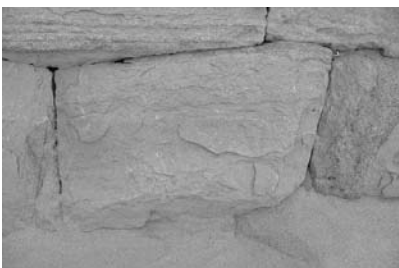
矢穴 7 (県 1 次)



矢穴 8 (県 1 次)



矢穴 9 (県 1 次)



矢穴 10 (県 1 次)



矢穴 11 (県 1 次)



矢穴 12 (県 1 次)



矢穴 13 (県 1 次)



矢穴 1 (県 2 次)



矢穴 2 (県 2 次)



矢穴 3 (県 2 次)



矢穴 4 (県 2 次)



矢穴 5 (県 2 次)

水軒堤防矢穴 (県 1 次・2 次)

■ 木材あれこれ - 福勝寺の修復現場から

福勝寺の修理事業においては、『木造建造物文化財のための木材及び植物性資材確保に関する研究』（東京大学山本博一教授代表）に資料提供などの形で参加している。この研究は古建築に使用されている木材の特性を調査し、今後の修理に必要な補足材料を中・長期的に確保していく手だてを検討することを主眼とし、建築や農学など各分野の専門家が共同で進めている。

福勝寺においても、使用されている木材の樹種の特定、辺材、節などの含有率や木取りなどの仕様調査、原木の樹齢や大きさなどの推測のほか、当初材や中古材のサンプルを比較することにより、経年変化などが木材に与える影響の状況など、多角的な視座で研究を実施している。

樹種に関しては、これまでも木目や木肌、色合い、重さ、香り、刃物切れなど大工職人の経験的な判断による特定を行ってきた。しかし福勝寺では、あまり建物には使用されないような雑木類が多用されており、判断に苦しむものもあった。今回専門家の細胞観察による樹種の特定を行った結果、概ね大工の判断が正しいことが裏付けられたほか、センダンなど現在建築用材として流通していない材種の使用が確認できた。

現在まで進めた研究の成果を、修理工事に伴う調査結果と照らしてみると、福勝寺に使用された木材の特徴が浮かび上がってくる。

本堂の当初部材には、主に松と楠が使用されている。一方紀州藩主の寄進による求聞持堂の建立時期には榿が多用されているが、同じく紀州藩からの助成で行われたと推定できる天保修理においては、寺蔵の大工棟梁による見積文書に「取替材（中略）当山二而伐取御出来」とあり、松と楠が使用されている。

紀州藩による榿材の柱には、樹齢400年程度と見られる四方柱目材が用いられているのに対し、本堂当初材である丸柱の楠が6～70年程度、丸桁の松が80年程度の芯持ち・芯割り材で、辺材部分が多く含まれる。天保補足材も同等の木取りが行われており、本堂の当初材にも近隣から切り出した材料が使用され

ていたことが推定できる。

本堂の当初材には、野太を含んだ部分も散見されるなど、小径の原木が使用されていることがわかる。特に7mを超える三間通し材の貫、丸桁のうち、化粧材である頭貫、飛貫に比較的良質な松材を優先的に使用しているものの、丸桁や足固め貫には見え隠れ部分に野太を含むような材を用いるなど、木取りに腐心した様子が伺われる。

また、樹種の使い分けに関しては、丸柱には主に楠が用いられているが、内外陣境と背面中央間の四本のみは良質の榿が用いられており、須弥壇を囲む柱に恣意的に特定の樹種を配したことがわかる。しかし組物では楠と松が混在し、意識的に樹種を使い分けている様子は確認できない。小壁板類も同様で、琵琶板には、当初より松材に楠材を継ぐといったものまで見受けられる。

和歌山県下では、鎌倉期の遺構において主材として扱われた檜にかわり、室町期から近世初頭にかけて建立された多くの建物において、松や楠材が主要部材に多用されている。福勝寺本堂ではごく一部に檜材が使用されているが、いずれも捻れやひび割れが目立つ材料である。実際、同様の場所に使用されている松や楠材と比しても優るとは言い難い状況であり、品質が樹種より優先されていたことが推測できる。このことは、当時材木を集めることが、如何に困難な作業であったかを示していると考えられる。

求聞持堂は、紀州藩主の寄進による建立であることが建立棟札から確認できるが、今回の修復に伴う調査の結果、大半の材料が古材を転用したものであることが判明した。その多くは榿の良材であり、紀州藩に係する建物の解体材が用いられていると推定できる。古材の再利用は、見え隠れ部分だけでなく、化粧材として再利用されているものまで多岐に及んでいる。

室町期から近世初頭にかけて、建設時に多量の古材を再利用している事例は多く、紀州藩ゆかりの古材といった特殊な価値観を考慮しても、当時新築時に古材を使用することは特別なことではなく、木材を確保する労力の削減に多大なる効果がある常套的な手法であったとも考えられる。

寛文修理時には枯木などの小屋組は解体せずに、全ての隅木を切断し取り替えるような軒の大規模改修を

行っている。また、補足材にも修理時とは異なる当初材の技法や形状を原則として踏襲することは、破損していない部材には手を入れず、可能な限り再用するために必要な作業である。そのことは、天保修理時に茅負や垂木の形状が当初材と変更され近世的な納まりとなっているが、その結果として背面を除く軒の部材の大半が取り替えられていることからわかる。

しかし、天保修理では大梁が二本とも取り替えられているが、当初材を含む小屋材の納まりを原則踏襲しており、古材ももとの位置で再用されている。結果的に文化財修理に似た作業がおこなわれているが、狂いの生じやすい不定形材を用い、各部材の取り合いが丹念にひかり込まれた中世の小屋材を一旦解体し、元通り組み直すことは非常に労力がかかる作業であることを、現在施工中の現場でも痛感する。福勝寺の江戸期修理において、小屋組の当初の構成が踏襲されてきた

ことは、構造的に大きな破綻がない限り、補足材確保にかかる負担と、古材や古い技法を再用することにより必要となる労力を秤にかけた結果とも考えられる。

福勝寺での木材補足に際しては、よりオリジナルに近い品質の材料の確保を主眼に、素材を原木で調達し、現場主任と大工棟梁の木取りにより製材を行っている。文化財建造物の補足木材に関しては同樹種同品質が前提であるが、当初材の辺材部分の大半が虫害を受けていることを考えると、品質を上げざるを得ない。しかし、原木の製材に立ち会うと、辺材部分を捨ててしまうことには強い抵抗感を覚える。実際製材すると原木の体積の3割程度の歩留まりしか確保できない。原木に畏敬の念を抱きながら本当に必要な材料を確保する。木取りが大工にとって重要な作業であるという言葉の意味を深く噛みしめながら、福勝寺の修理は進められている。(多井忠嗣)



樹種調査の様子



当初小屋材の組み立て状況



補足材用原木の検査状況



大工の木取りによる製材

護国院多宝塔ほか2棟の塗装調査

はじめに

護国院の重要文化財建造物多宝塔、鐘楼、楼門の3棟は明治41年に特別保護建造物に指定され、いずれも昭和時代に根本修理を受けた。今回の塗装工事に伴う実施仕様策定のための調査の結果、3棟ともに昭和時代の保存修理で塗装仕様が変更されていることが判明した。ここではその調査結果の概要を報告したい。

多宝塔の塗装調査

多宝塔は昭和26年に災害復旧で解体修理されており、そのさいに塗装全面が塗り直された。現状塗装は主要木部を丹塗とし、肘木や垂木端は黄土塗としている。また壁板、軒天井板、化粧裏板は胡粉塗となっている。この現状塗装は一般的な塗装であると思われる。

現状の赤橙色塗装は丹塗であることが修理工事報告書に記されているが、走査電子顕微鏡のEDS装置による元素分析では鉛が検出され、報告書通り丹塗で塗装されていることがわかった。

昭和修理前の塗装は現状塗装の下面、とくに当時の番付札のアタリ面に残されている。昭和修理のさい旧塗装はていねいに洗われたようで、あまり残されていないが、番付札は外さないで洗ったため、幸いにしてこの部分に残ることになったようである。

垂木や頭貫など、現状赤橙色塗装の下には赤みの強い塗装が残されている。小屋裏に保存されていた古材赤色塗装を元素分析した結果、鉄が検出されているので、この赤色塗装も弁柄塗と考えられる。

肘木や垂木端は現状黄土塗の下に赤色塗装が見えているが、昭和修理前の写真には白っぽく写っており、昭和修理前も現状と同じ黄土塗と思われる。

下層の壁板、上層の壁板、上層頭貫は現状胡粉塗の下に、黒色塗装が見える。これは修理前写真においても確認され、壁が黒っぽく写っている。黒色は墨塗と考えられる。

上層の組物間の小壁（琵琶板）は現状胡粉塗であるが、番付札アタリには赤色塗装が見られ、弁柄塗であったと考えられる。

軒の支輪の裏板や化粧裏板は、修理前写真に垂木と同様の濃色塗装がなされているのが見えるので、赤色、つまり弁柄塗であったと考えられる。

なお昭和修理のさいの報告書では、昭和修理直前の塗装について、こう記されている。

外部は大半を弁柄、台輪、長押、縁束、扉框等を黒塗とし、胡粉塗の箇所は一箇所もなかった。弁柄の色が冴えない色である上汚れて黒ずみ、なお黒塗の箇所が割合多くて悪趣味と云えるような配色であった。また胡粉塗の部分がないのがひきたない原因でもあったが、この地方の特色として一部黒塗の部分を除いて全部を丹塗とするもののようである。当初の塗は古材の見え隠れ部等に点々と残っていたが、弁柄塗でなく丹塗で、絵様の眉の塗は黒塗であったように思われ、胡粉塗の古材は一本も発見されなかった。内部は四天柱上部、内陣内法長押を極彩色、側内法長押、天井格縁を黒（ただし面は朱）、天井板は赤、内法長押より下を木地のままとしていた。極彩色の部分はあるいは当初の塗と思われたが、他は外部の塗と同様後補のものと思われ俗悪なものであった。

『重要文化財護国院多宝塔修理工事報告書』昭和26年以上から、昭和修理前は板壁を墨塗とし、その他は裏板や琵琶板も含めて全て弁柄塗とするものであった。しかし昭和修理のさい、当時の文化財修理の美的感覚で一般的な仕様であった、木部を丹塗、壁や裏板を胡粉塗とする仕様に改変されたことがわかる。

鐘楼の塗装調査

鐘楼は昭和11年に解体修理され、そのさいに塗装全面が塗り直されている。なお当時の修理工事費内訳書が川崎市立日本民家園大岡文庫に残されているが、ここにはなぜか塗装工事費は盛り込まれていない。

鐘楼の現状塗装は主要木部を赤橙色に塗装し、肘木や垂木端は黄土塗としている。琵琶板などの土壁部分は、左官仕事の漆喰塗仕上げである。軒支輪裏板や垂木間の化粧裏板は胡粉塗である。この現状塗装は多宝塔の現状塗装とも良く似ており、一般的な塗装であると思われる。

鐘楼の昭和修理では修理工事報告書が刊行されており、上記の修理工事費内訳書においても記載がないことから、現状の赤橙色塗装はどのような仕様であるのか不明である。走査電子顕微鏡EDS装置による元

素分析では、多量の鉛とともにバリウムが検出されている。バリウムは黄色塗料の顔料に使われるというので、丹塗をベースとしながら、黄色顔料を混ぜて色味を調整した塗料で塗装したことが推定できる。これを下記以降ひとまず丹塗と呼ぶ。

現状塗装は経年によって全体に粉状化してきており、その塗装の下部にところどころ昭和修理前の塗装が見える。とはいえ、昭和修理のさいに取り替えられた部材は多く、例えば縁板や丸桁、化粧裏板などは、昭和修理で全て取り替えられてしまっており、旧塗装はもはや部材から調べることができない。

木部主要部の丹塗塗装の下には、赤みの強い塗装が残されている。これは弁柄塗と考えられる。

肘木や垂木端は黄土塗で塗られているが、その下に赤色塗装が見える。しかし昭和修理前の写真ではここは白っぽく写っており、昭和修理前も現状と同じ黄土塗と思われる。

軒の支輪裏板は全て昭和修理で取り替えられており、現状は胡粉塗となっている。多宝塔昭和修理前ではここは赤色であるが、鐘楼古写真では白く写る。このため昭和修理前も現状と同じ胡粉塗と思われる。

腰組縁の縁板下面と軒の化粧裏板は胡粉が塗られているが、ここもやはり古材が残っておらず修理前の仕様は判然としない。しかし修理前写真では濃い塗装であるのが確認できるため、弁柄塗であったと考えられる。

以上をまとめると昭和修理前は弁柄を基調とし、肘木鼻は垂木端に黄土塗を施すものであったが、昭和修理のさい、全体の赤色塗装を弁柄から丹塗に替え、縁板や化粧裏板を胡粉塗に改変し、全体としてより一般的な塗装に改めていることがわかる。

楼門の塗装調査

楼門は文化財指定以降は、明治42年、昭和40年の二回にわたって解体修理されている。明治42年修理の詳細は不明であるが、昭和40年修理では塗装全面を塗り直したことで、その仕様の大要が修理工事報告書に記されている。

楼門の現状塗装は主要木部を鮮やかな赤橙色に塗装し、肘木や垂木端は黄土塗としている。壁や琵琶板などの土壁部分は、左官仕事の漆喰塗仕上げである。軒

支輪裏板や垂木間の化粧裏板は胡粉塗である。この塗装仕様は多宝塔や鐘楼の現状塗装とも一致し、一般的な塗装仕様である。

現状赤色塗装は修理工事報告書に丹塗と記される。今回実施した走査電子顕微鏡のEDS装置による元素分析では鉛が検出され、報告書記載の実施仕様通り丹塗で塗装されていることがわかった。

現状丹塗の下部に、ところどころ昭和修理前の塗装を見いだすことができる。木部主要部の丹塗塗装の下には、赤みの強い塗装が残されており、これは弁柄塗と考えられる。後掲のように修理工事報告書でも紅柄塗とされている。

肘木や垂木端は黄土塗で塗られているが、その下には赤色塗装が見える。報告書の修理前写真でも濃色に写っているため、昭和修理前は弁柄塗と考えられる。軒の化粧裏板や支輪裏板、下層天井の小組天井板は、現状は胡粉塗である。しかし胡粉塗が剥落しているところの下部には、明らかに赤色塗装が見える。このため昭和修理前は現状と異なり弁柄塗と思われる。

以上をまとめると、昭和修理前は土壁部分の漆喰塗を除けば、天井板や軒の化粧裏板も含め、一面に弁柄塗を施すものであった。昭和修理のさい弁柄塗を丹塗に替え、そのみでなく、肘木端や垂木端を黄土塗、天井板や化粧裏板を胡粉塗とする、一般的な仕様に改変されたことがわかる。

まとめ

調査によって、昭和修理で塗装が変更されているのが確認でき、また修理前の塗装もほぼ明らかになった。

昭和修理では三棟ともに当時文化財として「一般的」と考えられた塗装に変更されたが、昭和修理前はいずれも弁柄基調で、胡粉はほとんど用いずに軒裏の裏板も含めて赤く塗装するものであった。

今回明らかにした昭和修理前の塗装は、いずれも建築当初のものではないが、少なくとも近代文化財保存修理の手が加わる前の塗装仕様である。修理によって当寺ならではの塗装を失うこととなったのである。

今回の保存修理にあたっては、昭和修理前の塗装仕様に復旧することが、当寺院の建造物として、より本来の姿になると考えられるため、その提案をしたところである。(御船達雄)

2006 年度の普及活動を振り返って

2006 年度は、はじめに当センターが実施してきた調査や研究の成果を、よりわかりやすい形で県民に還元すべく、中長期的な計画として県内各エリアの地域史をホームページ上などで公開し、発信していくことを企画した。当センターのもつ調査成果や知識の蓄積が、市民の生涯学習や地域学習に活用されることで、身近にある文化財への理解が深まり、街づくりにも文化財が活用されることで、県外から訪れる人も増え、各地域の文化振興につながると考えてのことである。さらに短期的な計画として、調査成果を基に県内の各市町村教育委員会と協力連携して、前年に増して以下のようなイベントを催した。



『地宝のひびき』の様子

地宝のひびき－第1回和歌山県文化財報告会－

兵庫県教育委員会や（財）大阪府文化財センターで行われている担当者研修を参考に、県教育庁と県内の各市町村教育委員会と共催した。内容は、埋蔵文化財の調査を中心に史跡整備事業や普及活動も加



旧吉備中学校校庭遺跡での現地説明会



妙寺小学校児童が西飯降Ⅱ遺跡発掘現場を見学

えて市民に報告するもので、このような形のものは和歌山県では初めての試みである。今後も継続して開催する予定である。



京奈和自動車道遺跡発掘調査での発掘体験
シンポジウム

「高田土居－室町時代の守護拠点から鑄造工房へ」
「弥生時代の終焉－旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査報告会－」

各分野を専攻されている研究者を招き、最新の研究成果や、他地域との比較から多角的にその遺跡と各時代の周辺地域像を討論した。

現地説明会・現地公開

各調査の進展に伴って、その成果をホームページ



旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査での親子体験発掘

での公開や風車、広報誌「京奈和通信」の掲示や配布、新聞報道などで積極的に広報し、数次の説明会や現地公開を行った。「京奈和通信」では市民からの要望もあり、調査成果に先立って、発掘調査の方法やその過程の説明にも努めた。また現地説明会や現地公開の盛会をみて、地元小学校や地元住民のグループからの現地見学希望も多くあった。



考古学基礎講座の様子

発掘体験

実際の遺構を用いた発掘体験実習を2回催した。小学4年生以上を一応の対象に募集したところ、定員を上回る幼児から高学年の児童、親子に夫婦と、予想以上にたくさんの方々の参加を得ることができた。あきっぱい幼児や児童に発掘調査の方法や、道具の使い方教えることの難しさ、掘っても土器が出土しなかったなど、我々調査員も悪戦苦闘した。

速報展「紀州の歩み」

秋季企画展「平安京と紀伊」

2006年度は、当センターの活動拠点として、調査事務所（愛称：きのくに歴史探訪館）を開いた。神戸市埋蔵文化財センターや島根県古代文化セン



きのくに歴史探訪館での 速報展『紀州の歩み』



考古学基礎講座「石製模造品作り」の様子

ターで実施されているように、整理作業も見学できるようにし、すぐ隣に展示室を設けた。恒例の速報展に加えて企画展示と西飯降Ⅱ遺跡から出土した古墳時代の下駄も速報し展示公開した。

考古学基礎講座

「サヌカイトによる石器づくり」

「滑石と紅簾片岩を使った石製模造品づくり」

これまで考古学の基礎を学びたいという市民の声もあって、大人向けの考古学基礎講座を開催した。第1回には10名、第2回には11名の参加者があった。いずれの回も古代の方法で、食べ物を得るための石器と葬送儀礼に使われた石器を製作した。ほとんどの方が初めての石器づくりで悪戦苦闘の結果、最後まで古代の製作法にこだわる人、ついには現代の文明の利器に頼る人も続出。皆思い思いの作品を作った。当時の人々の苦労を思ったことだろう。

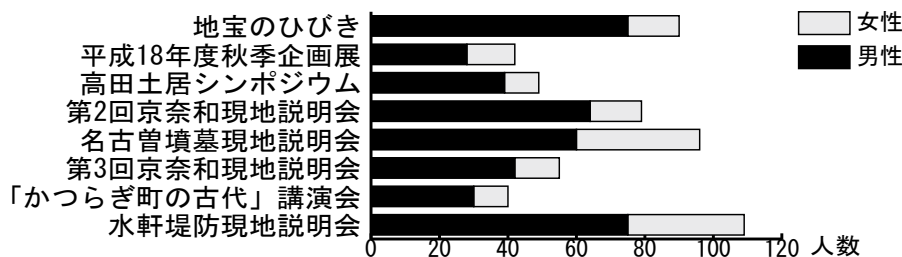
まとめ

各報告会やシンポジウムでは、予想以上の参加者数で、なかには熱心な考古学ファンの参加もあった。それぞれのイベントでは、アンケートを配布し市民の方々からの要望や感想をいただくよう努めた。その回答には、我々の自信に繋がるような回答もあったが、大きなテーマに対して資料に制約があったことや、会の進行などの不備や準備不足へのお叱りもあった。今後のイベント開催での改善すべき点もはっきりしてきた。参加者にはリピーターも多いが、はじめて会に参加してくださる方もある程度あった。参加者の年齢層は高く60歳代が中心であった。中高生から30歳代の方の参加は少ない。イベントの開催を知ったきっかけも、新聞やテレビでの報道に、地元配布されたチラシによるのが大半で、各

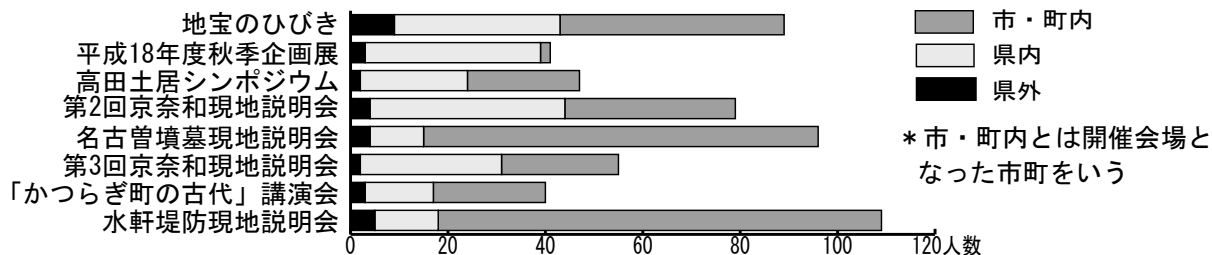
市町村の広報誌への掲載がなかったり新聞報道が少なかったイベントでは、序実に参加者が少なかった。広報の方法、ホームページ開設の効果もまだ見え難い。シンポジウムは市民からの質問も受け付け、参加型の会にするかなど検討が必要であろう。また、きのくに歴史探訪館の教育機関や市町村博物館施設への広報もさらに努力すべきとおもう。

2006年度の普及活動を通してみると、概ね好評いただきある程度の成功を修めたと考えている。参加して下さった市民の方々にも、身近にある文化財の現状に関心をもっていただき、地域学習にも楽しんで参加していただけたのではという手ごたえは感じている。(日置 智・手島芙実子)

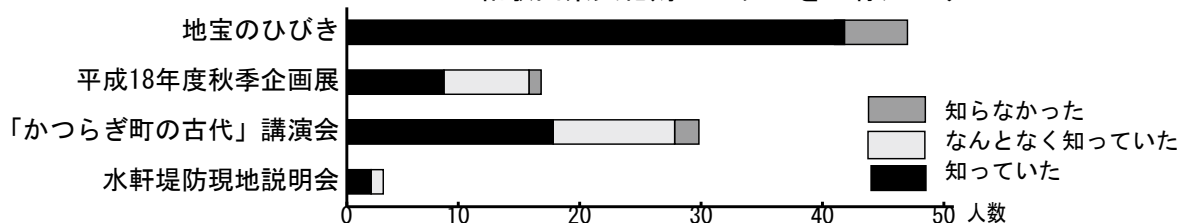
平成18年度実施普及活動参加者数



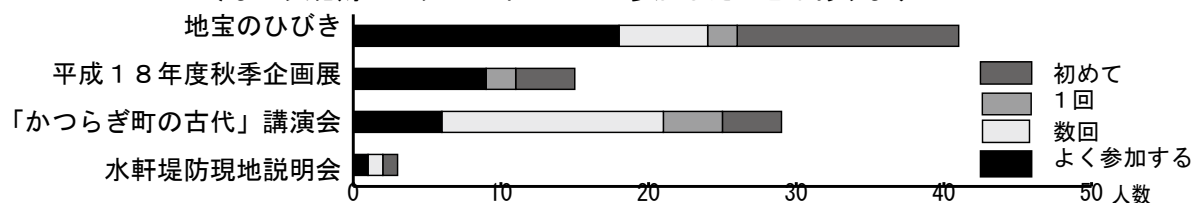
どこから来られましたか？



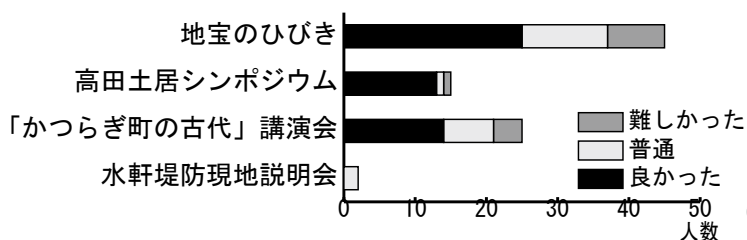
和歌山県文化財センターをご存知ですか？



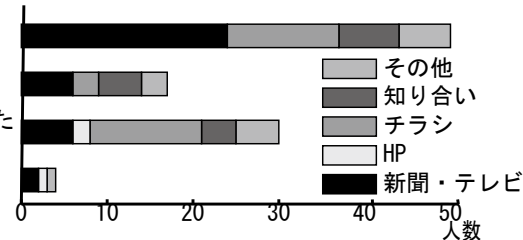
今まで文化財センターのイベントに参加したことはありますか？



イベントの内容はどうでしたか？



イベントの情報をどこで知りましたか？



アンケートの回答結果

歩いて知る紀の国歴史探訪

埋蔵文化財や文化財建造物を核としつつ、周辺の歴史遺産を歩いてまわること、歴史への理解を深めようとして、「歩いて知る紀の国歴史探訪」をのべ3回にわたって、企画して実施した。多数の熱心な参加者が集まった。

第1回目は平成18年10月22日、海南市主催の熊野古道ハイクに協賛して、福勝寺の修復現場の公開を行った。同ハイクは、旧下津町時代から続く恒例イベントで、今回は第11回となる。熊野街道隋一の絶景と古来賞賛されてきた藤白峠を経由するコースであり、小学生でも気軽に完歩出来ることから参加者も多い。

福勝寺の現場公開も昨年度に続き2年連続の開催となったが、現場は本堂の軸部を組み立てた状況で、建物の構造や内部の墨書に間近に触れる好機であった。また、公開に伴い事業の資料を配付し、写真パネルや鬼瓦などの解体部材を展示したほか、大工職人による古材繕いの実演も行った。文化財建造物修理への理解を深めると同時に、一部の歴史ファンだけでなく一般のハイカーにも出来るだけ楽しんでもらえるよう留意し、リピーターを含めたおよそ100名に見学していただけた。

福勝寺は、堂内に残る室町期の参詣者によるおびただしいまでの墨書からも伝わるよう、隣接する熊野街道とはゆかりの深い寺院である。今回の現場公開は、単なる文化財建造物としての行事ではなく、地域における建物の歴史的位置づけを実感できる機会でもあった。（多井 忠嗣）

第2回目は「歩いて知る紀の国歴史探訪－和歌浦の散策－」として、平成18年11月23日に実施した。



福勝寺での古材繕いの展示の様子

講師は当センターの菅原正明、鳴海祥博が担当した。この企画は、和歌浦周辺で過去に文化財センターが調査した遺跡や、保存修理した文化財建造物などの文化財について、見て触れて深く学ぶ、というものであった。コースは不老橋－海禅院－東照宮（重要文化財）－天満神社（重要文化財）をとり、景勝地和歌浦に建つ桃山時代～江戸時代初期の建造物や、妹背山に埋納された経石などについて、専門的な情報をわかりやすく解説するよう心がけた

第3回目は「歩いて知る紀の国歴史探訪－大庄屋旧中筋家住宅と和佐の歴史遺産」として実施した。和歌山県文化財研究会の和歌山支部と文化財センターとの共催事業であった。開催日は平成18年11月25日で、現在保存修理工事中の旧中筋家住宅の修理現場と、周辺の歴史遺産（歓喜寺、和佐王子跡、登録文化財中筋家住宅など）の見学を行った。解説は中筋家の現場を御船が行い、周辺歴史遺産のは和佐歴史研究会の会員が行った。現場での説明の都合上、人数を把握するため、申し込み制としたが、研究会関係での参加者が多く総勢40人となり、県外からの参加者もいて盛況であった。（御船達雄）



旧中筋家住宅長屋蔵前にて



旧中筋家住宅主屋土間での様子

(財)和歌山県文化財センター平成18年度概要

I 受託事業

埋蔵文化財発掘調査受託事業	9 件	文化財建造物保存修理設計監理事業	13 件
埋蔵文化財整理等受託事業	2 件		

II 会議など

理事会	理事会・評議員会	18.05.26	和歌山県日赤会館
評議会	理事会・評議員会	19.03.27	ホテルアバローム紀の国

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係

(1) 第27回総会(松田・渋谷)	18.06.08-09	山口市 ホテルニュータナカ
(2) 第1回近畿ブロックOA委員会(仲原)	18.06.16	向日市文化財資料館
(3) 第33回近畿ブロック主担者会議(渋谷・井石)	18.08.11	向日市中央公民館
(4) 研修会(渋谷)	18.09.21-22	札幌市 ホテルライフオート札幌
(5) 第12回近畿ブロック埋文研修会	18.10.27	和歌山県民文化会館
(6) 事務担当者会議(西本)	18.11.02	長岡京市中央学習センター
(7) 第2回近畿地区OA委員会(仲原)	18.11.17	(財)八尾市文化財調査研究会
(8) 第2回役員会(松田・熊崎・西本)	18.11.30-12.01	日本民家集落博物館
(9) 第34回近畿ブロック主担者会議(渋谷・井石)	19.02.09	長岡京市中央生涯学習センター
(10) 近畿ブロック会議(熊崎・西本)	19.02.23	八尾市文化会館

文化財建造物関係

(1) 文化財建造物保存修理事業監督者会議(鳴海)	18.04.17	文部科学省
(2) 文化財建造物保存事業幹部技術者研修会(鳴海)	18.04.18	学士会館
(3) 文化財建造物保存修理関係者等連絡協議会(鳴海・多井・御船)	18.10.10	東京国立博物館
(4) 文化財建造物保存修理主任技術者研修(鳴海・多井・御船)	18.10.11-12	東京大学

III 講師派遣・執筆など

埋蔵文化財関係

平成18年度日高地方社会科教育研究会総会	18.05.09	川崎雅史
地方史研究会総会「県指定水軒堤防発掘調査」	19.02.18	佐々木宏治
「いにしへの有田」歴史講座	19.03.17	川崎雅史
「原始から中世にわたる多量の木製品の謎ー野田地区遺跡の調査からー」	19.03.17	川崎雅史

文化財建造物課

(社)和歌山県文化財研究会 平成18年度第1回文化財めぐり 太山寺・須磨寺	18.05.11	多井忠嗣
和歌山商工会議所連合会 総会記念講演「橋本市の歴史的町並み」	18.05.29	御船達雄
高野町教育委員会 善通寺市・高野山中学生交流会「高野山大門の話と見学」	18.08.09	鳴海祥博
御坊市企画課 親子町づくり会議「御坊の古いまちなみと歴史について」	18.08.10	鳴海祥博
和歌山県神社庁 研修会「神社建築について」	18.09.16	鳴海祥博
(財)文化財建造物保存技術協会 文化財建造物保存事業主任技術者研修会「福勝寺本堂の構造的特徴と補強」	18.10.11	多井忠嗣
海南市教育委員会 交流センター「交流講座」福勝寺の歴史と文化財修理	18.10.13	多井忠嗣
総本山根来寺 第3回根来寺文化講演会シンポジウム「根来寺坊院の復原」	18.10.14	鳴海祥博
(社)和歌山県文化財研究会 平成18年度第4回文化財めぐり 平等院・宇治上神社・万福寺	18.11.11	鳴海祥博
橋本市まちの歴史資料保存会 第2回講演会「橋本の町と町屋の成り立ち」	18.12.17	御船達雄
御坊市商工振興課 御坊市語り部育成講座「スライドでみる御坊の町屋の特色」	19.01.27	鳴海祥博

IV 埋蔵文化財と文化財建造物のミニ情報誌 文化財センター通信「風車」

第22号	18.03.31	特別史跡岩橋千塚古墳群 大日山35号墳第3次
第23号	18.05.20	「地宝のひびき 第1回和歌山県発掘調査報告会」開催のお知らせ
第24号	18.06.26	「地宝のひびき 第1回和歌山県発掘調査報告会」の概要
第25号	18.07.25	連続特集 重要文化財福勝寺 その5

第 26 号	18.08.26	野田地区遺跡発掘調査の概要
第 27 号	18.10.02	旧中筋家住宅のいまー保存修理の進捗状況
第 28 号	18.10.30	旧吉備中学校校庭遺跡 2 次調査の概要
第 29 号	18.12.12	『土木技術の考古学』の報告
第 30 号	19.01.11	京奈和自動車道遺跡発掘調査 調査の中間報告
第 31 号	19.01.22	「高田土居一室町時代の守護拠点から鑄造工房へー」概要
第 32 号	19.03.05	和歌山城三の丸発掘調査 (県 3 次)
第 33 号	19.03.15	紀三井寺 文化財建造物の保存修理
第 34 号	19.03.30	第 4 回歩いて知るきのくに歴史探訪

V 普及事業

報告会・シンポジウム

地宝のひびき 第 1 回和歌山県文化財調査報告会	於：県立図書館	18.06.03
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会『土木技術の考古学』	於：県民文化会館	18.10.27
「弥生時代の終焉ー旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査報告会ー」	於：きびドーム	18.09.23
第 3 回和歌山県文化財センターシンポジウム「高田土居一室町時代の守護拠点から鑄造工房へー」	於：みなべ町生涯学習センター	18.11.25

紀の国歴史探訪

第 1 回	歩いて知る紀の国歴史探訪	福勝寺	18.10.22
第 2 回	歩いて知る紀の国歴史探訪	和歌浦の歴史散策	18.11.23
第 3 回	歩いて知る紀の国歴史探訪	旧中筋家住宅と和佐の歴史遺産	18.11.25
第 4 回	歩いて知る紀の国歴史探訪	西国三十三箇所観音霊場 第三番札所粉河寺を歩く	18.12.02

埋蔵文化財課

旧吉備中学校校庭遺跡第 2 次	現地見学会	18.07.03	有田川町立田殿小学校 6 年生
	現地公開会	18.07.04	参加者 20 名
	現地見学会	18.07.06	有田川町立藤並小学校 6 年生
	現地見学会	18.07.14	有田川町立藤並小学校 6 年生
	親子発掘体験	18.08.11	有田川町内 4 組
	現地説明会	18.08.26	参加者 82 名
野田地区遺跡	成果報告会	18.08.05	参加者 45 名
京奈和自動車道関連遺跡	現地説明会	18.11.04	
	発掘体験	18.11.04	
	現地見学会	18.11.15	かつらぎ町立妙寺小学校 3・5 年生
	現地見学会	18.11.17	かつらぎ町立妙寺小学校 6 年生
	現地説明会	19.02.24	第 2 回 参加者 79 名
	現地説明会	19.03.10	第 3 回 参加者 55 名
	成果報告会	19.03.24	「かつらぎ町の古代」参加者 40 名
	成果展示	19.03.25	国土交通省 京奈和自動車道起工式
	広報誌	京奈和通信 1 ～ 6、号外 1 ～ 3	
県指定史跡 水軒堤防	現地説明会	19.03.25	参加者 109 名
粉河寺遺跡	現地説明会	18.12.02	参加者 80 名
名古曾墳墓	現地説明会	19.03.03	参加者 96 名
速報展・企画展	於：きのくに歴史探訪館		
「紀州の歩み」文化財センター第 16 回速報展		18.06.26 ～ 09.29	
関連講座 第 1 回考古学講座「サヌカイトによる石器作り」		18.07.02	
平成 18 年度秋季企画展「平安京と紀伊」		18.11.06 ～ 12.22	
関連講座 第 1 回文化財講座		18.11.11	
	上村和直氏「都の土器」(財) 京都市埋蔵文化財研究所		
	第 2 回文化財講座	18.12.09	
	北野隆亮氏「紀伊の土器」(財) 和歌山市都市整備公社		
考古学基礎講座	於：きのくに歴史探訪館		
	第 1 回 サヌカイトによる石器づくり	18.07.02	
	第 2 回 滑石と紅簾片岩を使った石製模造品づくり	18.12.10	
整理体験	於：きのくに歴史探訪館		
	出土遺物整理体験	18.11.28	
研修	於：きのくに歴史探訪館		
	日高地方社会科教育研究会	18.08.08	

文化財建造物課

重要文化財旧中筋家住宅

現場見学会	18.06.25	橿原自治会
現場見学会	18.07.21	NPO法人 木の建築フォーラム
現場見学会	18.08.08	有田川町教育委員会、子ども古代探検隊
現場見学会	18.09.30	朝日カルチャーセンター
現場見学会	18.11.25	「第3回歩いて知る紀の国歴史探訪」文化財センター・文化財研究会共催
総合学習授業	19.01.23	和歌山県立和歌山東高等学校

重要文化財福勝寺

現場見学会	18.08.30	海南市教育委員会、新規採用職員研修会
現場見学会	18.10.22	海南市商工振興課、海南まるごと体験ツアー（熊野古道わくわくハイク）
社会見学授業	18.12.08	海南市加茂第一小学校

重要文化財護国院（紀三井寺）

現場見学会	19.02.24	「見て知る伝統技術」県教委、市教委共催
-------	----------	---------------------

VI 和歌山県文化財センター組織表

理事長 1 名	理事 6 名	専務理事	事務局長	管理課
副理事長 2 名	評議員 14 名			埋蔵文化財課
専務理事 1 名	監事 2 名			文化財建造物課

VII 職員名簿

専務理事	松田長次郎				
事務局長	熊崎訓自				
文化財専門員	富加見泰彦				
管理課	課長	西本悦子	3月退職		
	副主査	松尾克人			
	副主査	出口由香子			
	事務補助員	菅原正明			
埋蔵文化財課	課長	渋谷高秀		文化財建造物課	課長
	課長補佐	井石好裕			鳴海祥博
	課長補佐	前田義明	8月赴任		主査
	主任	土井孝之			多井忠嗣
	主任	村田弘			副主査
	主任	佐伯和也			寺本就一
	副主査	佐々木宏治			鈴木徳子
	副主査	仲原知之			9月退職
	技師	川崎雅史			御船達雄
	技師	日置智			非常勤技術補佐員
	非常勤専門調査員	辰巳陽一	6月退職		稲田朋実
	非常勤専門調査員	北森さやか	12月退職		3月退職
	非常勤専門調査員	手島美実子			赤土友佳子
					3月退職

**財団法人
和歌山県文化財センター年報
2006(平成18)年度**

2007年 5月

■発行

財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山県和歌山市湊 571-1

TEL (073)-433-3843

FAX (073)-425-4595

HP <http://www.wabunse.or.jp/>

■編集DTP担当

日置 智 / 手島 芙実子 / 御船 達雄 / 大嶋 奈美

■印刷

株式会社 協和

(財) 和歌山県文化財センター
<http://www.wabunse.or.jp/>

